

北海道立北見農業試験場年報

平成18年度

平成19年6月

北海道立北見農業試験場

(常呂郡訓子府町字弥生52番地)

目 次

I 概況

1	沿革	1
2	位置	1
3	土壌	1
4	土地面積および利用区分	1
5	機構	2
6	職員	2
7	建物	4
8	新たに設置した主要施設および備品	4
9	決算	5

II 作況

1	気象経過	6
2	当場の作況	9

III 試験研究および専門技術活動の概要

1	概要	
1)	作物研究部	19
2)	生産研究部	20
3)	技術普及部	21
2	作物研究部の成績概要	
1)	畑作園芸科	23
2)	馬鈴しょ科	32
3)	麦類科	35
4)	牧草科	48
3	生産研究部の成績概要	
1)	栽培環境科	50
2)	病虫科	53
4	技術普及部の成績概要	
1)	技術体系化チームの研究	56

IV 研究発表および普及事項

1	研究発表	
1)	研究論文	59
2)	口頭発表	59
3)	専門雑誌記事	61
4)	著編書・資料	62
5)	新聞記事	62

2	普及事項	
1)	普及奨励事項	63
2)	普及推進事項	63
3)	指導参考事項	63

V 研究企画・調整・出版・広報

1	諸会議	64
2	各種委員会	64
3	刊行印刷	67
4	広報活動	67
5	見学・参観受入れ	69

VI 技術指導および研修

1	研修生の受入れ	71
2	講師派遣	71
3	職員研修	73
4	職場研修	73
5	国際交流	73

VII その他

1	技術体系化チーム	74
2	表彰・受賞	74
3	行事	75
4	建物配置図	76
5	圃場配置図	77

I 概 況

1 沿 革

当場は、明治40年に北海道庁立地方農事試験場北見分場（地方費）として、北見国野付牛村（現北見市）に設置された。翌明治41年には、北海道庁立上川農事試験場北見分場となり、さらに明治43年には、第1期北海道拓殖計画の実施に伴って国費に移管され、北海道農事試験場北見支場と改称された。その後、昭和17年には、北海道農業試験場北見支場となり、同19年には組織改正により、北海道農業試験場稚内分場が同北見支場稚内分場と改称され、当場の所管となった。また昭和22年には、農林省札幌農事改良実験所北見試験地が場内に置かれ、はっか育種を担当した。

昭和25年に、農業試験研究機関の統廃合が行われ、北海道立農業試験場北見支場が設置された。同時に、当場の所管であった稚内分場は廃止され、また札幌農事改良実験所北見試験地のはっか育種業務も、遠軽町に新設された北海道農業試験場所管の試験地に移された。道立農業試験場の整備拡充が検討され、昭和31～34年に訓子府町の現在地へ移転した。

昭和29年から専門技術員が駐在するようになった。また同年には大麦指定試験地の設置が決まり、女満別町（道立農試原々種農場女満別分場跡地）に試験地を置いて大麦育種を実施したが、昭和33年には、それも訓子府へ移した。しかし大麦栽培面積の減少により、昭和36年には小麦指定試験に切り替えられた。さらに、昭和39年には、チモシー、スムーズブロムグラス育種のため牧草指定試験地が設置された。昭和39年11月に、道立農業試験場の機構改革が行われ、当場は北海道立北見農業試験場と改称、併せて内部機構も1課7科となった。昭和44年には、技術普及部門強化のため専門技術員室が設置され、その後2～3の科名の変更や係の統廃合などがあり、平成4年には、管理科および研究各科を主管する研究部長を設置するほか、畑作園芸科を再編し園芸科に、病虫害予察科を病虫害科にそれぞれ変更した。平成8年3月には、機構改

革により水稻試験地が閉所となった。

平成10年4月に馬鈴しょの耐病性育種を強化するため、馬鈴しょ科（指定試験）が根釧農試より移転した。

平成12年4月には、「道立農業試験場新研究基本計画」に基づく地域対応強化のため、研究部を作物・生産の2部制とし、専技と技術体系化チームからなる技術普及部を新設した。また、園芸科と作物科を統合し畑作園芸科にするとともに土壤肥料科を栽培環境科に変更した。

平成18年4月には、小麦科を麦類科に改称した。また、専門技術員を廃止し、主任普及指導員、主査[地域支援]を設置するとともに総務課会計係を廃止し、主査[会計]を設置した。

2 位 置

当場の住所は、常呂郡訓子府町字弥生52番地で、北見バス訓子府駅停留所から北西へ約4kmの所にある（北緯43° 45'、東経143° 43'、海拔196m）。また旧水稻試験地は、同町若葉町99番地にあり、訓子府駅から西へ約1km（海拔136m）のところにある。

3 土 壤

当場周辺の畑土壌は、表層が数枚の薄い新期火山灰で被覆された凝灰岩質の洪積土で、腐植にすこぶる富む土壌である。また旧水稻試験地の土壌は常呂川に由来する沖積土で、心土は礫の多い砂土である。

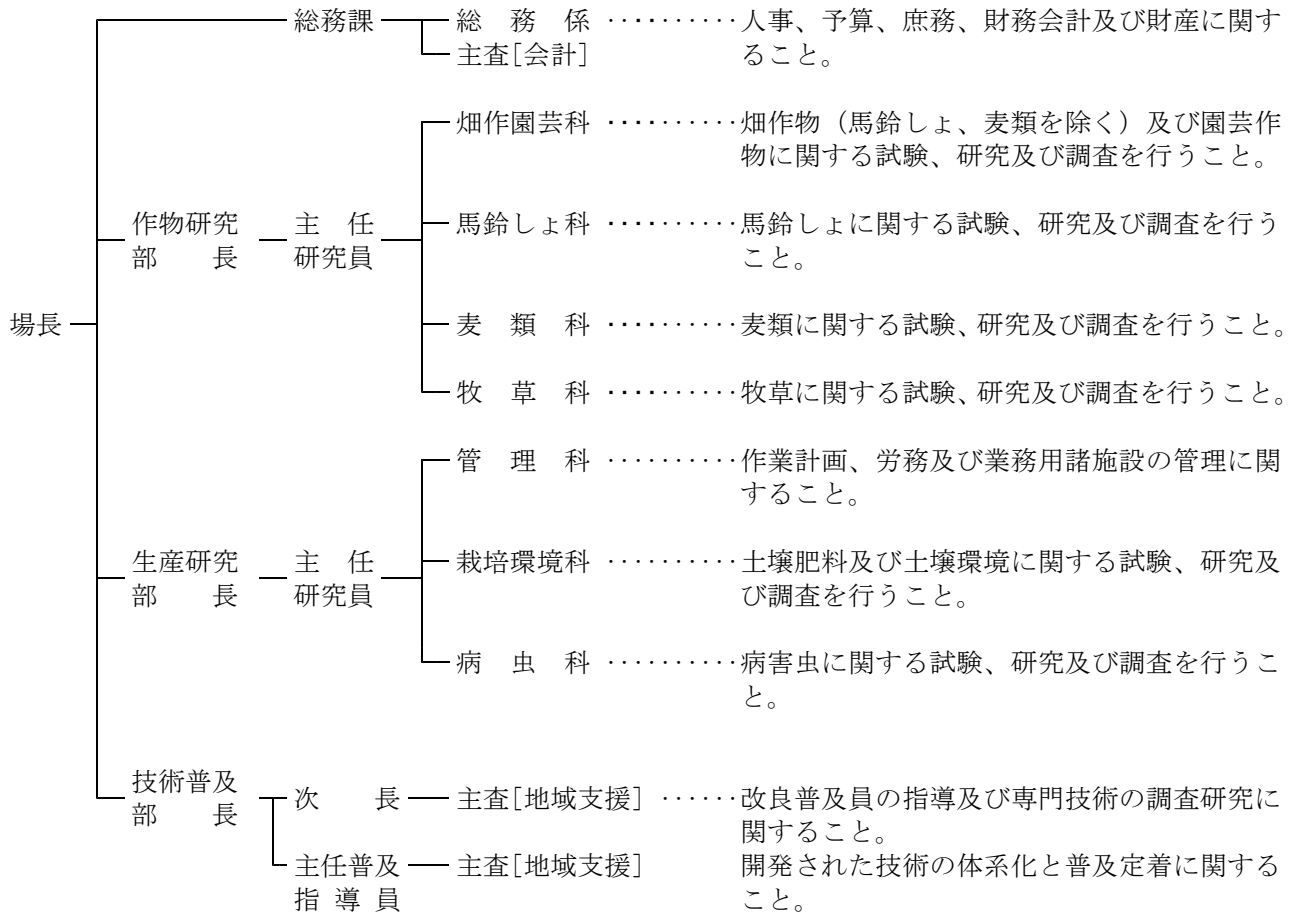
4 土地面積および利用区分

総面積1,557,688㎡

区 分	面 積 (㎡)
庁 舎 、 建 物 敷 地	118,564
公 宅 用 地	44,151
道 路 、 用 排 水 路	42,383
山 林	300,400
試 験 ほ 場 (畑)	709,705
” (隔離ほ場)	73,260
原 野 、 そ の 他	269,225

注) 上記のうち54,985㎡は旧水稻試験地

5 機 構



6 職 員

(1) 職員の配置

平成19年3月31日現在

課(科)別 区 分	場 長	部 長	主 任 研究員	次 長	普及指 導員 ・主査	総務課	畑 作 園芸科	馬 鈴 しょ科	麦類科	牧草科	管理科	裁 培 環境科	病虫科	合 計
技術吏員	研究職	1	2	3	1	1	5	3	6	4	(1)	3	4	33
	行政職		1			2	5				7			15
事務吏員	行政職					1								1
計		1	3	3	1	3	5	3	6	4	7(1)	3	4	49

注) 管理科の () は主任研究員兼管理科長。

非常勤職員 (管理科) を含む。

(2) 平成19年3月31日現在員

職名	身分	氏名	職名	身分	氏名
場長	技術吏員	吉田 俊幸	<生産研究部> 部長	技術吏員	原 令幸
総務課長	技術吏員	井上 千秋	主任研究員	〃	三浦 周
総務係長	技術吏員	高内 良一	管理科長(兼)	〃	宮本 裕之
指導主任	事務吏員	加藤 和憲	業務主任兼指導主任	〃	三浦 和利
主任	技術吏員	河口 裕	農業技能員兼主任	〃	高山 榮一
技師	〃	高倉 仁司	〃	〃	伊藤 幸雄
主査[会計]	〃	竹内 豊	〃	〃	沢田 敏樹
			〃	〃	佐々木 盛久
<作物研究部> 部長	技術吏員	吉良 賢二	農業技能員兼主事	〃	中東 淳
主任研究員	〃	宮本 裕之	非常勤農業技能員	非常勤職員	渡辺 孝吉
〃	〃	入谷 正樹	栽培環境科長	技術吏員	中村 隆一
畑作園芸科長	〃	西田 忠志	研究職員	〃	鈴木 慶次郎
研究職員	〃	黒崎 英樹	〃	〃	唐 星児
〃	〃	柳田 大介	病虫科長	〃	古川 勝弘
〃	〃	山田 誠司	研究主査	〃	池谷 美奈子
〃	〃	野田 智昭	研究職員	〃	美濃 健一
〃	〃	千田 圭一	〃	〃	山名 利一
馬鈴しょ科長*	〃	池谷 聡	<技術普及部> 部長	技術吏員	東田 修司
研究職員	〃	藤田 涼平	次長	〃	柳沢 朗
〃	〃	吉村 康弘	主任普及指導員	〃	大久保 利道
麦類科長*	〃	中道 浩司	主査[地域支援]	〃	五十嵐 強志
研究職員	〃	小林 聡	〃	〃	江部 成彦
〃	〃	西村 努			
〃	〃	池永 充伸			
〃	〃	佐藤 奈奈			
牧草科長*	〃	佐藤 公一			
研究職員	〃	玉置 宏之			
〃	〃	足利 和紀			
〃	〃	田中 常喜			

* 農林水産省指定試験主任兼務

(3) 転入者および採用者

職名	氏名	発令年月日	備考
作物研究部長	吉良 賢二	18. 4. 1	中央農試から
技術普及部長	東田 修司	〃	上川農試から
総務課長	井上 千秋	〃	南羊蹄普及センターから
主任研究員	三浦 周	〃	天北農試から
総務係長	高内 良一	〃	根釧農試から
主査(地域支援)	五十嵐 強志	〃	日高中部普及センターから
主査(地域支援)	江部 成彦	〃	十勝農試から
研究職員	唐 星児	〃	中央農試から

(4) 転出者および退職者

職 名	氏 名	発令年月日	備 考
技術普及部長	桃野 寛	18. 4. 1	中央農試へ
総務課長	船橋 秀明	〃	農業大学校へ
主任研究員	赤司 和隆	〃	道南農試へ
主任専門技術員	五十嵐 龍夫	〃	網走普及センターへ
主任専門技術員	佐藤 宏	〃	空知普及センターへ
主任専門技術員	北畠 国昭	〃	渡島普及センターへ
総務係長	中川 政宏	〃	宗谷支庁へ
研究職員	林 哲央	〃	花・野菜センターへ
主任	小林 英範	18. 5. 1	畜産試験場へ
場長	吉田 俊幸	19. 3. 31	退職

7 建 物

区 分	本 場	旧水稻試験地	計	備 考
公 用 財 産	$\frac{11,214.69}{9,872.77}$	$\frac{135.53}{135.53}$	$\frac{11,350.22}{10,008.30}$	
普 通 財 産	$\frac{96.05}{70.49}$	$\frac{1,385.34}{1,385.34}$	$\frac{1,481.39}{1,455.83}$	
共 済 住 宅 (物置除く)	$\frac{1,381.19}{1,071.39}$	$\frac{428.13}{428.13}$	$\frac{1,809.32}{1,499.52}$	
計	$\frac{12,691.93}{11,014.65}$	$\frac{1,949.00}{1,949.00}$	$\frac{14,640.93}{12,963.65}$	

注 : $\frac{\text{延面積 } \text{m}^2}{\text{建面積 } \text{m}^2}$

8 新たに設置した主要施設および備品

(1) 施 設

該当なし

(2) 備 品

名 称	形 式	金 額	配 置
自走式ロータリーモア	東興産業(株) GX355型(48C)	1,890,000	総務課
馬鈴薯重量選別機	(株)横崎製作所 BMES-648-AFDM	1,930,000	馬鈴しょ科
薬用冷蔵ショーケース	三洋電機(株) MPR-513	483,000	病虫科
フラワーカラーグレーダー	Tinsley社 マーク4型	3,034,500	麦類科
高速液体クロマトグラフ	(株)日立ハイテクノロジーズ LaChrom Elite	8,694,000	馬鈴しょ科
インキュベータ	アミノ酸分析システム(L2000シリーズ) 三洋電機(株) MIR-253	861,000	馬鈴しょ科

9 決 算

(1) 歳出決算額（一般職員給与関係を除く）

（単位：円）

科 目	予 算 額	支 出 済 額	残 額	備 考
共 済 費	8,660,817	7,583,411	1,077,406	
賃 金	50,168,715	48,548,008	1,620,707	
報 酬	4,502,000	4,472,939	29,607	
旅 費	25,602,239	21,524,947	4,077,292	
需 用 費	62,659,429	62,233,765	425,664	
役 務 費	9,098,864	8,095,572	1,003,292	
委 託 料	13,134,000	11,261,067	1,872,933	
使用料及び賃借料	6,207,000	5,913,830	293,170	
工 事 請 負 費	23,463,000	23,462,550	450	
備 品 購 入 費	18,819,000	18,771,602	47,398	
負担金補助及び交付金	107,000	106,000	1,000	
公 課 費	347,600	266,900	80,700	
賠 償 金	0	0	0	
合 計	222,769,664	212,240,045	10,529,619	

(2) 歳入決算額

（単位：円）

科 目	調 定 額	収 入 済 額	収 入 未 済 額	備 考
建 物 使 用 料	35,000	35,000	0	
土 地 使 用 料	46,460	46,460	0	
公 宅 貸 付 収 入	0	0	0	
農 産 物 売 払 収 入	730,755	730,755	0	
林 産 物 売 払 収 入	0	0	0	
道立試験研究機関試験研究受託事業収入	82,227,000	82,227,000	0	
共同研究費負担収入	10,000,000	10,000,000	0	
委 託 電 話 収 入	2,765	2,765	0	
労 働 保 険 料 収 入	422,787	422,787	0	
合 計	93,464,767	93,464,767	0	

Ⅱ 作 況

1 気象経過

1) 融雪期以降の経過

4月：平均気温は上・中旬は平年より極めて低く、下旬は平年より低かった。日平均気温の月平均は1.7℃で平年より-2.9℃と極めて低かった。降水量は各旬とも平年より極めて多く、月合計は98.0mmで平年より極めて多かった。日照時間は上・中旬は平年よりやや短く、下旬は平年並であり、月合計は115.2時間で平年よりやや短かった。

5月：平均気温は上旬は平年よりやや低く、中旬は平年より極めて高く、下旬は平年よりやや低かった。日平均気温の月平均は10.8℃で平年並み(+0.2℃)であった。降水量は上旬・中旬は平年並みで、下旬は平年より極めて多く、月合計は92.5mmで、平年より多かった。日照時間は上・中旬は平年より長く、下旬は平年並であり、月合計は186.5時間で平年よりやや長かった。

6月：平均気温は上旬は平年より低く、中旬は平年よりやや低く、下旬は平年よりやや高かった。日平均気温の月平均は14.0℃で平年並み(-0.4℃)であった。降水量は上旬は平年よりやや多く、中旬は平年より少なく、下旬は平年並みであり、月合計は49.5mmで、平年並みであった。日照時間は上・中旬は平年よりやや短く、下旬は平年並であり、月合計は202.6時間で平年より長かった。

7月：平均気温は上旬は平年より高く、中旬は平年よりやや高く、下旬は平年より低かった。日平均気温の月平均は18.7℃で平年並み(+0.3℃)であった。降水量は上・下旬は平年より少なく、中旬は平年よりやや多く、月合計は62.5mmで、平年より少なかった。日照時間は上旬は平年より極めて長く、中旬は平年よりやや短く、下旬は平年より長く、月合計は181.6時間で平年より長かった。

8月：平均気温は各旬とも平年より極めて高かった。日平均気温の月平均は22.0℃で平年より+3.4℃と極めて高かった。降水量は上旬は平年よりやや少なく、中旬は平年より極めて多く、下旬は平

年より多く、月合計は279.5mmで、平年より極めて多かった。日照時間は上・下旬は平年より長く、中旬は平年並であり、月合計は169.6時間で平年よりやや長かった。

9月：平均気温は上・中旬は平年よりやや高く、下旬は平年並みであった。日平均気温の月平均は15.3℃で平年より+0.5℃とやや高かった。降水量は上・中旬は平年より少なく、下旬は平年より多く、月合計は75.0mmで、平年より少なかった。日照時間は上・中旬は平年並み、下旬は平年より長く、月合計は159.1時間で平年よりやや長かった。

10月：平均気温は上旬は平年よりやや高く、中旬は平年並み、下旬は平年より低かった。日平均気温の月平均は7.8℃で平年より-0.7℃とやや低かった。降水量は上旬は平年より極めて多く、中旬は平年より多く、下旬は平年より極めて少なく、月合計は193.0mmで、平年より極めて多かった。日照時間は各旬とも平年並みで、月合計は168.0時間で平年並みであった。

11月：平均気温は上旬は平年より極めて高く、中旬は平年よりやや高かった。日平均気温の中旬までの平均は4.6℃で平年より+2.4℃と高かった。降水量は上・中旬ともは平年より極めて多く、中旬までの合計は59.5mmで、平年より極めて多かった。日照時間は上旬は平年並み、中旬は平年並みで、中旬までの合計は68.2時間で平年並みであった。

注) 降水量、日照時間についての平年値との比較表現は、各旬における過去10年間の出現値の幅に基づいているため、「平年並」に含まれる値の範囲は旬毎に異なる。

農耕期間中(5月～9月)の気温、降水量及び日照時間の推移を平年と比較すると以下のとおりである。

気 温：5月、6月、7月は平年並み(+0.3℃)8月は平年より極めて高く、9月は、平年より

やや高かった。この期間の平均気温の積算値は2474.0℃（平年比+120.3℃）であった。

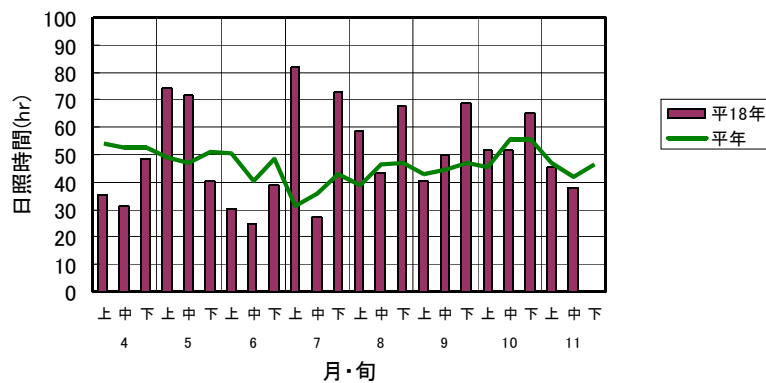
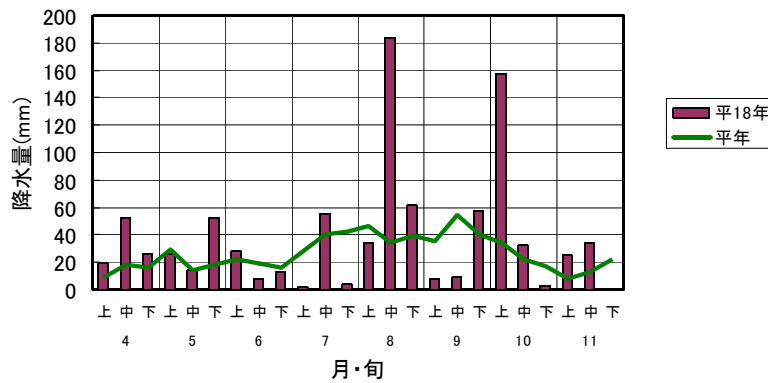
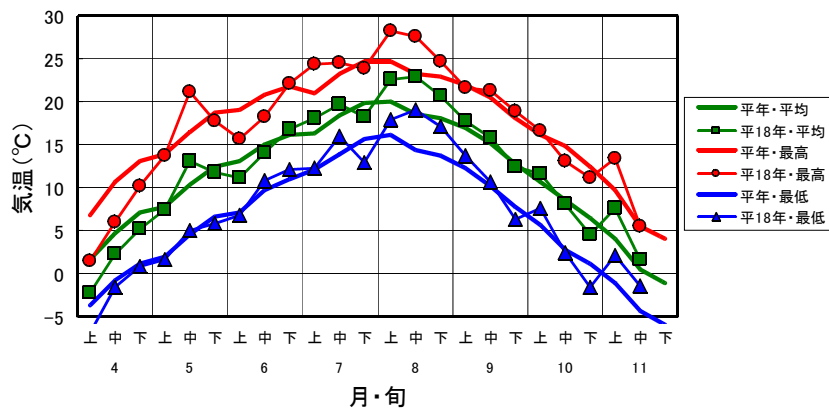
降水量：5月は平年より多く、6月は平年並み、7月は平年より少なく、8月は平年より極めて多く、9月は平年より少なかった。この期間の降水量の積算は559.0mm（平年比+68.9mm）であった。

日照時間：5月、8月は平年よりやや長く、6

月、7月、9月は平年より長かった。この期間の日照時間の積算は899.4時間（平年比+263.1時間）であった。

以上のことから、本年の農耕期間中の気象は、気温は平年よりやや高く、降水量は平年並み、日照時間は平年より長かった。

気温、降水量及び日照時間の平年との比較



気象表

月・旬	平均気温(°C)			最高気温(°C)			最低気温(°C)			降水量(mm)			日照時間(hr)			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
4	上	-2.3	1.6	△ 3.9	1.5	6.7	△ 5.2	-6.9	-3.8	△ 3.1	19.0	9.5	9.5	35.2	54.0	△ 18.8
	中	2.3	4.7	△ 2.4	6.0	10.6	△ 4.6	-1.6	-0.8	△ 0.8	52.5	18.0	34.5	31.3	52.4	△ 21.1
	下	5.1	7.0	△ 1.9	10.1	13.1	△ 3.0	0.8	1.1	△ 0.3	26.5	15.9	10.6	48.7	52.3	△ 3.6
5	上	7.4	7.8	△ 0.4	13.7	13.9	△ 0.2	1.5	1.9	△ 0.4	26.0	28.8	△ 2.8	74.4	49.2	25.2
	中	13.1	10.3	2.8	21.1	16.4	4.7	4.9	4.5	0.4	14.0	13.8	0.2	71.5	47.1	24.4
	下	11.8	12.5	△ 0.7	17.8	18.7	△ 0.9	5.8	6.6	△ 0.8	52.5	18.0	34.5	40.6	50.8	△ 10.2
6	上	11.2	13.0	△ 1.8	15.7	19.1	△ 3.4	6.8	7.1	△ 0.3	28.0	22.4	5.6	30.2	50.3	△ 20.1
	中	14.1	15.0	△ 0.9	18.3	20.9	△ 2.6	10.8	9.6	1.2	8.0	19.6	△ 11.6	24.7	40.5	△ 15.8
	下	16.8	16.2	0.6	22.0	21.7	0.3	12.1	11.0	1.1	13.5	16.0	△ 2.5	38.7	48.3	△ 9.6
7	上	18.1	16.3	1.8	24.3	21.0	3.3	12.3	12.1	0.2	2.0	28.1	△ 26.1	81.7	31.5	50.2
	中	19.7	18.3	1.4	24.6	23.2	1.4	16.0	13.9	2.1	56.0	40.4	15.6	27.3	36.1	△ 8.8
	下	18.3	19.9	△ 1.6	23.9	24.7	△ 0.8	12.9	15.6	△ 2.7	4.5	42.6	△ 38.1	72.6	43.1	29.5
8	上	22.5	20.0	2.5	28.2	24.6	3.6	17.9	16.2	1.7	34.5	46.8	△ 12.3	58.4	38.7	19.7
	中	23.0	18.6	4.4	27.6	23.2	4.4	19.1	14.3	4.8	183.5	34.2	149.3	43.3	46.3	△ 3.0
	下	20.6	18.1	2.5	24.6	22.8	1.8	17.0	13.7	3.3	61.5	38.9	22.6	67.9	47.0	20.9
9	上	17.7	17.0	0.7	21.6	21.9	△ 0.3	13.7	12.2	1.5	8.5	35.0	△ 26.5	40.5	43.1	△ 2.6
	中	15.8	15.2	0.6	21.4	20.4	1.0	10.7	10.2	0.5	9.0	54.1	△ 45.1	49.9	44.2	5.7
	下	12.4	12.7	△ 0.3	18.9	18.0	0.9	6.3	7.7	△ 1.4	57.5	40.0	17.5	68.7	46.9	21.8
10	上	11.6	10.7	0.9	16.6	16.2	0.4	7.6	5.6	2.0	157.5	34.8	122.7	51.3	45.4	5.9
	中	8.1	8.6	△ 0.5	13.1	14.9	△ 1.8	2.5	2.7	△ 0.2	32.0	22.6	9.4	51.7	55.7	△ 4.0
	下	4.5	6.4	△ 1.9	11.1	12.4	△ 1.3	-1.7	1.2	△ 2.9	3.5	17.1	△ 13.6	65.0	55.4	9.6
11	上	7.6	4.1	3.5	13.4	9.7	3.7	2.1	-1.1	3.2	25.0	8.3	16.7	45.6	46.9	△ 1.3
	中	1.6	0.4	1.2	5.6	5.4	0.2	-1.4	-4.4	3.0	34.5	13.0	21.5	38.0	41.7	△ 3.7

注) 観測値は置戸町境野のアメダスによる。平年値は前10か年の平均値である。

季節表

項目	前年 根雪始 月日	融雪期 月日	根雪 期間 日数	耕鋤 始 月日	降雪 終 月日	晩霜 月日	初霜 月日	無霜 期間 日数	降雪 始 月日	農耕期間の積算(5～9月)		
										平均気温 (度)	降水量 (mm)	日照時間 (h)
本年	12. 5	4. 21	137	5. 2	5. 2	5. 7	10. 14	159	10. 22	2474. 0	559. 0	899. 4
平年	11. 29	4. 10	133	4. 25	4. 29	5. 16	10. 10	145	10. 30	2353. 7	490. 1	636. 3
比較	6	11	4	7	3	△ 9	4	14	△ 8	120. 3	68. 9	263. 1

注) 農耕期間の積算は置戸町境野のアメダス観測値により、それ以外は北見農試観測値である。

2 当場の作況

本作況報告は北海道立北見農業試験場の平年値に対する生育良否に基づいたものであり、網走支庁管内全体を代表するものではありません。

1) 秋まき小麦(平成17年9月播種)

作況：不良

事由：播種期はほぼ平年並で、播種後の気温が平年より高く推移したため、出芽期以降の生育は良好で、越冬前の生育は草丈、茎数とも平年を上回った。根雪始は12月5日で平年より6日遅く、融雪期は平年より11日遅い4月21日で、根雪期間は平年より4日長い137日間であった。雪腐病は軽微な発生が認められたが、生育に影響は無かった。融雪期以降、気温は5月中下旬は高温で経過した以外は、概ね低温で経過し、出穂期は早生品種で平年並であったが、やや早生～中生品種では低温

の影響を受け、平年より3～4日遅れた。この間の草丈はほぼ平年並で、茎数は分けつの無効化が進み、平年をやや下回っていた。6月下旬以降、天候は回復傾向であったが、7月下旬の気温が平年より低く推移したため、登熟が緩慢となり成熟期は平年より4～5日遅れた。倒伏は強稈性の劣る一部品種で発生したにとどまった。穂数は平年並であったが、穂長は平年よりやや短く、1穂粒数は平年より少ないものと思われた。子実重は平年より低く、特に「タクネコムギ」「ホクシン」では平年の8割程度であった。千粒重は平年並かやや上回った。リットル重は平年並かやや下回った。検査等級は「ホクシン」「ホロシリコムギ」で1等、「タクネコムギ」で2等であった。

以上のことから本年の作況は「不良」である。

調査項目	タクネコムギ			ホクシン			ホロシリコムギ		
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較
播種期 (平成17年月.日)	9.16	9.15	1	9.16	9.17	△ 1	9.16	9.16	0
出芽期 (平成17年月.日)	9.22	9.24	△ 2	9.22	9.25	△ 3	9.22	9.24	△ 2
出穂期 (平成18年月.日)	6.6	6.6	0	6.13	6.10	3	6.16	6.12	4
成熟期 (平成18年月.日)	7.25	7.20	5	7.27	7.23	4	7.31	7.27	4
草丈(cm) (平成17年11月20日)	23.0	21.9	1.1	23.1	20.0	3.1	23.7	21.1	2.6
草丈(cm) (平成18年5月20日)	41.0	40.8	0.2	40.5	38.7	1.8	40.2	44.3	△ 4.1
草丈(cm) (平成18年6月20日)	105.3	102.3	3.0	90.0	90.9	△ 0.9	91.1	98.0	△ 6.9
茎数(本/m ²) (平成18年11月20日)	2301	2066	235	1896	1615	281	2154	1807	347
茎数(本/m ²) (平成18年5月20日)	1224	1338	△ 114	1217	1307	△ 90	1269	1348	△ 79
茎数(本/m ²) (平成18年6月20日)	923	867	56	749	747	2	741	724	17
稈長(cm) (7月20日)	102	94	8	90	83	7	105	97	8
穂長(cm) (7月20日)	7.0	7.6	△ 0.6	7.6	8.3	△ 0.7	7.8	8.3	△ 0.5
穂数(本/m ²) (7月20日)	822	839	△ 17	706	698	8	685	638	47
子実重(kg/10a)	443	538	△ 95	515	623	△ 108	541	582	△ 41
同上平年比 (%)	82	100	△ 18	82	100	△ 18	93	100	△ 7
リットル重 (g)	802	808	△ 6	812	814	△ 2	793	807	△ 14
千粒重 (g)	40.3	37.3	3.0	40.1	39.0	1.1	43.5	43.5	0.0
品質 (検査等級)	2	1	1	1	1	0	1	2	△ 1

注) 平年値は前7か年中、「タクネコムギ」、「ホクシン」は平成14年(最凶)、15年(最豊)、「ホロシリコムギ」は平成11年(最凶)、15年(最豊)を除く5か年の平均。「ホクシン」の播種量は255粒/m²、その他の品種の播種量は340粒/m²。

2) 秋まき小麦(平成18年9月播種)

作 況：平年並

事 由：播種は平年より1～2日早い9月15日に行なった。出芽は9月22日で良好であった。出芽期となった9月下旬から10月上旬の気温は平年並からやや高く推移したが、同時期の降水量は平年より多く、特に10月7日から9日までの降水量は合計14

5.5mmに達し、その後、圃場の土壌水分は高い状態が続いた。また、10月中下旬の気温は平年並から低く推移したため、生育はやや緩慢となった。草丈、茎数は平年を下回っているが、主茎葉数は5枚、茎数は1,600本/m²前後確保し、越冬態勢としては十分である。

以上のことから目下の作況は「平年並」である。

調査項目	タクネコムギ			ホクシン			ホロシリコムギ		
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	本年	平年	比較
播種期 (平成18年月・日)	9.15	9.16	△ 1	9.15	9.17	△ 2	9.15	9.16	△ 1
出芽期 (平成18年月・日)	9.22	9.23	△ 1	9.22	9.25	△ 3	9.22	9.24	△ 2
草丈(cm) (平成18年11月20日)	16.3	21.8	△ 5.5	16.5	19.6	△ 3.1	17.6	21.1	△ 3.5
茎数(本/m ²) (平成19年11月20日)	1686	2137	△ 451	1515	1690	△ 175	1568	1807	△ 239

注) 平年値は前7か年中、「タクネコムギ」、「ホクシン」は平成14年(最凶)、15年(最豊)、「ホロシリコムギ」は平成15年(最豊)、18年(最凶)を除く5か年の平均。「ホクシン」の播種量は255粒/m²、その他の品種の播種量は340粒/m²。

3) 春まき小麦

作 況：良

事 由：融雪期が遅れたため、播種期は4月27日で平年より5日遅かった。播種後は低温傾向が続き、出芽期は5月9日で平年より3～4日遅れた。そのため、5月は草丈・茎数ともに平年を下回った。6月上旬以降も生育はやや遅れていたが、栄養生長が延長され、草丈は平年並で茎数が平年よりやや多くなった。出穂期は平年より1週間程度遅れた。7月上旬を除き、日照は少なく経過しており、

生育はやや徒長気味となり、稈長は平年より長く、穂長は平年並で、穂数は多くなった。8月上旬の高温により成熟期は平年並となり、登熟期間が短くなった。このため千粒重は軽くなったが、日照時間が多く概ね良好に登熟しており、生育量が多かったことから、子実重は多収となった。検査等級は1等であり、「ハルユタカ」は平年を上回った。

以上のことから本年の作況は良である。

調査項目	ハルユタカ			春よ恋			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期 (月・日)	4.27	4.22	5	4.27	4.22	5	
出芽期 (月・日)	5.9	5.5	4	5.9	5.6	3	
出穂期 (月・日)	6.29	6.22	7	6.28	6.22	6	
成熟期 (月・日)	8.8	8.8	0	8.8	8.7	1	
草丈(cm)	(5月20日)	13.3	17.0	△ 3.7	13.3	18.1	△ 4.8
	(6月20日)	64.5	65.5	△ 1.0	66.7	66.9	△ 0.2
茎数(本/m ²)	(5月20日)	345	457	△ 112	360	434	△ 74
	(6月20日)	724	669	55	808	691	117
稈長(cm) (7月20日)	89	84	5	92	84	8	
穂長(cm) (7月20日)	8.1	8.0	0.1	8.2	8.2	0.0	
穂数(本/m ²) (7月20日)	535	495	40	588	478	110	
子実重(kg/10a)	529	398	131	566	418	148	
同上平年比(%)	133	100	33	135	100	35	
リットル重(g)	821	809	12	828	817	11	
千粒重(g)	39.8	41.2	△ 1.4	41.0	43.5	△ 2.5	
品質(検査等級)	1	2	△ 1	1	1	0	

注) 「ハルユタカ」の平年値は過去7か年中、平成12年(最凶)、平成17年(最豊)を除く5か年平均。「春よ恋」の平年値は過去5か年中、平成14年(最凶)、平成17年(最豊)を除く3か年平均。

4) とうもろこし

作 況：平年並

事 由：播種期・発芽期は平年より1～2日早かった。6月上～中旬の低温で6月20日の草丈は平年より低かったが、7月上～中旬の高温で生育は回復し、7月20日には草丈は平年並となり、葉数は平年をやや上回った。7月下旬の低温により開花期・抽糸期は平年より1日遅れたが、8月上旬以降

の高温で再び生育は回復し、収穫時まで草丈・葉数および稈長は平年並に推移した。収穫期は平年より1日遅い9月25日で、乾物総重および推定TDN収量の平年比はそれぞれ101%、102%であった。総体の乾物率および乾雌穂重割合は平年より高かった。

以上のことから、本年の作況は「平年並」である。

調査項目		ディアHT		
		本年	平年	比較
播種期	(月.日)	5.16	5.17	△ 1
出芽期	(月.日)	5.28	5.30	△ 2
開花期	(月.日)	8.5	8.4	1
抽糸期	(月.日)	8.7	8.6	1
収穫期	(月.日)	9.25	9.24	1
収穫時の熟度		黄熟中期	黄熟初 ～中期	
草丈(cm)	(6月20日)	20.5	28.4	△ 8
	(7月20日)	125.8	124.0	2
	(8月20日)	256	257	△ 1
稈長(cm)	(9月20日)	222	223	△ 1
葉数(枚)	(6月20日)	3.9	4.1	△ 0
	(7月20日)	12.0	11.2	1
	(8月20日)	13.6	13.7	△ 0
生総重(kg/10a)		5114	5880	△ 766
乾物茎葉重(kg/10a)		666	733	△ 67
乾物雌穂重(kg/10a)		836	759	77
乾物総重(kg/10a)		1502	1492	10
同上平年比(%)		101	100	1
推定TDN収量(kg/10a)		1098	1072	26
同上平年比(%)		102	100	2
総体の乾物率(%)		29.4	25.6	3.8
乾雌穂重割合(%)		55.7	50.9	4.8
有効雌穂割合(%)		100.0	99.7	0.3

注) 平年値は前7か年のうち平成16年(最豊)、17年(最凶)を除く5か年の平均。

推定TDN収量＝乾物茎葉重×0.582＋乾物雌穂重×0.850。

5) 大豆

作 況：良

事 由：平年並の5月24日に播種を行った。播種後は気温が低く、出芽は平年より3日遅かった。出芽後も気温が平年より低く推移したため、生育は停滞し、生育初期の主莖長、本葉数、分枝数は平年をやや下回り、開花始は平年より1～2日遅かった。開花期前後の気温は平年より高く推移し、着莢は良好であった。登熟期間の気温も平年より

高く、成熟期は平年より1～2日早く、「トヨコマチ」は9月26日、「トヨホマレ」は9月30日であった。百粒重は「トヨコマチ」、「トヨホマレ」ともに平年並であったが、着莢数が「トヨコマチ」は14%、「トヨホマレ」は24%、それぞれ平年より多かったことから、子実重は「トヨコマチ」は平年より16%、「トヨホマレ」は20%多かった。子実の品質は、両品種ともに平年並であった。以上のことから本年の作況は「良」である。

調査項目	トヨコマチ			トヨホマレ			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	5.24	5.24	0	5.24	5.24	0	
出芽期 (月.日)	6.10	6.7	3	6.10	6.7	3	
開花始 (月.日)	7.21	7.19	2	7.23	7.22	1	
成熟期 (月.日)	9.26	9.27	△ 1	9.30	10.2	△ 2	
主莖長(cm)	(6月20日)	5.5	10.6	△ 5.1	3.7	7.7	△ 4.0
	(7月20日)	36.4	40.9	△ 4.5	30.6	34.4	△ 3.8
	(8月20日)	55.1	59.0	△ 3.9	51.5	54.4	△ 2.9
	(9月20日)	53.9	58.8	△ 4.9	49.1	53.9	△ 4.8
	(成熟期)	53.9	58.8	△ 4.9	49.1	53.9	△ 4.8
本葉数(枚)	(6月20日)	0.1	0.9	△ 0.8	0.1	0.8	△ 0.7
	(7月20日)	5.5	6.4	△ 0.9	5.8	6.4	△ 0.6
主節節数	(8月20日)	10.6	11.2	△ 0.6	10.9	11.4	△ 0.5
	(9月20日)	10.7	11.1	△ 0.4	11.2	11.4	△ 0.2
	(成熟期)	10.7	11.1	△ 0.4	11.2	11.4	△ 0.2
分枝数(本/株)	(7月20日)	2.1	2.6	△ 0.5	1.3	2.3	△ 1.0
	(8月20日)	6.9	5.4	1.5	5.4	4.7	0.7
	(9月20日)	6.7	5.2	1.5	5.1	4.7	0.4
	(成熟期)	6.7	5.2	1.5	5.1	4.7	0.4
着莢数(個/株)	(8月20日)	73.4	67.7	5.7	89.0	75.5	13.5
	(9月20日)	72.6	63.1	9.5	90.9	73.5	17.4
	(成熟期)	72.6	63.1	9.5	90.9	73.5	17.4
子実重(kg/10a)	381	328	53	401	335	66	
同上平年比 (%)	116	100	16	120	100	20	
百粒重 (g)	31.5	31.9	△ 0.4	28.9	30.3	△ 1.4	
屑粒率 (%)	0.3	0.7	△ 0.4	0.0	0.7	△ 0.7	
品質 (検査等級)	2下	2下	—	3中	3中	—	

注) 平年値は、前7か年中平成13年(最凶)、17年(最豊)を除く5か年の平均。

6) 小豆

作況：良

事由：平年より2日遅い5月24日に播種を行った。播種後は気温が低く、出芽は平年より10日遅かった。出芽後も気温が平年より低く推移したため、生育は停滞し、生育初期の主茎長、本葉数、分枝数は平年をやや下回り、開花始は平年より3日遅かった。開花期前後の気温は平年より高く推移し、着莢は良好であった。登熟期間の気温も平年より高く推移したが、開花後期に着莢した花が

あったため、成熟期は平年より6～12日遅く、「エリモシヨウズ」は10月9日、「サホロシヨウズ」は9月24日であった。百粒重は「エリモシヨウズ」、「サホロシヨウズ」とともに平年よりやや軽い。着莢数が「エリモシヨウズ」は約30%、「サホロシヨウズ」は約15%、それぞれ平年より多かったことから、子実重は「エリモシヨウズ」は平年より23%、「サホロシヨウズ」は27%多かった。子実の品質は、両品種ともにほぼ平年並であった。以上のことから本年の作況は「良」である。

調査項目	エリモシヨウズ			サホロシヨウズ			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	5.24	5.22	2	5.24	5.22	2	
出芽期 (月.日)	6.18	6.8	10	6.17	6.7	10	
開花始 (月.日)	7.29	7.26	3	7.27	7.24	3	
成熟期 (月.日)	10.9	9.27	12	9.24	9.18	6	
主茎長 (cm)	(6月20日)	2.2	4.1	△ 1.9	2.0	3.9	△ 1.9
	(7月20日)	12.0	14.5	△ 2.5	11.6	13.7	△ 2.1
	(8月20日)	51.7	55.1	△ 3.4	50.5	46.2	4.3
	(9月20日)	63.5	59.0	4.5	57.6	47.4	10.2
	(成熟期)	63.5	59.0	4.5	57.6	47.4	10.2
本葉数 (枚)	(6月20日)	0.0	0.4	△ 0.4	0.0	0.6	△ 0.6
	(7月20日)	4.6	5.3	△ 0.7	4.7	5.2	△ 0.5
主節節数	(8月20日)	14.0	13.1	0.9	12.6	11.0	1.6
	(9月20日)	14.8	13.6	1.2	13.9	11.0	2.9
	(成熟期)	14.8	13.6	1.2	13.9	11.0	2.9
分枝数 (本/株)	(7月20日)	0.2	0.8	△ 0.6	0.3	1.4	△ 1.1
	(8月20日)	3.8	4.0	△ 0.2	3.8	4.4	△ 0.6
	(9月20日)	3.7	3.4	0.3	3.1	4.0	△ 0.9
	(成熟期)	3.7	3.4	0.3	3.1	4.1	△ 1.0
着莢数 (個/株)	(8月20日)	40.1	33.9	6.2	48.5	42.6	5.9
	(9月20日)	59.6	45.8	13.8	54.8	47.1	7.7
	(成熟期)	61.8	47.1	14.7	54.8	48.1	6.7
子実重 (kg/10a)	472	383	89	407	320	87	
同上平年比 (%)	123	100	23	127	100	27	
百粒重 (g)	14.0	15.7	△ 1.7	14.2	16.5	△ 2.3	
屑粒率 (%)	2.2	3.2	△ 1.0	1.2	4.7	△ 3.5	
品質 (検査等級)	4上	4上	—	4上	3下	—	

注) 平年値は、前8か年中平成10年(最凶)、17年(最豊)および試験を中止した12年を除く5か年の平均。

7) 菜豆

作況：良

事由：平年より1日遅い5月24日に播種を行った。播種後は気温が低く、出芽は平年より4～5日遅かった。出芽後も気温が平年より低く推移したため、生育は停滞し、生育初期の主茎長、本葉数、分枝数は平年をやや下回り、開花始は平年より3日遅かった。開花期前後の気温は平年より高く推移し、着莢数は平年よりやや多く推移した。登熟期間の気温も平年より高く、成熟期は平年より1

日早く、「大正金時」は9月2日、「福勝」は9月7日であった。百粒重は「大正金時」、「福勝」ともに平年よりやや軽かったが、着莢数は両品種共にやや平年より多かった。子実重は「大正金時」は平年より9%、「福勝」は7%多かった。ただし、北見農試圃場ではインゲン黄化病の発生が多く、約2割の個体に発病が見られた。子実の品質は、平年よりやや劣った。

以上のことから本年の作況は「良」である。

調査項目	大正金時			福勝			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	5.24	5.23	1	5.24	5.23	1	
出芽期 (月.日)	6.11	6.7	4	6.13	6.8	5	
開花始 (月.日)	7.10	7.7	3	7.12	7.9	3	
成熟期 (月.日)	9.2	9.3	△ 1	9.7	9.8	△ 1	
主茎長 (cm)	(6月20日)	6.6	10.3	△ 3.7	7.1	9.2	△ 2.1
	(7月20日)	31.9	35.8	△ 3.9	30.8	36.4	△ 5.6
	(8月20日)	36.3	40.1	△ 3.8	37.3	42.4	△ 5.1
	(9月20日)	36.3	42.0	△ 5.7	37.3	44.2	△ 6.9
	(成熟期)	36.3	42.0	△ 5.7	37.3	44.2	△ 6.9
本葉数 (枚)	(6月20日)	0.2	0.9	△ 0.7	0.2	0.9	△ 0.7
	(7月20日)	3.1	3.4	△ 0.3	3.3	3.6	△ 0.3
主節節数	(8月20日)	5.1	5.4	△ 0.3	5.3	5.7	△ 0.4
	(9月20日)	5.1	5.4	△ 0.3	5.3	5.6	△ 0.3
	(成熟期)	5.1	5.4	△ 0.3	5.3	5.6	△ 0.3
分枝数 (本/株)	(7月20日)	3.0	4.1	△ 1.1	2.6	3.6	△ 1.0
	(8月20日)	3.7	4.5	△ 0.8	3.8	4.0	△ 0.2
	(9月20日)	3.7	4.0	△ 0.3	3.8	3.8	0.0
	(成熟期)	3.7	4.0	△ 0.3	3.8	3.9	△ 0.1
着莢数 (個/株)	(8月20日)	23.6	22.4	1.2	21.0	20.7	0.3
	(9月20日)	22.7	19.2	3.5	19.0	18.0	1.0
	(成熟期)	22.7	19.2	3.5	19.0	18.0	1.0
子実重 (kg/10a)	342	314	28	377	352	25	
同上平年比 (%)	109	100	9	107	100	7	
百粒重 (g)	69.5	74.1	△ 4.6	85.5	89.3	△ 3.8	
屑粒率 (%)	7.9	3.8	4.1	5.0	4.8	0.2	
品質 (検査等級)	4中	2下	—	4上	3中	—	

注) 平年値は、前8か年中平成11年(最凶)、13年(最豊)を除く5か年の平均。

8) ばれいしょ

作 況：良

事 由：植え付けはほぼ平年並の5月12日に行った。萌芽期は、植え付け後の高温とまとまった降雨により、平年より「男爵薯」で1日、「コナフブキ」で3日早かった。萌芽後の生育は低温・寡照に推移し、開花始はほぼ平年並であった。茎長は、「男爵薯」、「コナフブキ」とも平年並となったが、「男爵薯」では伸長の推移も平年並であったのに対し、「コナフブキ」は7月上中旬の高温・早魃で抑制気味であった後、8月以降も伸長が進行した。枯凋期は、「男爵薯」はほぼ平年並の9月4日であったが、「コナフブキ」では水分が多い状態が続き、枯凋が進まなかったため9日遅い

10月13日であった。「男爵薯」は、上いも数が少なかったものの上いも1個重が大きく、上いも重は平年並（平年比 101%）となった。中晩生の「コナフブキ」は、8月の十分な降雨、9月以降の塊茎肥大に適切な温度条件および枯凋期の遅れにより、上いも一個重が平年より大きくなったため、上いも重は平年を18%上回った。でん粉価は、6月上旬の寡照、夏期の高温および8月中旬の大雨以降土壌が湿潤な状態が続いた影響を受け、「男爵薯」、「コナフブキ」とも平年を下回ったが、「コナフブキ」では上いも重が多収であったことからでん粉重は平年比113%となった。

以上のことから、本年の作況は「良」である。

調査項目	男爵薯			コナフブキ			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
植付期 (月.日)	5.12	5.11	1	5.12	5.13	△ 1	
萌芽期 (月.日)	5.30	5.31	△ 1	5.30	6.2	△ 3	
開花始 (月.日)	7.1	6.30	1	6.29	6.30	△ 1	
枯凋期 (月.日)	9.4	9.6	△ 2	10.13	10.4	9	
茎長(cm)	(6月20日)	17.6	18.6	△ 1.0	17.9	16.6	1.3
	(7月20日)	40	37	3	62	69	△ 7
	(8月20日)	41	38	3	79	80	△ 1
茎数(本/株)	(6月20日)	2.6	3.3	△ 0.7	2.7	2.6	0.1
	(7月20日)	2.9	3.5	△ 0.6	3.1	2.9	0.2
	(8月20日)	2.7	3.4	△ 0.7	2.8	2.7	0.1
上いも重(kg/10a)	(8月20日)	4477	4036	441	3438	3398	40
	(9月20日)	—	—	—	5134	4340	794
でん粉価(%)	(8月20日)	15.9	16.3	△ 0.4	19.6	21.6	△ 2.0
	(9月20日)	—	—	—	21.1	22.9	△ 1.8
でん粉重(kg/10a) (9月20日)	—	—	—	1034	944	90	
上いも数(個/株)	8.0	9.6	△ 1.6	9.4	9.3	0.1	
上いも1個重(g)	118	96	22	133	111	22	
上いも重(kg/10a)	4203	4182	21	5500	4662	838	
同上平年比 (%)	101	100	1	118	100	18	
でん粉価(%)	15.3	16.0	△ 0.7	21.7	22.7	△ 1.0	
でん粉重(kg/10a)	—	—	—	1139	1011	128	
同上平年比 (%)	—	—	—	113	100	13	

注) 平年値は前7か年中、「男爵薯」は平成15（最凶）、17年（最豊）を、「コナフブキ」は平成14（最豊）、15年（最凶）を除く5か年の平均

9) てんさい

作 況：良

事 由：移植栽培の播種期は平年より6日早い3月20日に行った。移植は、平年並の5月9日に行った。その後、低温寡照が続いたため、初期生育は平年より劣った。6月下旬以降、好天が続いて徐々に生育は回復したが、茎葉生長速度の最も高い7月下旬に低温、乾燥が続いたため、地上部の生長は抑制された状態で推移した。8月の高温時にも萎

れは観察されず、短期間にまとまった降雨があったため、地下部の肥大は急速にすすんだ。登熟期間中は降水量が極めて多かったため、根中糖分の伸びは鈍かった。収穫は平年並の10月18日に行い、移植栽培では2品種平均で根重は平年比115%、根中糖分は平年比97%、糖量は平年比111%、直播栽培では糖量は平年比107%となり、移植栽培、直播栽培共に平年を大きく上回った。

以上のことから本年の作況は「良」である。

調査項目	移植						直播			
	モノホマレ			アーベント			モノホマレ			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較		平年	比較	
播種期 (月・日)	3.20	3.26	△ 6	3.20	3.26	△ 6	5.9	5.8	1	
移植期 (月・日)	5.9	5.7	2	5.9	5.8	1		—		
出芽期 (月・日)		—			—		5.18	5.19	△ 1	
収穫期 (月・日)	10.18	10.20	△ 2	10.18	10.19	△ 1	10.18	10.19	△ 1	
草丈 (cm)	(6月20日)	23.1	29.5	△ 6.4	24.5	29.3	△ 4.8	10.9	14.7	△ 4
	(7月20日)	49.0	57.1	△ 8.1	44.8	54.7	△ 9.9	44.6	51.4	△ 7
	(8月20日)	54.5	64.6	△ 10.1	51.6	60.6	△ 9.0	58.3	64.8	△ 7
	(9月20日)	58.1	65.6	△ 7.5	54.7	60.8	△ 6.1	61.7	67.2	△ 5.5
生葉数 (枚)	(6月20日)	10.9	12.0	△ 1.1	11.3	11.3	0.0	5.0	7.5	△ 3
	(7月20日)	21.0	21.9	△ 0.9	19.3	20.6	△ 1.3	19.7	19.9	△ 0
	(8月20日)	28.2	27.8	0.4	28.3	26.4	1.9	26.1	25.9	0
	(9月20日)	30.5	31.0	△ 0.5	31.5	29.2	2.3	25.3	29.4	△ 4.1
茎葉重 (g/個体)	(6月20日)	65	138	△ 72.8	79	122	△ 43.1	5	16	△ 12
	(7月20日)	545	695	△ 150.0	479	665	△ 186.0	380	492	△ 112
	(8月20日)	731	957	△ 226.0	793	961	△ 168.0	755	881	△ 126
	(9月20日)	811	967	△ 156	959	948	11	737	908	△ 171
根重 (g/個体)	(6月20日)	9	27	△ 17.9	13	25	△ 12.4	0	2	△ 2
	(7月20日)	274	266	8.0	284	291	△ 7.0	126	130	△ 4
	(8月20日)	718	565	153.0	711	613	98.0	455	421	34
	(9月20日)	942	840	102	1007	861	146	718	690	28
根周 (cm)	(7月20日)	21.9	21.5	0.4	22.9	23.2	△ 0.3	17.0	16.9	0
	(8月20日)	31.6	27.9	4	32.3	30.4	2	25.6	25.0	1
	(9月20日)	34.1	33.0	1.1	37.4	34.4	3.0	30.5	29.7	0.8
根中糖分 (%)	(9月20日)	15.24	15.09	0.15	15.39	15.26	0.13	15.18	14.67	0.51
茎葉重 (kg/10a)	(収穫期)	4976	6303	△ 1327	6020	5931	89.0	4576	5588	△ 1012
根 重 (kg/10a)	(収穫期)	7101	6380	721	7936	6674	1262	5793	5462	331
同上平年比 (%)		111	100	11	119	100	19	106	100	6
根中糖分 (%)	(収穫期)	16.98	17.04	△ 0.06	16.75	17.76	△ 1.01	16.77	17.09	△ 0.32
同上平年比 (%)		100	100	0	94	100	△ 6	98	100	△ 2
糖量 (kg/10a)	(収穫期)	1204	1085	119	1329	1192	137	971	905	66
同上平年比 (%)		111	100	11	111	100	11	107	100	7

注) 平年値は前7か年中、直播「モノホマレ」は平成11年、16年、移植「モノホマレ」は平成11年、17年、「アーベント」は平成11年、16年をそれぞれ除く5か年の平均。

10) 牧草(チモシー)

作況：平年並

事由：萌芽期は平年よりやや遅く、冬損程度は平年よりやや高かった。1番草は、生育期間中が5月中旬を除き概ね低温・多雨だったため、出穂始・出穂期および収穫期は平年より5~6日遅れたが、低温・湿潤を好むチモシーの草丈は平年を上

回り、乾物収量の平年比も123%と多かった。しかし2~3番草は、生育期間中が7月下旬を除き概ね平年より高温だったため、乾物収量の平年比は2番草が50%、3番草が88%と少なかった。年間合計乾物収量の平年比は100%であった。

以上のことから、本年の作況は「平年並」である。

調査項目	ノサブ			
	本年	平年	比較	
萌芽期 (月.日)	4.21	4.17	4	
冬損程度	2.0	1.3	0.7	
被度(%)	(5月18日)	100	100	0
	2番草再生時	100	99	1
出穂始 (月.日)	6.17	6.11	6	
出穂期 (月.日)	6.23	6.17	6	
出穂程度 1番草	4.0	6.1	△ 2.1	
節間伸長程度 2番草	3.0	3.6	△ 0.6	
刈取日	1番草	6.23	6.18	5
	2番草	8.11	8.7	4
	3番草	10.5	10.6	△ 1
倒伏程度 1番草	2.8	2.4	0.4	
病害罹病程度	1番草	2.0	1.4	0.6
	2番草	3.0	3.4	△ 0.4
	3番草	3.5	4.5	△ 1.0
草丈(cm)	(5月18日)	35	39	△ 4
	(6月5日)	72	74	△ 2
	1番草	112	97	15
	2番草再生時	32	37	△ 5
	2番草	50	68	△ 18
	3番草再生時	43	42	1
生草収量(kg/10a)	3番草	51	45	6
	1番草	3806	2696	1110
	2番草	555	1179	△ 624
	3番草	542	758	△ 216
	合計	4903	4633	270
乾物率(%)	1番草	20.7	24.5	△ 3.8
	2番草	23.4	22.2	1.2
	3番草	28.8	24.8	4.0
乾物収量(kg/10a)	1番草	790	641	149
	2番草	130	259	△ 129
	3番草	156	177	△ 21
	合計	1076	1077	△ 1

注) 平年値は前4か年の平均(耕種概要・調査項目が大幅に変更されたため)。

倒伏程度および病害罹病程度は、1:無または微~9:甚。病害は主に斑点病。

11) たまねぎ

作 況：やや不良（参考）

事 由：播種期は晩生種「スーパー北もみじ」では平年より4日早い3月9日、早生種「改良オホーツク1号」では平年より6日早い3月3日であった。育苗期間中はやや低温に推移したが苗生育は順調であった。移植期は「スーパー北もみじ」では平年より1日早い5月12日、「改良オホーツク1号」では平年より5日早い5月6日であった。移植時の苗質は2品種ともほぼ平年並であった。移植直後の5月中旬は平均気温が高く、日照時間は多く、降水量は平年並であったため苗の活着は順調であった。7月下旬から8月上旬まで続いた干ばつ、8

月上旬からの高温により茎葉の生育および球肥大は停滞し、球肥大期は平年に比べ「改良オホーツク1号」では平年並の7月8日、「スーパー北もみじ」では3日遅い7月24日であった。8月上旬以降、地上部には葉先枯れ症状が目立った。倒伏期は「改良オホーツク1号」では平年より3日早い8月1日、「スーパー北もみじ」では平年より1日早い8月12日であった。「スーパー北もみじ」の規格内率が平年をやや上回ったものの、総収量、規格内収量および平均一球重は両品種とも平年をやや下回った。

以上のことから、本年の作況は「やや不良」である。

調査項目	改良オホーツク1号			スーパー北もみじ			
	本年	平年	比較	本年	平年	比較	
播種期 (月.日)	3.3	3.9	△ 6	3.9	3.13	△ 4	
出芽期 (月.日)	3.16	3.21	△ 5	3.22	3.27	△ 5	
移植期 (月.日)	5.6	5.11	△ 5	5.12	5.13	△ 1	
球肥大期 (月.日)	7.8	7.8	0	7.24	7.21	3	
倒伏期 (月.日)	8.1	8.4	△ 3.0	8.12	8.13	△ 1.0	
枯葉期 (月.日)	8.20	8.26	△ 6	9.4	9.9	△ 5	
収穫期 (月.日)	8.22	9.8	△ 17	9.8	9.16	△ 8	
草丈(cm)	(5月20日)	26.2	26.2	0.0	25.4	22.2	3.2
	(6月20日)	49.9	34.3	15.6	30.4	32.9	△ 2.5
	(7月20日)	73.3	70.0	3.3	79.7	74.4	5.3
生葉数(枚)	(5月20日)	3.2	3.1	0.1	3.2	3.0	0.2
	(6月20日)	6.3	5.2	1.1	5.6	5.3	0.3
	(7月20日)	8.6	9.2	△ 0.6	10.7	10.2	0.5
葉鞘径(mm)	(5月20日)	4.2	3.9	0.3	4.0	4.0	0.0
	(6月20日)	11.2	8.4	2.8	7.9	8.1	△ 0.2
	(7月20日)	19.3	18.4	0.9	20.9	19.8	1.1
葉身生重(g)	(7月20日)	109.9	85.5	24.4	134.5	105.2	29.3
球生重(g)	(7月20日)	121.2	77.2	44.0	50.9	45.1	5.8
	(8月20日)	209.0	227.6	△ 19	245.2	248.6	△ 3
葉身乾物率(%)	(7月20日)	8	8.0	△ 0	7.5	8.4	△ 1
総収量(kg/10a)		6591	6694	△ 103	7754	8223	△ 469
規格内収量(kg/10a)		5796	6026	△ 230	6769	6892	△ 123
同上平年比(%)		96	100	△ 4	98	100	△ 2
規格内率(%)		88	90	△ 2	87	84	3
平均一球重(g)		209	213	△ 4	245	261	△ 16

注) 平均値は、沖積土壌で試験を開始した平成15年から17年までの3カ年の平均。

Ⅲ 試験研究および専門技術活動の概要

1 概要

1) 作物研究部

(1) 畑作物及び野菜に関する試験

畑作園芸科は、その他畑作物及び野菜類の新品種育成及び栽培法改善試験を実施するとともに、技術普及部の技術体系化チームへの対応を担当している。

豆類では、「豆腐用優良品種の選抜強化」として大豆の育種事業の一部を行っている。中期世代の生産力検定予備試験では、「ユキホマレ」と比較して総合評価が上回る2系統に十系番号（十系1031号および十系1032号）を付した。大豆の系統適応性試験では「十系995号」、「十系1006号」、「十系1014号」および「十系1015号」がやや有望であった。小豆の地域適応性検定試験では「十育156号」および「十育151号」の検定を行った。菜豆の地域適応性検定試験では「十育E13号」が有望であった。

てん菜では、輸入品種検定試験等から「KWS4S65」が優良品種となった。系統適応性検定試験では4系統を検定した。現地選抜圃試験では16系統を検定した。そう根病検定では公立育成系統1系統・民間導入系統6系統を検定し、抵抗性はやや弱～強であった。登熟調査では、栽培法別・品種タイプ別に生育追跡調査を実施した。

野菜ではメロン2系統、たまねぎ2系統地域適応性検定試験を行った。たまねぎでは、民間との共同研究により育成された晩生系統「北見交46号」と「同49号」と「同50号」の生産力検定試験を行った。さらに、熟期と収量性等の特性から2系統に北見交番号を付した。系統適応性検定試験ではヤーコンを検定した。野菜の栽培に係る部門では、たまねぎ直播栽培の確立とたまねぎの減農薬栽培の総合開発を目的とした研究で、場内および現地圃場における実証試験を行った。海外収集遺伝資源の調査については、17年3月にオランダおよびスペインより収集した16品種について、その特性調査を行った。新農業資材実用化試験では、てん

菜・たまねぎに関する新資材の検定を行った。

(2) ばれいしょに関する試験

馬鈴しょ科は、寒地北東部向け耐冷性、病害、ジャガイモシストセンチュウ抵抗性、でん粉および加工食品原料用品種の育成及び技術普及部の技術体系化チームへの対応を分担している。

「ばれいしょ新品種育成」及び「ばれいしょ重要病害虫抵抗性系統の選抜強化」、「体細胞育種法による高品質ばれいしょの開発」、「疫病抵抗性ばれいしょ品種の開発促進」、「マーカー選抜によるジャガイモYウイルス抵抗性品種の早期開発」、「マーカー選抜によるジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種の早期開発」、「長期貯蔵可能な加工用馬鈴しょ新品種および貯蔵技術の開発」、により高品質、耐病性品種の育成を進めている。「奨励品種決定調査」では「北育6号」、「北育11号」を中止とし、でん粉品質に優れる「北育13号」を継続とした。「馬鈴しょ輸入品種等選定試験」では、ホクレン農業総合研究所が育成した生食用品種「HP01」の成績を取りまとめ、優良品種に認定された。

(3) 麦類に関する試験

麦類科は、北海道向けめん用秋まき小麦、パン用春まき小麦の新品種育成や新品種育成に係わる栽培試験、ビール大麦新品種育成、除草剤等の資材試験を実施するとともに、技術普及部の技術体系化チームの対応を分担している。

小麦では、「新品種育成試験」および「高品質小麦早期開発のための検定・選抜強化」、「麦類特性検定試験」、「道産小麦の安全性・安定性向上試験」により高品質で耐病性、穂発芽耐性に優れた品種の育成を進めている。「奨励品種決定調査」では秋まき小麦の「北見82号」、春まき小麦では「北見春67号」「北見春68号」「北見春69号」を検討した。春まき小麦「北見春67号」は、平成19年2月に北海道の優良品種に認定された。「春

まき小麦の品種選定試験」ではホクレン農総研育成の4系統について適応性を検討した。「雪腐病高度抵抗性良質小麦系統の作出」では雪腐病抵抗性がかなり優れる系統を育成し、各種特性について検定を行った。「半数体倍加系統を利用した穂発芽極難小麦の育成」では穂発芽性“極難”で、耐雪性、品質が改良された秋まき小麦「17G602」を選抜し、次年度系統適応性検定試験に供試する。「小麦の世代短縮」では独立行政法人及び指定試験地の材料の世代促進を行った。「赤かび病抵抗性小麦品種の育成・利用を核にしたかび毒汚染低減」では「北見82号」がDON含量が低く、かび毒低蓄積性系統として有望であった。「小麦の新ランク区分対応のための灰分変動要因解析試験」では灰分の変動は品種間差の他、生育期間中の気象条件の影響が大きいものと推察され、リン酸と灰分の関係も示唆された。

二条大麦では、ビール醸造時の発酵性に優れ、収量が多く、栽培しやすい品種の育成を目指して品種改良を進めている。本年度は「りょううん(北育39号)」および「北育41号」を供試した。「りょううん(北育39号)」は、「りょうふう」より多収であり、麦芽品質・発酵性は「りょうふう」並からやや優ることから、大規模醸造試験に供試している。「北育41号」は地域や年次により収量性の変動が見られるが、麦芽品質・発酵性が有望である。収量性の再検討と品質や発酵性についてさらに詳細な検討を行うことから継続検討とした。

(4) 牧草・飼料作物に関する試験

牧草科では、チモシー新品種育成試験、飼料作物における系統適応性検定試験、品種比較試験、および有機栽培技術開発を担当している。

指定試験「チモシー新品種育成試験」では、極早生～晩生の4熟期および道東地方向け放牧用品種の育成を進めており、うち放牧用3系統について、系統適応性検定試験を実施中である。

指定試験と民間との共同研究「特定組合せ能力を利用した良質多収チモシー品種の開発」では、本年度より早生育成系統の系統適応性検定試験を開始したほか、後続系統の生産力検定試験を実施

中である。

本年度より農林水産省委託プロジェクト「粗飼料多給による日本型家畜飼養技術の開発」に、課題名「TDN生産効率向上に貢献する高TDN・多収チモシー品種の開発」で参加し、高TDN化を主目標とした早生及び中生品種育成に取り組んでいる。

受託試験「飼料作物品種比較試験」では、牧草2草種とサイレージ用とうもろこしの品種比較試験を実施し、牧草2品種が優良品種(普及奨励)と認定された。

「飼料作物における有機栽培技術の開発」(畜試と共同)では、「チモシー主体草地及び飼料用とうもろこしの有機栽培法」を取りまとめた。

2) 生産研究部

(1) 栽培環境に関する試験

栽培環境科は、土壌肥料・環境保全に関する研究を実施するとともに、技術普及部の技術体系化チームへの対応を分担している。

本年度は、「たまねぎの有機栽培における生産安定化」「小型反射式光度計(RQ-フレックス)を用いた小麦土壌窒素診断技術の確立」をとりまとめ、新農業資材に関する試験「秋まき小麦に対する貝化石「ミラクルシェル」の施用効果」について完了した。

本年度から新たに開始した課題は、新農業資材に関する試験「たまねぎに対する有機入り液肥「e-トミー」の1課題である。

(2) 病害虫に関する試験

病虫科は、畑作物および園芸作物の病害虫防除対策・診断試験さらに予察調査を実施するとともに、技術体系化チームへの対応を行っている。

本年度は、「土壌環境改善を主体としたタマネギ乾腐病防除対策」(中央農試と共同)、たまねぎの有機栽培における生産安定化(栽培環境科と共同)、について取りまとめを分担、いずれも普及推進事項となった。

継続課題として、「高品質小麦早期開発のための検定・選抜強化」(赤かび病の抵抗性検定、麦

類科と共同)、「ばれいしょ輸入品種等選定試験」(そうか病およびジャガイモシストセンチュウ抵抗性検定、いずれも馬鈴しょ科と共同)、国費補助「ジャガイモシストセンチュウ抵抗性特性検定試験」・「そうか病抵抗性特性検定試験」、「道産小麦の安定性・安全性向上試験 1. 赤かび病抵抗性強化とDON低減技術による安全性向上 1) 赤かび病抵抗性及びマイコトキシン産生抑制型品種の開発促進」(小麦科・中央農試と共同)、「疫病抵抗性ばれいしょ品種の開発促進」(馬鈴しょ科と共同)、「良食味・高貯蔵たまねぎ新品種育成」(畑作園芸科と共同、ホクレンとの共同研究課題)、「たまねぎ減農薬栽培モデルの策定に向けた技術開発と実証」(畑作園芸科と共同)、「ジャガイモ病害虫の簡易検出・高精度診断技術の開発 簡易検出法の生産現場における実証試験」(北農研センター、中央農試他と共同)を実施した。

本年度から新たに「バレイショ等における生物機能を活用した病害虫防除技術の開発」(北農研センターと共同、農水省委託プロジェクト)を開始した。

3) 技術普及部

(1) 推進方向

網走管内の農業は、畑作では輪作体系の確立や土づくりの強化、野菜作ではたまねぎ等の園芸作物生産の振興、酪農では乳質向上や経営体の組織化・再編、さらにオホーツク農業の担い手の育成・確保などが重要な課題となっており、各普及センターはこれらに焦点を当て、重点的な普及活動を展開している。

本年度から道においても長らく続いた専門技術員制度が廃止され、技術普及部はこれまでの部長、次長、専門技術員の体制から、部長、次長、地域主査を構成員とする体制に移行した。業務の内容は、技術体系化チームでの活動、地域農業支援会議、普及センターへの支援活動、普及と研究の連携強化のための活動、道および関連団体と協同する農業施策を通じての活動などである。当部では構成員の専門性を生かして、これらの業務の遂行

に努めた。また、畜産など当部に専門の配置されない分野では、補完活動を通じて地域の取り組みを支援した。

本年は4月低温で降水量が多く作業始めは最大で10日ほど遅れた。その後6月上旬、7月下旬に低温な時期があったが8月に入るとほぼ平年以上の気温で推移した。本年は8月18日と10月7日を中心に2度の大雨による気象災害が発生した。いずれも、ほ場の水没、収穫作業の遅延などばかりでなく、土壌流出の被害など、局地的ではあるが甚大な被害を及ぼした。また、6月28日、7月17日に局地的な雹害、11月7日に竜巻による農耕地への異物散乱など気象災害が多発した年度であった。災害発生時は被害程度、現地の対応状況の報告とともに要請に応じて復旧対策策定の技術的な助言を行った。

(2) 活動の概要

①オホーツク地域農業支援会議

網走支庁における支援会議は、既存の「網走管内ブロック別農政推進会議」と「オホーツク圏農業技術推進会議」を支援会議の趣旨に基づいて発展的に合体させるかたちで、「オホーツク地域農業支援会議」として本年4月10日に発足した。その後、5月に年間のスケジュールを支庁、普及センターと協議して作成した。8月までに数度の話し合いを経て、地域の要望課題の調査、農試研究部からの回答、支援会議としての対応案の検討と順を追って活動をすすめた。研究での成果がすでにあるものについては、事務局会議に詳細な成績目録を提供した。要望課題への対応素案は10月までにとりまとめて、地域関係者会議の場で検討するとともに、2月の指導農業士会議の場でも、その内容を紹介した。

それらの結果を踏まえて、要望事項の対応案と支援会議としての次年度の重点的な取り組み事項を1月の事務局会議で決定し、2月の地域関係者会議で説明し、了承された。

②普及センターへの支援

普及センターへの技術支援項目は、日頃の技術

的な問い合わせなどに対する対応の他、地域課題解決研修などセンター内の活動への協力、調査研究活動への支援、講習会などへの対応、突発性病害および生理障害の診断、など多岐にわたる。

畑作では、秋まき小麦新品種「きたほなみ」の栽培特性の把握、越冬後に過繁茂となる秋まき小麦の適性分肥の時期・量の検討について支援した。

園芸ではたまねぎ紅色根腐病、7月に発生した筋状の生育不良について普及センターとともに検討を進めた。たまねぎ栽培アンケートを普及センターと実施し、有機物施用や緑肥導入実態などを把握して、たまねぎセミナーや研修会で改善に向けた提案を行うとともに、たまねぎ夏期現地研修会やたまねぎセミナーを開催して、試験場及び各機関からの情報交換の活性化に努めた。また、管内ではアスパラガスの生産に取り組む産地が増えており、管内での栽培振興を図るためにオホーツク地域野菜産地強化協議会によるアスパラガスを主体とした道内先進地視察調査を実施した。

畜産では畜試及び天北農試技術普及部の畜産担当専技の支援を受け、管内で取り進めているオホーツククリーンミルク運動を発展させ、乳検情報を活用し乳牛の飼養管理技術の向上を目指してJ A、農業共済並びに普及センターと連携した活動体制を進めた。また、網走管内で誕生した大型法人の計画ならびに運営について関係機関と連携をとり、支援を行った。

作物保護では平成15年度以降多発傾向にあるタマネギの紅色根腐病について、昨年度までの実態調査から、研究部の協力を得ながら、網走普及センター本所、網走、美幌、遠軽支所とともに発生原因の解明と軽減対策について取り組んだ。ジャガイモシストセンチュウの発生面積は近年微増に留まっていたものの、新たな発生が確認されたため、市、JA、普及センター、支庁と協力して対策協議会を立ち上げ、発生地域の拡大を予防する対策を講じた。

土壌肥料では作業機の大型化などの要因により、心土の圧密化などが問題化しているので心土の土壌硬度、土壌断面調査などから改善策を提案

する手法を紹介した。当管内では土壌にリン酸、カリが蓄積したほ場が多く、浅井戸の硝酸濃度が基準値を超える割合が高いなどからも、肥料の削減が求められているので、適正な肥料の削減について支援した。

③体系化チーム活動

「北見地域における土地利用型野菜の導入・定着」、「斜網地域における大規模省力高品質生産システムの実証」についての実証試験を継続して実施した。さらに、「後作緑肥導入によるたまねぎ畑の窒素負荷低減対策の実証」について本年度から実証試験を開始した。

これらのうち、「北見地域における土地利用型野菜の導入・定着」ではもち米の減農薬、減化学肥料栽培と転作作物（アスパラの立茎栽培、枝豆の無農薬栽培、かぼちゃ、たまねぎの減農薬栽培）の実証試験結果と網走支庁管内の水稻栽培の現状と問題点について取りまとめ、全道で行われた他の試験と合わせて普及資料としてとりまとめを行った。また、「斜網地域における大規模省力高品質生産システムの実証」については研究期間が2年に変更され、平成19年度から開始される新規事業で更に検討される予定である。

2 作物研究部の成績の概要

1) 畑作園芸科

1 豆類に関する試験

(1) 豆腐用優良品種の選抜強化

(平成14年～平成18年)(112213)

a 試験目的：大豆育種事業の一部を分担して、網走・上川地方に適した早生・耐冷の豆腐用高蛋白系統の選抜を行う。

b 試験方法：

(a) 早生耐冷高蛋白系統の選抜

① 個体選抜試験：5組合せ 4,347個体を供試した。供試面積5a。

② 系統選抜試験：14組合せ475系統を供試した。供試面積5a。

(b) 早生耐冷多収母本の選抜

① 個体選抜試験：1組合せ 375個体を供試した。供試面積5a。

② 系統選抜試験：4組合せ84系統を供試した。供試面積5a。

(c) 生産力検定予備試験：系統選抜試験供試の5組合せ、27系統および3品種を供試し、1区7.2㎡、乱塊法2反復で当场標準耕種法により実施した。供試面積10a。

c 成績の概要：

(a) 早生耐冷高蛋白系統の選抜

① 個体選抜試験：5組合せ704個体を圃場選抜した。

② 系統選抜試験：14組合せ191系統を圃場選抜した。

(b) 早生耐冷多収母本の選抜

① 個体選抜試験：1組合せ59個体を圃場選抜した。

② 系統選抜試験：4組合せ17系統を圃場選抜した。

(c) 生産力検定予備試験 生産力検定予備試験：総合評価が「ユキホマレ」を上回った2系統に「十系1031号」および「十系1032号」の十系番号を付した。

(2) 畑作物地域適応性検定試験（小豆、菜豆）

(平成14年～継続)(112500)

a 試験目的：小豆・菜豆育成系統の網走地方における適応性を検定する。

b 試験方法：[小豆] 2系統4品種供試し、1区9.6㎡、乱塊法3反復で当场標準耕種法により実施した。供試面積10a。[菜豆] 金時3系統4品種を供試し、1区9.6㎡、乱塊法3反復で標準耕種法により実施した。供試面積10a。

c 成績の概要：

[小豆]「十育156号」：「サホロショウズ」と比較して、成熟期は3日遅い。倒伏はほぼ同程度。収量は6%高いが、LSD 10%レベルで有意差は認められない。粒大はやや小さく、検査等級は同等であった。成熟期はやや遅いが、収量はやや高いため、総合評価は中とする。

「十育151号」：「エリモショウズ」と比較して、成熟期は6日早い。倒伏程度はやや大きい。収量は8%低く、LSD5%レベルで有意差が認められた。粒大、検査等級は同等であった。成熟期はやや早いが、耐倒伏、収量はやや劣ったため、総合評価はやや劣るとする。

[金時]「十育B76号」：「大正金時」と比較して、成熟期は同等、黄化病の発生は明確に少なかった。子実重は標準品種比98%で、黄化病株込みの子実重は24%多かった。粒大はやや大きく、検査等級は同等であった。成熟期、収量性、品質共に同等のため、総合評価は中とする。

「十育B77号」：「福勝」と比較して、成熟期は同等、黄化病の発生は明確に少なかった。子実重は標準品種比103%で（LSD10%レベルで有意差無し）、黄化病株込みの子実重は31%多かった。粒大、検査等級は同等であった。成熟期、収量性、品質共に同等のため、総合評価は中とする。

「十育E13号」：「福白金時」と比較して、出芽率は、赤系金時の品種系統と比較して、「福白金時」は低かったが、本系統は並であった。成熟期は2日遅かった。黄化病の発生は少なかった。子

実重は11%多く (LSD 10%レベルで有意差有り)、黄化病株込みの子実重は35%多かった。粒大は同等、検査等級は優れた。成熟期はやや遅いが、収量が高く、品質が優れるため、総合評価は有望とする。

(3) 大豆系統適応性検定試験

(昭和32年～継続) (124030)

a 試験目的：大豆育成系統の網走地方における適応性を検定する。

b 試験方法：十系（十勝農試育成）系統15、中系（中央農試育成）系統1、標準および比較品種4、合計20品種・系統。1区7.2㎡、乱塊法2反復で当场標準耕種法により実施した。供試面積10a。

c 成績の概要：「ユキホマレ」と比較して総合評価がやや有望以上であったのは、「十系995号」、「十系1006号」、「十系1014号」、「十系1015号」の4系統であった。

(4) 大豆奨励品種決定基本調査

(昭和37年～継続) (522130)

a 試験目的：育成系統の特性を検定し、奨励品種決定の資とする。

b 試験方法：3系統3品種供試し、1区9.6㎡、乱塊法3反復で当场標準耕種法により実施した。供試面積10a。

c 成績の概要：「ユキホマレ」を対照とした系統の評価は以下の通りである。

「十育243号」：成熟期は1日遅い。収量は標準品種比91%。粒の大きさは小さく、検査等級は劣る。リポ欠系統のため粒大は考慮に入れないが、収量性、検査等級が劣るため、総合評価はやや劣るとする。

「十育244号」：成熟期は1日早い。収量は標準品種比94%。粒の大きさは同等、検査等級はほぼ同等。収量性はやや低かったが、他の形質は概ね同等のため、総合評価は中とする。

「十育245号」：成熟期は同等。収量は標準品種比94%。粒の大きさは同等、検査等級はほぼ同等。収量性はやや低かったが、他の形質は概ね同等の

ため、総合評価は中とする。

(5) 大豆奨励品種決定現地調査

(昭和51年～継続) (522230)

a 試験目的：育成系統の現地における適応性を検定し、奨励品種決定の資とする。

b 試験方法：1系統2品種供試し、乱塊法2反復で現地慣行法により実施した。供試面積は津別町および網走市とも各10a。

c 成績の概要：

[津別町]

「十育243号」：成熟期は1日遅い。収量は標準品種比98%。粒の大きさは小さく、検査等級は劣る。収量、熟期ともに並であり、品質がやや劣るが、現地での供試初年目であり、総合評価は標準品種並とする。

[網走市]

本年は「ユキホマレ」のみの供試である。

(6) 小豆奨励品種決定現地調査

(昭和46年～継続) (522010)

a 試験目的：育成系統の現地における適応性を検定し、奨励品種決定の資とする。

b 試験方法：1品種を供試し、乱塊法2反復で現地慣行法により清里町で実施した。供試面積は10a。

c 成績の概要：

本年は、「サホロショウズ」のみの供試である。

(7) 菜豆奨励品種決定現地調査

(昭和46年～継続) (522020)

a 試験目的：育成系統の現地における適応性を検定し、奨励品種決定の資とする。

b 試験方法：金時1系統3品種（美幌町）を供試し、乱塊法2反復で実施した。供試面積は10a。

c 成績の概要：

「十育B77号」：「大正金時」と比較して、開花期は同等、成熟期は1日遅く、倒伏程度はやや優り、葉落ちは同等であった。収量は85%と劣り、粒大もやや小さく、品質も劣った。総合評価はや

や劣るとする。

(8) 小豆系統適応性検定試験

(昭和54年～)(124040)

a 試験目的：小豆育成系統の網走地方における適応性を検定する。

b 試験方法：十勝農試育成の早生（サホロシヨウズ対比）10系統、中生（エリモシヨウズ対比）1系統、標準および比較品種3、合計14品種・系統。1区4.8㎡、乱塊法2反復で当該標準耕種法により実施した。供試面積10a。

c 成績の概要：「サホロシヨウズ」と比較して、総合評価がやや有望の系統は「十系918号」の1系統であった。

(9) 新優良品種普及促進事業

(昭和41年～継続)(521030)

a 試験目的：奨励品種候補の豆類有望系統について種子増殖を行う。

b 試験方法：大豆「十育241号」を供試し、当該の標準耕種法で栽培した。供試面積110a。

c 成績の概要：生育は概ね順調であった。収穫した子実の品質は、障害粒の発生もなく、良好であった。

(10) 菜豆類（金時、虎豆）における土壌・栄養診断技術の開発と窒素施肥技術の実証

ア 虎豆の安定生産のための窒素施肥技術の改善と実証

(平成17～19年、畑作園芸科、栽培環境科)(115120)

a 試験目的：虎豆の窒素栄養特性に基づき、土壌肥沃度に対応した窒素施肥技術を開発する。また、早期出荷を目指して、冷涼な北見地方において早期播種、べたかけ資材利用による生育促進、収穫期の前進を図り、虎豆の高品質安定生産および早期供給量の増加に資する。

b 試験方法：

(a) 低収要因解析調査:土壌肥沃度の異なる圃場において、土壌、肥培管理条件と生育・収量との関係を調査する。

(b) 窒素施肥法改善試験:場内圃場および現地8圃場において主要な各生育期別に追肥処理し、適切な追肥時期・量を明らかにする。

(c) 早期収穫試験:北見農試圃場において、早期播種並びに被覆資材処理を行い、早期収穫を可能にする栽培方法を検討する。

c 成績の概要：

(a) 現地実態調査:窒素基肥のみで栽培した処理区を抽出して子実重との関係を比較した結果、有効土層が深い場合に子実重が多い傾向が認められた。また、熱水抽出性窒素含量が多い場合に子実重が多くなる様子がうかがえた。

(b) 窒素施肥法改善:子実重は窒素施肥量が多く、追肥時期は手竹期より開花盛期の場合に増加する傾向があり、開花盛期倍量追肥(計12kg/10a)のとき最大であった。また窒素施肥の一部に緩効性肥料LPS40を用いた場合の子実重は、開花盛期追肥と同等かやや少なかった。なお基肥が8kg/10aにおける出芽率は、基肥がそれより少ない場合に比べてやや劣る傾向がみられた。窒素追肥による子実重増加の効果は、基肥のみの子実重が相対的に低い水準にあるほ場において大きくなる傾向がみられた。

(c) 早期収穫試験:成熟期は早期播種により6～2日、べたかけ処理により4～3日早まった。子実重は標準に比べ5/16播種でやや劣ったが、5/25播種では同等であった。子実重はいずれの播種日ともべたかけ処理により増加した。

(11) 遺伝子組換え作物交雑等防止事業

(平成18～20年、畑作園芸科、病虫科)(545010)

a 試験目的：北海道が制定した「遺伝子組換え作物の栽培等による交雑等の防止に関する条例」で示した「交雑防止措置基準」の3年後の検証、見直しのため、基準に示される隔離距離等における交雑の有無を調査し、検証に必要なデータを蓄積する。

b 試験方法：

(a) 他家受粉による交雑に関する調査:北見農試場内(訓子府町)の菜豆圃場の中心に花粉親区(約100m²)を設置し、その内部(約10m²)お

よび4方位（隔離距離10m 農水省実験指針 各区約30m²）に種子親区を配置した。

各種子親区から収穫した全量の種子を対象に子葉色が黄のキセニア粒を目視で調査する。キセニア粒と推定される種子について、DNAマーカーにより交雑の有無を判定した。

(b) 遺伝子組換え作物交雑等確認調査：本年は、解放系での遺伝子組換え大豆栽培の計画がなく未実施。

c 成績の概要：

(a) 他家受粉による交雑に関する調査：目視による推定キセニア粒は、北10mを除く3方位で観察された。DNAマーカーにより最終確認を行った結果、花粉親との交雑率は、0～0.008%であった。風向とキセニア粒の確認された試験区との間に関係が認められないことから、キセニア粒は風媒ではなく、虫媒により発生したと考えられる。また、西10mで花粉親と異なる大豆との交雑と考えられるキセニア粒が確認された。花粉親と異なる大豆との最短距離が70mであったことから、70m以上離れた場所の大豆の花粉が原因である可能性が示唆された。

2 てんさいに関する試験

(1) てんさい現地選抜ほ

(昭和48年～継続) (121610)

a 試験目的：北海道農業研究センター畑作研究部で育成した系統の生産力を検定し、網走地方に適する系統の選抜を行う。

b 試験方法：2品種16系統を供試し、1区13.2m²、乱塊法4反復、移植栽培、当場の標準耕種法により実施。供試面積40a。

c 成績の概要：標準品種「モノホマレ」と比較して、根重は「N1472」が「モノホマレ」対比で108%と一番多く、次に「N1471」が多かった。根中糖分は「N1465」が「モノホマレ」対比で107%と一番高く、以下「N1468」、「N1466」、「N1467」、「N1463」の順で高かった。糖量は「N1467」が「モノホマレ」対比で110%と一番多く、以下「N1472」、「N1468」、「N1471」、「N1469」の順で多かった。不純物価は「N1466」が「モ

ノホマレ」対比で74%と一番低く、以下「N1465」、「N1468」、「N1467」の順で低かった。逆に「N1461」は高かった。

根腐症状は「N1470」、「N1466」、「N1471」、「N1475」が少ない。逆に「N1462」、「N1476」、「N1467」、「N1465」、「N1474」、「N1461」、「N1472」、「N1469」は多い（指数1～3の株率が50%以上）。褐斑病は「N1463」、「N1473」、「N1475」、「N1476」、「N1474」、「N1461」、「N1464」、「N1465」、「N1466」、「N1471」が少ない（指数1未満）。

抽苔株率は全供試系統で少なく、「N1465」、「N1466」、「N1475」の0.5%が最高であった。

以上のことから、「N1468」、「N1471」、「N1466」がやや有望と考えられる。

(2) てんさい系統適応性検定

(昭和48年～継続) (124060)

a 試験目的：北海道農業研究センター畑作研究部で育成した系統について、網走地方における適応性を検定する。

b 試験方法：6品種（標準品種「モノホマレ」）、4系統を供試し、1区13.2m²、乱塊法4反復、移植栽培、当場の標準耕種法により実施した。供試面積20a。

c 成績の概要：

対照品種「カブトマル」と比較した結果は以下のとおりである。＜評価の説明＞×：劣る、△：やや劣る、□：同等、○：やや有望、◎：有望

「北海92号」：根重はやや少なく、糖分はやや高く、糖量はやや少ない。不純物価はやや高い。根腐症状は同等。褐斑病はやや多い。抽苔が多い。評価は×。

「北海93号」：根重は少なく、糖分は高く、糖量はやや少ない。不純物価はやや低い。根腐症状は同等。褐斑病はやや少ない。評価は□。

「北海95号」：根重、糖分、糖量、不純物価は同等。根腐症状及び褐斑病は同等。評価は□。

「北海96号」：根重は同等、糖分はほぼ同等、糖量は同等。不純物価はやや低い。根腐症状は多い。褐斑病はやや多い。評価は△。

(3) てんさい輸入品種検定試験

(平成16～20年) (222420)

a 試験目的：輸入品種の特性調査並びに生産力検定を行い、当地方における適応性を検定する。

b 試験方法：7品種(標準品種「モノホマレ」)、9系統を供試し、1区13.2㎡、乱塊法4反復、移植栽培、当場の標準耕種法により実施。供試面積20a。

c 成績の概要：

<評価の説明>◎：有望、○：やや有望、□：並、△：やや劣る、×：劣る。

「H135」：「アセンド」と比較して、根重は同等、糖分はやや高く、糖量は同等。不純物価はやや低い。褐斑病はやや多く、根腐症状は同等。評価は□。

「H136R」：「アセンド」と比較して根重は多く、糖分はやや低く、糖量は多い。不純物価はやや低い。褐斑病は少なく、根腐症状は同等。評価は◎。「リゾマックス」と比較して、根重、糖分はほぼ同等、糖量はやや多い。不純物価は同等。褐斑病、根腐症状は同等。評価は○。

「H137」：「アセンド」と比較して、根重は多く、糖分はほぼ同等、糖量はかなり多い。不純物価はやや低い。褐斑病は少なく、根腐症状は同等。評価は◎。「リゾマックス」と比較して、根重は同等、糖分は高く、糖量はやや多い。不純物価は同等。褐斑病、根腐症状は同等。評価は◎。

「HT27」：「クローナ」と比較して、根重は同等、糖分は低く、糖量はやや少ない。不純物価は低い。褐斑病は少なく、根腐症状は同等。評価は△。「モリーノ」と比較して、根重はやや少なく、糖分は高く、糖量は同等。不純物価は極めて低い。褐斑病はやや少なく、根腐症状は少ない。評価は○。

「HT28」：「クローナ」と比較して、根重は多く、糖分はやや低く、糖量は多い。不純物価はやや低い。褐斑病、根腐症状は少ない。評価は◎。「モリーノ」と比較して、根重はやや多く、糖分は高く、糖量は多い。不純物価はかなり低い。褐斑病は同等で、根腐症状は少ない。評価は◎。

「HT29」：「クローナ」と比較して、根重は同等、糖分はほぼ同等、糖量は同等。不純物価は低い。褐斑病、根腐症状は少ない。評価は○。「モリーノ」と比較して、根重はほぼ同等、糖分は高く、糖量は同等。不純物価は極めて低い。褐斑病はやや少なく、根腐症状は

少ない。評価は◎。

「KWS4S65」：「えとぴりか」と比較して、根重は多く、糖分はやや低く、糖量は多い。不純物価は高い。褐斑病は同等で、根腐症状はやや少ない。評価は□。

「KWS5R16」：「えとぴりか」と比較して、根重は多く、糖分はやや低く、糖量は多い。不純物価は高い。褐斑病、根腐症状は少ない。評価は○。「きたさやか」と比較して、根重は同等、糖分は高く、糖量は多い。不純物価はやや高い。褐斑病はやや多く、根腐症状はほぼ同等。評価は○。

「KWS6S99」：「えとぴりか」と比較して、根重は多く、糖分はほぼ同等、糖量は多い。不純物価は高い。褐斑病は多く、根腐症状は少ない。褐斑病が際だつて多いため、評価は×。

(4) てんさいそう根病抵抗性品種検定試験

(昭和63年～継続)(222030)

a 試験目的：てんさいそう根病抵抗性を持った有望輸入品種系統について、そう根病発生圃場で栽培し、発病程度や生産力について検討する。

b 試験方法：移植栽培において、乱塊法3反復で、7品種(標準品種「モノホマレ」)、4系統を供試した(1区13.2㎡)。供試面積10a。

c 成績の概要：

「H136R」：「リゾマックス」との比較では、根重、根中糖分、糖量共にほぼ同等。有害性非糖分では、アミノ態窒素はやや低く、カリウムとナトリウムはほぼ同等であった。そう根病抵抗性は「強」。

「H137」：「リゾマックス」との比較では、根重はやや少なく、根中糖分はやや高く、糖量は同等。有害性非糖分では、アミノ態窒素とナトリウムはやや低く、カリウムはほぼ同等であった。そう根病抵抗性は「強」。

「HT27」：「モリーノ」との比較では、根重は少なく、根中糖分は高く、糖量はほぼ同等。有害性非糖分では、アミノ態窒素とカリウムは極めて低く、ナトリウムはかなり低い。そう根病抵抗性は「強」。

「HT28」：「モリーノ」との比較では、根重、根中糖分、糖量共にやや多かった。有害性非糖分では、アミノ態窒素はかなり低く、カリウムとナトリウムはやや低い。そう根病抵抗性は「強」。

「HT29」:「モリーノ」との比較では、根重はやや少なく、根中糖分は高く、糖量はほぼ同等。有害性非糖分では、アミノ態窒素とナトリウムは極めて低く、カリウムはかなり低い。そう根病抵抗性は「強」。

「KWS5R16」:「きたさやか」との比較では、根重は少なく、根中糖分はほぼ同等で、糖量はやや少ない。有害性非糖分では、アミノ態窒素は極めて高く、カリウムはほぼ同等、ナトリウムはやや高い。そう根病抵抗性は「強」。

(5) てんさい特性検定(そう根病)

(昭和63年～継続)(123060)

a 試験目的: 北海道農業研究センター畑作研究部の有望育成系統について、そう根病発生圃場での発病程度や生産力を調査し、品種選定の資とする。

b 試験方法: 5品種(標準品種「モノホマレ」)、1系統を供試し、1区13.2㎡、乱塊法3反復、移植栽培、当場の標準耕種法により実施。

供試面積10a。

c 成績の概要:

「北海92号」:「モノホマレ」と比較して、根重は多く、根中糖分はやや少なく、糖量はほぼ同等。有害性非糖分では、アミノ態窒素とナトリウムはほぼ同等で、カリウムはやや多い。「モノミドリ」と比較すると根重は多く、糖分は同等で、糖量は多い。有害性非糖分ではアミノ態窒素とカリウムは高く、ナトリウムはやや低い。収量面では、「モノホマレ」(抵抗性:やや弱)に近く、有害性非糖分の反応は、「モノホマレ」(抵抗性:やや弱)に近い。また、葉部黄化程度は「モノホマレ」(抵抗性:やや弱)並である。

以上より、本年の「北海92号」のそう根病抵抗性は「やや弱」と考えられる。

(6) てんさい品種の登熟調査

(平成16年～18年)(222440)

a 試験目的: てんさい品種の生育を追跡調査し、根重・根中糖分の推移について検討する。

b 試験方法: 直播;(中間型)「モノホマレ」、移植;(中間型)「モノホマレ」、「アーベント」(糖分型)「あまいぶき」、「えとびりか」、「クローナ」を供試、

15日おきにサンプリングし、草丈、生葉数、根周、茎葉重、根重、根中糖分について測定。乱塊法3反復、1区100㎡、供試面積50a。

c 成績の概要:

(a) 中間型(「アーベント」)と糖分型(「あまいぶき」、「えとびりか」、「クローナ」)の比較;茎葉重に関しては、最大期はすべての品種で9月上旬であった。また、「アーベント」は8月上旬以降、他の品種より旺盛な生育を示した。根重に関しては、サンプリング誤差による変動が大きいものの、「アーベント」の9月上旬からの増加量は多く、「あまいぶき」は少なかった。根中糖分に関しては「アーベント」は9月上旬以降、常に低く推移し、「あまいぶき」は高く推移した。10月上旬以降の「あまいぶき」、「クローナ」、「えとびりか」の差異は小さく、判然としなかった。

(b) 移植栽培と直播栽培の比較(「モノホマレ」のみ);茎葉重に関しては、7月下旬まで移植が大きく上回るが、7月上旬から8月上旬にかけての直播の増加量は多く、移植との差は8月上旬からは小さい。最大期は共に9月上旬であった。根重に関しては、移植が常に上回るが、その差は7月上旬から8月下旬にかけて急速に拡大し、その後はやや少なくなる。根中糖分に関しては、9月上旬まで移植が上回るが、9月下旬以降の差は小さい。

3 野菜に関する試験

(1) たまねぎ新品種育成試験(出荷期間拡大に対応した新品種開発)

(平成10年～19年)(113310)

a 試験目的: 北海道に適し、作期適応性・品質・貯蔵性に特色ある品種を育成する。

b 試験方法: 親系統の育成およびF₁組合せ能力検定試験(生産力予備検定)は火山性土ほ場で、乾腐病抵抗性試験は同病検定ほ場で行った。交配・採種はビニールハウスで行った。供試面積は15a。

c 成績の概要:

(a) 親系統の育成試験

①採種:前年度母球養成と選抜した基礎集団、自殖および小規模集団採種30系統の自殖および小

規模集団採種300系統の採種を実施した。

②母球養成・選抜：花粉親系統育成では、2004年に採種した40基礎集団について母球養成と選抜を実施した。

③花粉親系統の維持・増殖：20系統の中～大規模採種を実施した。また、16系統の母球養成と特性調査を実施した。④雄性不稔・維持系統の維持および増殖：28組合せの集団採種を実施するとともに、52点の母球養成と特性調査を行った。

(b) F₁組合せ能力検定試験（生産力予備検定）

(ア) 供試したF₁系統46点のうち、「スーパー北もみじ」同等以上の収量性(総収量)を示したのは13系統であった。交配組合せでは、花粉親「8943-03M4」、種子親「KTM97113A」を供試したF₁系統の収量性が高くなっていった。②雄性不稔F₁系統を種子親に供試した交配(三系交配)では、期待された収量性が得られたF₁系統は認められなかった。

(c) 乾腐病抵抗性検定

清水・中野(1995)の苗浸漬接種法によりF₁系統の抵抗性を検定した。花粉親系統「9620m2M1」および「OKM86430M」を交配親として供試したF₁系統および種子親系統「99TC16-02A」を供試したF₁系統は、いずれも発病率が低かった。

(2) 野菜地域適応性検定試験(たまねぎ、メロン)

(平成14年～19年)(113360)

a 試験目的：育成系統の当地域における適応性を検定し、優良品種決定の資料とする。

b 試験方法：

[たまねぎ]「北見交38号」(現地2年目)、「北見交46号」(現地1年目)、比較品種5点供試。留辺蘂町、北見市、上湧別町他で実施。供試面積10a。

[メロン]赤肉の「空知交16号」および「空知交17号」(検定)、「ルピアレッド」(標準)を供試。北見市農業技術センターでハウス無加温栽培実施。供試面積0.8a。

c 成績の概要：

[たまねぎ]「北見交38号」：北見交38号：葉色は薄く、株は開張気味ではあったが、地上部の生育は旺盛であった。倒伏期は「北早生3号」と同等からやや早く、収量性は「北早生3号」同等以

上であった。各現地とも評価は概ね良好であった。

[メロン]「空知交16号」：「ルピアレッド」と比較して、正球でネット形質は優った。食味はやや優り、収量性はやや劣った。

「空知交17号」：「ルピアレッド」と比較して、正球でネット形質は優った。食味はやや優り、収量性はやや劣った。

(3) 野菜系統適応性検定試験(ヤーコン)

(昭和40年～継続)(124075)

a 試験目的：農研機構の育成系統について当地方における適応性を検定する。

b 試験方法：

[ヤーコン]「SY209」(検定)、「SY233」(検定)、「SY232」(検定)、「サラダオトメ」(標準)を供試した。供試面積2.0a。

c 成績の概要：

[ヤーコン]

「SY209」：平均イモ重はやや上回り、規格内収量は同等であった。イモの形状の揃い、表面の滑らかさは同等であった。評価は「○」。

「SY233」：平均イモ重は下回り、規格内収量も指数で91であった。イモはやや細長く、形状の揃い、表面の滑らかさは同等であった。評価は「△」。「SY232」：平均イモ重は下回り、規格内収量も指数で88であった。イモの形状の揃い、表面の滑らかさはやや勝った。評価は「△」。

(4) 良食味・高貯蔵性たまねぎ新品種育成

(平成16年～20年、畑作園芸科・病虫害科)(400310)

a 試験目的：良食味・高貯蔵性で、耐病性に優れるF₁品種を早期に育成する。

b 試験方法：両親系統育成試験、導入品種・系統比較試験、F₁組合せ能力検定試験を農試とホクレン農総研で実施。供試面積20a。成分分析、食味試験、検定試験供試系統の乾腐病抵抗性検定を農試とホクレン農総研で実施。*Botrytis squamosa*による白斑葉枯病の接種条件を検討(病虫害科)。

c 成績の概要：

(a) F₁組合せ能力検定試験（生産力予備検定）

① F₁検定交配：2005年度に試験栽培した種子親系統と交配可能な雄性不稔 F₁系統を供試した約100組合せの検定交配を行い、70組合せから次年度試験用の種子を得ることが出来た。

② F₁組合せ能力・生産力予備検定：試験供試系統198点のうち、花粉親系統「PR94517-01-01m1 M1」他3点、種子親系統「PR94504-01-03A」他2点を供試したF₁系統に収量性の高さが認められた。試験結果から「PRCX465」を「北見交51号」、「PRCX678」を「北見交52号」と命名した。

(b) 育成系統生産力検定試験

「北見交46号」（検定3年目）：収量性は「スーパー北もみじ」に優り、「純心」にやや劣ったが、倒伏期が「純心」よりやや早いことから、総合判定はやや優ると判断し、次年度も試験を継続する。

「北見交49号」（検定1年目）：ホクレン農総研との協議の結果、本系統については廃棄とする。

「北見交50号」（検定1年目）：倒伏期が「スーパー北もみじ」よりも早く、収量性は「北見交49号」に優っていることから、次年度も試験を継続する。

(c) 育成系統の内部品質調査：各品種・系統の内部品質、調理適性を調査した。

(d) 乾腐病抵抗性検定

三系交配 F₁系統には「スーパー北もみじ」より発病率が低い系統は認められなかった。単交配 F₁系統では、「PRCX757」、「PRCX765」、「PRCX524」等、「スーパー北もみじ」と同程度以下の発病率の系統が認められた。

(5) たまねぎ極早生F₁系統種「北見交38号」及び「同39号」の採種技術確立と品種特性評価

（平成17年～19年）(400320)

a 試験目的：北見農試、ホクレンおよびサカタのタネとの共同研究で育成した極早生 F₁系統の特性を検討する。

b 試験方法：

「北見交38号」の生産力検定試験、乾腐病抵抗性検定および内部品質評価を行った。

c 成績の概要：

「北見交38号」は、標準品種「北早生3号」と比較して倒伏期はやや早く、収量性と球外観品質に優れていた。乾腐病接種検定結果では、強指標品種「スーパー北もみじ」よりもやや発病率が低かった。内部品質は既存の極早生品種と同程度であった。「北見交38号」については、平成18年度の北海道農業試験会議（成績会議）において優良品種（普及奨励）に認定された。

(6) 加工・業務用途向けたたまねぎ品種の育成と低コスト生産技術の確立

（平成18年～22年）(213320)

a 試験目的：

親系統「北見48号」の各種試験を実施するとともに、その親系統を交配した F₁系統の農業特性を評価し、加熱調理に適した加工・業務用途向け品種の早期育成・普及に取り組む。

b 試験方法：

親系統「北見48号」の生産力検定試験、採種性試験、乾腐病抵抗性検定、内部品質評価および栽培特性調査を行った。

c 成績の概要：

(1) 生産力検定試験

「北見48号」の倒伏期は「スーパー北もみじ」より4日遅く、青立株の発生が目立った。総収量は「スーパー北もみじ」に約15%劣った。株当たりの採種量は約3.8～5.0gであった。「北見48号」を花粉親に供試した F₁採種では各種子親系統6組合せにおいて採種することができた。乾腐病菌苗接種検定による「北見48号」の発病率は「スーパー北もみじ」より高かった。「北見48号」の内部品質値は他の品種と比べて高かった。栽培特性調査の結果、「北見48号」の施肥反応は小さく、各区ともに収量水準は比較的高かった。

(7) たまねぎ減農薬栽培技術モデルの策定に向けた技術開発と実証

（道費、平成18～19年）(552020)

a 試験目的：たまねぎに対する減農薬栽培技術を確立するため、農薬散布回数と生育・収量の関係を検討する。

b 試験方法：

(a) 低地土圃場での成績：試験圃場＝灰色低地土、供試品種数6、播種＝2月14日、定植＝4月24日・4月25日・5月11日、他の栽培様式は農試慣行による。

(b) 火山性土圃場での成績：試験圃場＝黒色火山性土、供試品種数4、播種＝2月14日、定植＝4月26日・5月11日、他の栽培様式は農試慣行による。

(c) 窒素用量試験：試験圃場＝灰色低地土、供試品種数2、窒素施肥水準6(0～30kg/10a)、播種＝2月14日、定植＝4月25日、他の栽培様式は農試慣行による。

(d) たまねぎ圃場への緑肥導入効果：試験圃場＝灰色低地土、供試品種数4、作付け体系3(前年たまねぎ栽培後に裸地、えん麦野生種、えん麦普通種、播種＝2月14日、定植＝4月25日、他の栽培様式は農試慣行による。

c 成績の概要：

(a) 低地土圃場での成績：これまでの試験結果から提案されたたまねぎ減農薬栽培モデルによる場内及び現地実証試験を実施した。散布回数(成分回数)は4水準を設定し、慣行区：30回、減農薬Ⅰ区：15回、減農薬Ⅱ区：10回、減農薬Ⅲ区：5回を目標とした。北見農試低地土圃場では、「慣行区」の規格内収量に対して、減農薬区は10%程度の減収となったが、「減Ⅰ区」と「減Ⅲ区」の平均球重比はともに‘96’であり、球肥大には差はなかった。腐敗球の発生は各試験ともにほとんどなく、白斑葉枯病は「減Ⅲ区」でも微発生であった。

(b) 火山性土圃場での成績：北見農試火山性土圃場では、「慣行区」の球重・規格内収量に対して、減農薬区での減収が明らかであった。腐敗球および白斑葉枯病の発生は全般的に少ないことから、減農薬区での減収はネギアザミウマによる食害が要因と思われる。

(c) 窒素用量試験：平均球重は、各品種ともに窒素施肥量12.5kg/10a以上ではほぼ横ばいとなり、これ以上の多肥による増収効果は認められなかった。無窒素区では変形球の発生がやや多かった。病害の発生は防除回数が少ないにも関わらず

全般的に発生が少なかった。窒素施肥量30kg/10a区においても白斑葉枯病、軟腐病の発生がほとんどなく、多肥条件と病害発生との関係は明らかにならなかった。

(d) たまねぎ圃場への緑肥導入効果：北見農試のたまねぎ長期連作圃場に緑肥を導入し、翌年のたまねぎの生育を調査した。前年度の後作緑肥の草丈は50cmに達し、生育量は充分であったと思われるが、翌年のたまねぎの生育は連作区、緑肥区ともに同等であり、生育促進効果は認められなかった。軟腐病の発生に処理間差はなかった。紅色根腐病についても根切り時の根の赤変程度を肉眼による観察で調査したが、全般的に発生が少なく処理間差はなかった。

(8) たまねぎのコスト削減生産技術の組み立てと実証

(受託、平成18～19年)(223332)

a 試験目的：網走地域におけるたまねぎ直播栽培の導入品種選定と適正な窒素施肥量について検討する。

b 試験方法：試験圃場＝低地土・火山性土、供試品種数5、播種＝4月20日、他の栽培様式は農試慣行による。

c 成績の概要：やや圃場の土壌水分が多い4月19日にロータリーを施工した。播種直後の20日の夜から21日の朝にかけて豪雨があり、土壌表面が著しく硬化したため、低地土圃場の出芽率は低くなり試験区によっては50%以上の欠株率となった。しかし、球肥大そのものは良好であり、品種によっては移植栽培の球重を上回った。火山性土圃場では、球肥大は極早生・早生品種では移植栽培を上回ったが、中・晩生品種では劣った。そのため、中・晩生品種の直播栽培における規格内収量は「北もみじ2000」、「スーパー北もみじ」、「北見交46号」の3品種の平均で移植栽培に対して約25%の減収となった。

(9) 海外収集遺伝資源の特性調査

(平成17～18年)(117210)

a 試験目的：「植物遺伝資源の探索・導入」

により海外（オランダ・スペイン）から収集した遺伝資源（21点）について特性調査を実施し、育種素材として活用するための資とする。

b 試験方法：試験は北見農試圃場及び美幌町現地圃場において行った。

(a) 農試圃場

播種：3月10日 定植：5月15日（手植え）

栽植密度：畦幅30cm、株間10.5cm

施肥：N：P₂O₅：K₂O＝15:50:15（kg/10a）

1区株数：65～69株、

調査項目：肥大期、倒伏期、平均球重、耐抽台性、Brix、ピルビン酸生成量

(b) 美幌町現地圃場

定植：5月15日

施肥：N：P₂O₅：K₂O＝12:24:12（kg/10a）

1区株数：60株

c 成績の概要：北見農試圃場での栽培試験では「Morada de Amposta」、「Branca de Lisboa」、「Monquerina」、「Recas」の4品種・系統の生育が旺盛であり、高い収量性を示した。美幌町の紅色根腐病発生圃場調査では、紅色根腐病の発生については、「Monquerina」、「Recas」で比較品種の「スーパー北もみじ」より根の赤変程度が低かった。

4 新農業資材実用化試験

(1) 除草剤及び生育調節剤の実用化試験

(昭和45年～継続) (229020)

a 試験目的：新除草剤及び植物生育調節剤が各種作物の生育や収量に与える影響を検討する。

b 試験方法：除草剤はてん菜7点、たまねぎ3点を供試した。

c 成績の概要：除草剤・生育調節剤については、次年度も試験を継続する。

(2) 肥料及び土壌改良資材の実用化試験

(昭和45年～継続) (229030)

本年度の実施はなし。

2) 馬鈴しょ科（農林水産省馬鈴しょ育種指定試験地）

1 ばれいしょ新品種育成に関する試験

(ばれいしょ育種指定試験)

(平成18～22年) (121510)

(1) 新品種育成に関する試験

a 試験目的：寒地北東部向け耐冷性、病害、ジャガイモシストセンチュウ抵抗性、でん粉および加工食品原料用品種の育成。

b 試験方法：通常の交雑育種法による。

c 成績の概要：

(a) 交配：ジャガイモシストセンチュウ、そうか病、疫病などの抵抗性を有する用途別新品種を育成するため、141組合せ、16,281花の交配を行った。104組合せから160,151粒の種子を採種した。

(b) 実生個体選抜試験：でん粉原料用22組合せ25,110粒、生食・加工食品用37組合せ35,034粒の真正種子を播種し、本葉展開後にポットに移植。1株から1塊茎ずつ収穫し、でん粉原料用21組合せ6,404個体、生食・加工食品用37組合せ17,460個体を選抜した。

(c) 第二次個体選抜試験：でん粉原料用24組合せ4,808個体、生食・加工食品用35組合せ5,094個体を供試。個体別に収量、でん粉価等の調査を実施し、でん粉原料用19組合せ318個体、生食・加工食品用26組合せ213個体を選抜した。

(d) 系統選抜試験：でん粉原料用28組合せ285系統、生食・加工食品用23組合せ192系統を供試。1区10株、1区制。品質、収量性、熟期などを参考に、でん粉原料用13組合せ22系統、生食・加工食品用8組合せ23系統を選抜した。

(e) 生産力検定予備試験：19組合せ40系統を供試。1区30株、2反復。熟期、生育および収量調査等の結果、13組合せ19系統を選抜した。

(f) 生産力検定試験：当時育成15系統に加え、北海道農業研究センター育成2系統を供試。1区36株、3反復。10組合せ10系統を選抜した。地方番号系統では「北育6・11号」を廃棄、「北育13

号」を継続検討とした。また北系系統では、「北系29号」について、北系番号のまま継続することとした（系適・地適には供試せず、十勝農試での有機栽培の結果により判断する）。新北育系統では、特に離水率が「紅丸」より低く、でん粉品質に優れるでん粉原料用系統「北系30号」を「北育14号」として選抜した。また新北系系統として、難糖化性に優れる加工用系統「北系31号」、でん粉品質が「紅丸」並に優れるでん粉原料用系統「北系32・33号」を選抜した。

(g) 有望系統の栽培特性検定試験：

①栽植密度と施肥量：生食用系統の「北育6号」については3水準の栽植密度（密植、標植、疎植）および2水準の施肥量（標肥、増肥）、でん粉原料用系統の「北育11・13号」については3水準の栽植密度（密植、標植、疎植）および4水準の施肥量（標肥、多肥、追肥）に対する反応性を各用途の標準品種と比較した。

②生育追跡：「北育6・11・13号」の生育および収量を半月毎に調査した。

(h) 野生種利用による新品種育成に関する試験：実生個体選抜において、2組合せ 858個体を選抜した。

(i) 品種並びに種に関する試験：品種保存は456品種・系統を供試し、ウイルス病徴の激しい個体を抜き取り456品種・系統を保存した。異種ばれいしょは48系統、種間雑種系統は73系統をそれぞれ保存した。

2 ばれいしょ重要病害虫抵抗性系統の選抜強化

(平成18年～22年)(112310)

a 試験目的：そうか病、ジャガイモシストセンチュウ抵抗性系統の選抜を特に強化し、疫病等の病害虫抵抗性を複合して保有する品種開発を促進する。

b 試験方法：

(a) そうか病：第二次個体選抜世代23組合せ4,979個体、系統選抜世代10組合せ66系統、生産力予備検定世代5組合せ5系統、生産力検定世代2組合せ2系統を供試し、そうか病汚染圃場で選抜を行った。

(b) ジャガイモシストセンチュウ：第二次個体選抜世代41組合せ 457個体、系統選抜世代15組合せ 106系統について、カップ検定法により斜里町農協の管理の下で抵抗性検定を実施。

c 成績の概要：

(a) そうか病：発病度、病徴、いもの外観、収量等から、第二次個体選抜世代については、20組合せ 113個体を選抜した。系統選抜世代および生産力予備検定世代については、一般圃場での結果も併せて、それぞれ2組合せ4系統、2組合せ2系統を選抜した。また、生産力検定世代については“弱”判定となったが、加工品質に優れることから1組合せ1系統を選抜した。

(b) ジャガイモシストセンチュウ：シスト寄生程度により評価し、第二次個体選抜世代については 369個体、系統選抜世代については100系統を抵抗性として判定した。

3 馬鈴しょ奨励品種決定調査

(昭和41年～継続)(522030)

a 試験目的：当场および北農研センター育成の有望系統について、管内現地における適応性を調査し、優良品種決定の資とする。

b 試験方法：北見市、斜里町、中標津町において「北育11・13号」（北見市を除く）、「北海94号」および標準・比較品種を供試し、農家慣行耕種法により、乱塊法2反復で実施。

c 成績の概要：「北海94号」が優良品種に認定された。「北育13号」を次年度も引き続き、「北海97号」を新たに供試予定である。また品種比較試験として、「北育14号」を斜里町、中標津町において供試予定である。

4 馬鈴しょ輸入品種等選定試験

(平成18年～22年)(222310)

a 試験目的：ばれいしょの輸入品種、民間育成系統について当地方における適応性を検定する。

b 試験方法：北見農試、北見市、斜里町において「HP01」（生食用）、「CP04」（加工用）および標準品種を供試し、北見農試では生産力試験、

北見市および斜里町においては奨励品種決定調査に準じて実施。なお、北見農試においてのみ「HP02」（加工用）も供試した。

c 成績の概要：「HP01」が優良品種に認定された。「CP04」を次年度も引き続き供試予定である。「HP02」については育成場周辺地域でのジャガイモシストセンチュウ発生の影響を考慮し、試験を中断する。

5 体細胞育種法による高品質ばれいしょの開発 (平成16年～18年)(222320)

a 試験目的：従来の交雑育種法では改良が難しいでん粉品質（リン含量、離水率）を体細胞育種法により改良し、高品質でん粉原料用品種を育成する。

b 試験方法：中央農試で作出した体細胞変異再分化個体について、5集団 1,350個体を第二次個体選抜試験、前年度選抜した5集団88系統を系統選抜試験、4集団8系統を生産力検定予備試験、また再供試を加えた3集団4系統を生産力検定試験に供試し、収量調査及びでん粉品質検定を行った。

c 成績の概要：収穫調査及びでん粉品質検定のうち、第二次個体選抜試験については5集団221個体、系統選抜試験については2集団5系統、生産力検定予備試験については3集団6系統を選抜した。生産力検定試験については、「コナフブキ」よりは品質の向上が見られるが、「紅丸」には及ばないためすべて廃棄とした。

6 疫病抵抗性ばれいしょ品種の開発促進 (平成16年～20年)(222340)

a 試験目的：疫病圃場抵抗性を実生集団で選抜することによって育種を効率化し、疫病抵抗性品種の開発を促進する。

b 試験方法：

(a) 接種検定：北見農試疫病無防除圃で発生した疫病菌（単孢子分離は北海道大学にて実施）を用い、疫病圃場抵抗性を目標とする9組合せ8,451個体の実生集団に上記の疫病菌を接種し、18℃で1週間置き病斑の有無を調べた。

(b) 圃場検定：昨年選抜された材料について、

第二次個体選抜試験には4組合せ 186個体、系統選抜試験には3組合せ12系統を供試した。

c 成績の概要：

(a) 接種検定：9組合せ 1,856個体を選抜した。選抜率は22.0%であった。

(b) 圃場検定：第二次個体選抜試験において2組合せで抵抗性個体が出現しなかった。これらは自殖後代であった可能性が高い。その他の2組合せにおける選抜率の平均は81%であり、昨年とほぼ同じであった。系統選抜試験においては12系統すべてが抵抗性であり、うち10系統が“強”、1系統が“やや強”、1系統が“中”であった。

7 マーカー選抜によるジャガイモYウイルス抵抗性品種の早期開発

(平成16年～20年)(222350)

a 試験目的：中央農試で開発されたPVY抵抗性遺伝子のDNAマーカーを用いてPVY抵抗性系統を早期世代から効率的に選抜する。

b 試験方法：第二次個体選抜試験供試材料のうち、PVY抵抗性を目標とした組合せについて収量・耐病性などによる選抜後、DNAマーカー検定に供試する。

c 成績の概要：13組合せ 138個体を供試し、12組合せ73個体がPVY抵抗性として判定された。

8 マーカー選抜によるジャガイモシストセンチュウ抵抗性品種の早期開発

(平成16年～20年)(222360)

a 試験目的：中央農試で開発されたジャガイモシストセンチュウ抵抗性を簡易に精度良く判定できるDNAマーカーにより、ジャガイモシストセンチュウ抵抗性系統を早期世代から効率的に選抜する。

b 試験方法：第二次個体選抜試験に供試した個体について、収量・耐病性などによる選抜後、DNAマーカー検定に供試する。

c 成績の概要：29組合せ 249個体を供試し、27組合せ 179個体がジャガイモシストセンチュウ抵抗性として判定された。

9 長期貯蔵可能な加工用馬鈴しょ新品種および

貯蔵技術の開発

(平成18～22年)(222370)

(1) 有望系統の特性評価

a 試験目的：輸入解禁による影響を抑えるために優れた品種開発が急務である加工用馬鈴しょにおいて、従来よりも早い段階から特性を検定し、品種登録や地域在来品種等による有望系統の速やかな品種化と普及を図る。

b 試験方法：

(a) そうか病抵抗性検定試験：ホクレン育成の有望系統4系統を北見農試内汚染圃場においてそうか病抵抗性を検定する。

c 成績の概要：

(a) そうか病抵抗性検定試験に供試した4系統のうち、1系統が“中”、1系統が“中～弱”、1系統が“弱”であった。

(2) 長期貯蔵に優れた品種開発促進

a 試験目的：輸入解禁による影響を抑えるため、長期貯蔵性に優れた加工用馬鈴しょの品種開発を促進する。

b 試験方法：

(a) 長期貯蔵性に優れた系統の検定強化：従来の検定・選抜方法の見直しを含め、難糖化性と長休眠性を併せ持つ長期貯蔵性に優れた品種の開発を促進する。

(b) 海外遺伝資源収集：加工適性の高いばれいしょ育種資源を海外から導入し、交配母本として使用する。

c 成績の概要：

(a) 交配母本については、休眠調査、チップ検定の結果により、長休眠、難糖化性に優れた母本を交配に使用する。第二次個体選抜世代において、従来より1年早い段階でチップ検定を行い、6組合せ142個体を選抜した。系統選抜世代、生産力検定予備世代、生産力検定世代については、次年度6月にもチップ検定を行うが、それぞれ3組合せ13系統、2組合せ3系統、1組合せ1系統を選抜した。生産力検定世代で選抜された系統については「北系31号」を付与し、試験を継続する。

(b) カナダ農業農産・食料省ばれいしょ研究センター、アメリカ農務省ベルツビル農業研究セン

ター、ミシガン州立大学作物土壌学部を訪問し26品種・系統を導入候補とした。今後導入する品種・系統についてはホクレン農総研と協議の上決定し、共同で使用する。

10 新農業資材実用化試験

(1) 除草剤及び生育調節剤の実用化試験

(昭和45年～継続)(229020)

a 試験目的：新除草剤及び新植物調節剤がばれいしょの生育や収量に与える影響を検討する。

b 試験方法：茎葉黄変始期におけるF-8426E0少水量およびAH-01液剤の茎葉枯凋促進効果について検討。供試品種はすべてコナフブキ。

c 成績の概要：F-8426E0少水量の効果は対照区と比べほぼ同等であり、AH-01液剤は対照区より高かった。茎葉枯凋促進効果について、F-8426E0少水量、AH-01液剤とも「◎」と判定した。なお、AH-01液剤については次年度茎萌芽性の確認も行う予定。

(2) その他資材の実用化試験

(昭和45年～継続)(229040)

a 試験目的：その他の新農業資材がばれいしょの生育や収量に与える影響を検討する。

b 試験方法：液状塗布型マルチング「エコ・サンコート」の生育促進効果を明らかにする。使用量60, 100kg/10aおよび無処理。供試品種は「男爵薯」。

c 成績の概要：処理による地温の上昇効果は判然としなかったが、萌芽促進効果は1日程度、初期生育の促進効果も1～2日相当認められ、生育のそろいも比較的良かった。しかし培土期頃には達観での生育の差は判然としなくなり、早掘り収穫における塊茎肥大の促進効果は認められなかった。次年度も継続予定。

3) 麦類科(農林水産省小麦育種指定試験地)

1 新品種育成試験

(1) 秋播小麦新品種育成試験

(平成18～22年)(121210)

a 試験目的：耐病性、耐穂発芽性など障害抵抗性を具備した良質、多収品種を育成する。

b 試験方法：小麦新品種育成に関する試験方法要綱及び小麦品質検定方法による。供試面積300a。

c 試験の概要：

(a) 品種に関する試験：品種保存として390品種・系統を栽植、特性を調査した。

(b) 交配およびF₁養成：141組合せの交配、採種を行い、147組合せのF₁の養成、採種を行った。F₁の次年度取扱いは、32組合せを個体選抜、78組合せを集団養成、14組合せを雪腐病集団淘汰、残りを廃棄とした。

(c) 個体選抜：F₂~F₅の36組合せ214,525個体を栽植、圃場選抜(2,501個体、30,960穂)の後に穂発芽検定を行い、35組合せ4,309個体(または穂)を選抜した。

(d) 系統育種法による系統選抜、育成：F₃世代12組合せ927系統を栽植し、圃場での形質、穂発芽検定の結果などから12組合せ136系統を選抜した。F₄以降72組合せ751群1,699系統を栽植し、圃場での形質、穂発芽検定の結果などから37組合せ266系統を選抜した。

(e) 集団養成：160組合せ(うち17組合せは雪腐病黒色小粒菌核を接種した集団淘汰)を養成した。19組合せを穂別系統、1組合せを個体別系統とした。その他次年度の取扱いは、61組合せを継続、5組合せを個体選抜、残りを廃棄とした。

(f) 集団育種法による系統選抜、育成：系統選抜1年目14組合せ2,376系統を栽植し、圃場での形質、穂発芽検定の結果などから12組合せ251系統を選抜した。系統選抜2年目以降45組合せ381群1,033系統を栽植し、圃場での形質、穂発芽検定の結果などから31組合せ105系統を選抜した。

(g) 派生系統育種法による系統選抜、育成：系統選抜1年目36組合せ6,141穂別系統を栽植し、圃場での形質、穂発芽検定の結果などから31組合せ484系統を選抜した。系統選抜2年目以降99組合せ838群2,147系統を栽植し、圃場での形質、穂発芽検定の結果などから55組合せ253系統を選抜した。

(h) 半数体育種法による系統選抜、育成：系統選抜1年目4組合せ2,392系統を栽植し、圃場での形質、穂発芽検定の結果などから4組合せ134系統を選抜した。系統選抜2年目以降22組合せ274群394系統を栽植し、圃場での形質、穂発芽検定の結果などから15組合せ59系統を選抜した。

(i) 特性検定試験：耐寒性(北見農試44品種系統)、雪腐大粒菌核病(北見農試48)、雪腐小粒菌核病(褐色小粒：上川農試492、黒色小粒：北見農試53)、紅色雪腐病(北見農試71)、雪腐病(中央農試遺伝資源部133)、耐病性(萎縮病：中央農試490、赤さび：中央農試102、赤さび病・うどんこ病：北見農試480、赤かび：北見農試病虫科38、小麦科522、十勝農試32)、穂発芽性(十勝農試145、北見農試355)について実施した。

(j) 生産力検定予備試験及び小規模生産力試験：402系統+標準・比較2~7品種を25セットの試験区に分け、4反復または2反復、反復なしでそれぞれ実施、99系統を選抜した。生産力検定予備試験の次年度の取扱いは、系適試験供試の1系統を新配付系統(北見83号)、3系統を継続とし、その他を廃棄とした。小規模生産力試験の選抜系統から10系統を新たに系適に供試する。

(k) 生産力検定試験：地方番号系統として「北見81号」、「北見82号」の2系統と比較・標準7品種を供試し、畦巾30cmの標準栽培、畦幅20cmのドリル標肥とドリル多肥の3試験を乱塊法4反復で行った。各地の奨励品種決定調査と合わせて検討の結果、「北見82号」を継続検討とした(「北見81号」は平成18年2月に北海道の優良品種に認定されたため、比較品種として取り扱った)。

(2) 春播小麦新品種育成試験

(平成18~22年)(121210)

a 試験目的：パン用良質、多収、各種障害抵抗性の品種を育成する。

b 試験方法：小麦新品種育成に関する試験方法要綱および小麦品質検定方法による。供試面積150a。

c 成績の概要：

(a) 品種に関する試験：品種保存として 392品種・系統を栽植、特性を調査した。

(b) 交配：107組合せ(圃場94、温室内13)を実施した。

(c) F₁養成：89組合せ(圃場74、温室内15)のF₁養成を実施した。

(d) 個体選抜：F₂~F₄の25組合せ、186,100個体を供試。2,131個体、15,240穂を圃場選抜し、穂発芽性、外観品質により室内選抜を実施した。

(e) 系統育種法による系統選抜、育成：系統選抜2年目以降5組合せ49群68系統を栽植し、圃場での形質、穂発芽検定の結果などから3組合せ5群5系統を選抜した。

(f) 集団養成：F₂~F₄の110組合せ供試(鹿児島F₃9組合せ、沖縄F₂~₃10組合せ冬季栽培)。

(g) 集団育種法による系統選抜、育成：系統選抜1年目11組合せ473系統を栽植し、圃場での形質、穂発芽検定の結果などから93系統を選抜した。系統選抜2年目以降21組合せ64群228系統を栽植し、圃場での形質、穂発芽検定の結果などから8組合せ14群25系統を選抜した。別にSSD法により育成したF₄~F₈9組合せを栽植し、圃場での形質、穂発芽検定の結果などから160系統を選抜した。

(h) 派生系統育種法による系統選抜、育成：系統選抜1年目25組合せ3,987系統を栽植し、圃場での形質、穂発芽検定の結果などから21組合せ307系統を選抜した。系統選抜2年目以降22組合せ124群413系統を栽植し、圃場での形質、穂発芽検定の結果などから18組合せ61群112系統を選抜した。

(i) 蒔培養による系統選抜、育成：第1代系統選抜試験は1組合せ84系統を栽植し、圃場での形質、穂発芽検定の結果などから6系統を選抜した。系統選抜2年目以降4組合せ20群145系統を栽植し、圃場での形質、穂発芽検定結果などから19群19系統を選抜した。

(j) 中央農試現地選抜試験：中央農試において選抜された道央以南向け品種育成系統6組合せ9群83系統を栽植し、圃場での形質、穂発芽検定結果から2群2系統を選抜した。

(k) 特性検定：生検、生子供試材料等の育成系統および導入品種等を供試し、耐病性、穂発芽性

について調査した。

(1) 生産力検定予備試験および小規模生産力試験：生産力検定予備試験10組合せ13系統、小規模生産力試験23組合せ58系統を2試験に分け、標準品種として「春よ恋」、比較品種として「ハルユタカ」を加えて実施した。収量性、病害、障害耐性、外観品質の優れた系統を品質検定試験に供試し、生産力検定予備試験では「北系春785」、「北系春786」、「北系春788」、「北系春791」の4系統を継続とした。小規模生産力試験では、15系統を継続とし、そのうち3系統に北系春番号を付した。

(m) 生検力試験：「北見春67号」、「北見春68号」および「北見春69号」と比較、標準3品種を供試。手播条播、ドリル播試験(肥料水準2処理)を実施。各地の奨励品種決定調査と合わせて検討の結果、「北見春67号」を新品種候補とした。また、「北見春69号」を継続とした。

(n) 穂発芽極難系統の育成：「17S6」、「18S4」、「18S6」、「18S9」、「18S24」は成熟期10日後収穫の穂に15℃8日間の人工降雨処理を行っても、発芽は極僅かで、高いフォーリングナンバーを維持した。

(3) 高品質小麦早期開発のための検定・選抜強化 (平成13年~18年)(112130)

ア 特性検定と選抜の強化

a 試験目的：病害・障害抵抗性を具備した高品質小麦の開発のため、耐病性、穂発芽性の検定、選抜の強化を図る。

b 試験方法：春まき小麦の赤かび病について奨決、系適材料16系統、比較18品種・系統をスプリンクラー灌水圃場で出穂前から毎時8分間スプリンクラーによる灌水を実施し、開花期に①*F. graminearum*孢子懸濁液(5×10⁴個/ml)の噴霧接種、②畦間に*F. graminearum*培養エン麦粒の散布により赤かび病の発生を助長し、3週間後に発病程度を調査した。また、ファイロンハウス内で散水を行い、開花期に穂中央部小穂の第1あるいは第2小花に濃厚孢子懸濁液10μlを接種(ポイント接種)し、3週間後に発病の進展程度を調査した。

春まき小麦の穂発芽性について北見農試育成の

小規模生産力検定試験及び生産力予備試験供試系統及び中央農試現地選抜系統を成熟期刈りと晩刈り(成熟期から10日後)で採取し、15℃で8日間人工降雨処理による穂発芽検定、発芽試験を実施した。

秋まき小麦の穂発芽について、北見農試育成の小規模生産力予備試験(以下、小規模生予)1年目供試系統305系統のうち、圃場廃棄系統を除く156系統、奨決・系適供試系統20系統、比較11品種・系統の計187品種・系統を用いて、成熟期1週間後に収穫し(奨決・系適系統は成熟期も収穫)、15℃で8~9日間人工降雨処理による穂発芽程度、発芽率を調査した。

c 成績の概要: 本年の接種試験では開花期の早い系統ほど発病度が低い傾向がみられた。抵抗性の判定は熟期別の指標品種の発病度と比較して評価した。検定系統中4系統は“やや強”と判定された。中央農試では「北系春783」、「北系春785」、「北系春788」等の発病度が低かった。ポイント接種では「北見春69号」が特に抵抗性を示した。

生産力検定予備試験供試系統については、初冬まき系統、「北系春785」以外の北系春系統の種子休眠性については、「春よ恋」、「春のあけぼの」より優れた。「北系春789」、「北系春790」の種子休眠性が特に優れた。小規模生予供試系統は、発芽性難の「BW148」並の系統の頻度が高く、供試した100系統の内、耐穂発芽性が難以上と判断された系統が39系統認められた。

秋まき小麦小規模生産力予備試験(以下、小規模生予)供試1年目の材料を6カ年計1,164系統について晩刈りし、人工降雨処理15℃の条件で穂発芽検定に供試した。年次を追うごとに穂発芽性“やや難”の「きたもえ」並以下の穂発芽程度を示す系統が増加し、平成16年以降は検定系統の半数程度は「きたもえ」並以下の穂発芽程度を示した。さらに、穂発芽性“難”の「北系1354」並以下の穂発芽程度を示す系統も増加した。

(4) 麦類特性検定(赤かび病)

(平成15年~)(123022)

a 試験目的: 東北および北海道の麦類の育成系統について赤かび病に対する抵抗性を検定する。

b 試験方法: 供試材料は東北農研育成系統および比較25品種・系統、北海道農研育成系統および比較21品種・系統、北見農試育成系統および比較54品種・系統。圃場にスプリンクラーを設置し、1時間毎に8分間灌水した。開花期に*F. graminearum* 分生子 5×10^4 個/mlを噴霧器で穂に接種した。秋まき・春まきともに接種3週間後および4週間後に1材料あたり20穂の発病指数(0:無-8:穂全体に発病)を調査した。抵抗性の判定は指標品種の発病指数と今年度の検定試験全体の傾向を参考にして決定した。

c 成績の概要: 秋まき材料の検定系統では“強”5系統、“やや強”22系統、“中”26系統、“やや弱”8系統、“弱”2系統であった。育成場ごとの“やや強”以上系統の割合は北見農試36.8%、北海道農研38.1%、東北農研48.0%であった。

春まき材料の検定系統では“やや強”3系統、“中”6系統、“やや弱”4系統、“弱”3系統であった。“やや強”系統の割合は18.8%であった。

(5) 道産小麦の安全性・安定性向上試験

(平成16~平成18年)(222120)

a 赤かび病抵抗性強化とDON低減による安全性向上

(a) 赤かび病抵抗性及びマイコトキシン産生抑制型品種の開発促進

① 赤かび病抵抗性及びマイコトキシン産生抑制型秋まき小麦の選抜

1) **試験目的:** 赤かび病抵抗性及びマイコトキシン産生抑制型秋まき小麦品種の育成を促進する。

2) **試験方法:** 赤かび病抵抗性に優れる母材と北見農試育成優良系統を交配する。養成した交雑後代について赤かび病菌接種によって圃場選抜を行う。小規模生予2年目以降の選抜系統はマイコトキシン含量を検定する。圃場にスプリンクラーを設置し、1時間毎に8分間灌水。各材料の開花期に*F. graminearum* 分生子 5×10^4 個/mlを噴霧器で

穂に接種した。一部材料は*F. graminearum*を培養したエン麦培地を圃場に散布して接種源とした。接種3週間後に1材料あたり20または10穂の発病指数(0:無-8:穂全体に発病)を調査した。菌接種6週間後に収穫し、40℃で24時間通風乾燥した。マイコトキシンの検定は2.2mm篩選サンプルをエライザ法によって検定した。

3) 成績の概要: 赤かび病抵抗性母材として遺伝資源の「蘇麦3号」、「蘇麦3号」由来の抵抗性をもつ「16036」等、およびこれらのF₁を用い優良系統との交配を行った。

熟期ごとの比較品種の発病度を参考にして抵抗性を判定した結果、奨決・系適材料の抵抗性は大半が「ホクシン」より優れる“中”以上であった。継続系統においては「北見82号」「15434」等、従来の系統よりかび粒率・DON含量の低い系統が認められた。また、接種検定によって選抜を実施した結果、「蘇麦3号」や「西海181号」の交雑後代に、既存品種に比べて非常に優れた抵抗性を示し、かつDON含量が少ない系統が認められた。

②赤かび病抵抗性及びマイコトキシン産生抑制型春まき小麦の選抜

1) 試験目的: 赤かび病多発条件下で赤かび病抵抗性系統を選抜する。また、マイコトキシン含量を検定し、マイコトキシン含量の少ない系統を選抜する。

2) 試験方法: 赤かび病抵抗性母材と優良系統を交配し、初期世代の赤かび病抵抗性選抜では、F₄~F₆の540系統について、スプリングラー灌水、および*F. graminearum* (TYK101-1株)を培養したエン麦粒の土壌表面への散布により赤かび病の発生を助長させ、発病が少ない系統を選抜した。マイコトキシン含量の検定は、小規模生産力試験供試系統のDON含量を測定した。分析はエライザ法によって行った。

3) 成績の概要: 「蘇麦3号」などの赤かび病抵抗性系統、またはそれらを利用して育成した赤かび病抵抗性系統「GS02-71」、「16S30」等と優良系統との交配を行った。また、初期世代の赤かび病抵抗性選抜では、指標品種と比較して発病の少ない系統を選抜した。選抜2年目には、弱い系

統が淘汰されており、今年は「やや強」系統並以上の系統を選抜した。「春よ恋」と比較してマイコトキシン含量が低く、赤かび病の発病も少ない系統が数系統見いだされた。

b 病害・障害抵抗性強化による安定性向上

(a) 穂発芽耐性の向上による収量・品質安定化技術の開発促進

①春まき小麦の穂発芽性強化

1) 試験目的: 穂発芽耐性に優れた系統と良質系統を交配し、良質で穂発芽耐性に優れる系統を選抜する。

2) 試験方法: F₂~F₄の14組合せについて、穂選抜を行った。穂選抜は、収穫後に40℃24時間の乾燥後に-20℃で冷凍保存し、その後、15℃6日間の人工降雨処理を行った。穂発芽程度は、1穂のうち発芽・発根1カ所につき0.5をかけて算出し、10カ所以上は5.0とした。初期世代の休眠性検定では、各系統から5穂を収穫し、40℃24時間の乾燥後に-20℃で冷凍保存し、その後、手で脱穀し、シャーレ上で17℃7日間の発芽試験を行った。この際、芽切り粒をカウントした

3) 成績の概要: 本年は、比較的高温登熟であり、収穫が遅れたこともあって休眠が浅い傾向にあると考えられ、全体的に人工降雨処理後の穂発芽程度が高かった。穂選抜については、穂発芽性“難”と思われる、穂発芽程度2.0または1.5以下のものを選抜した。昨年度穂選抜および個体選抜された系統から、比較系統を含め856点について発芽試験を行った。本年は、種子休眠がやや浅い傾向にあると考えられたため、処理温度を17℃とした。昨年に引き続き、休眠性が「北見春67号」並かそれ以上の系統を選抜した。

②秋まき小麦の穂発芽性向上と品質安定性評価

1) 試験目的: 穂発芽性“難”の高品質小麦の開発が促進され、既存品種よりも穂発芽耐性が強化された良質系統を選抜する。

2) 試験方法: 交配およびF₁養成。F₂世代3カ年で計15組合せ成熟期後10日頃に1組合せにつき約600~1,600穂収穫。15℃約10日間朝夕人工降雨処理を行い、穂発芽性に優れた小麦の選抜を行う。また、昨年穂発芽検定を行ったF₃-F₄世代について、

同様に穂発芽検定及び品質検定を行う。

3) 成績の概要：

良質・多収系統の穂発芽性の改良を目的に、交配を直近3カ年で計18組合せ実施した。交配以後はF₁養成の後、個体播種および集団養成を行った。直近3カ年において、F₂世代15組合せ計15,950穂を穂収穫し、15℃条件で約10日間、人工降雨処理を行った結果、特に「北系1802」など穂発芽性極難系統を交配親に用いた組合せでは穂発芽程度が0の穂が多数認められた。穂発芽検定の結果、穂発芽程度が0~0.5を示した13組合せ計3,353穂を選抜し、うち、10組合せ計1,940穂を穂別系統とした。

訓交3862を用いてF₂(平成16年播種)世代以降、各世代で穂発芽検定を行った結果、年次を重ねる毎に穂発芽程度の低い系統の頻度が高まった。さらに、品質検定を行った結果、親系統並に粉色が優れ、やや低アミロース型と推定される系統が選抜された。選抜系統の α -アミラーゼ活性を調査した結果、低アミロと判断される系統は認められなかった。

c 品質向上のための育種促進

(a) 各種めん用等多用途向け小麦の開発促進

① 試験目的：道産小麦の用途拡大のため各種用途用小麦の開発を促進する。

② 試験方法：既存の硬質・高蛋白品種や遺伝資源などを片親にし、北見農試育成優良系統を交配する。交雑後代から農業特性の優れた系統を選抜し、選抜系統について品質検定を行う。

初期世代から品質選抜を行うために、各種分析機器を利用した硬質・高蛋白系統の簡易選抜法を検討する。中華めん用の系統を選抜するために、かん水ペーストによるアルカリ発色後の粉色を測定する。

③ 成績の概要：硬質高蛋白母材として「Jagger」「RIALTO」「勝系79号」「17091」や、これらのF₁を片親とし、優良系統との交配を行った。

平成17年産と平成18年産の系統養成産物の品質分析結果を比較し、初期世代の簡易品質選抜方法を検討した。近赤外分析器による原粒蛋白、一粒分析計による粒硬度、SDSセディメンテーション

による24時間後の沈降量について、初期世代において有意な年次相関が認められた。これは前年度と同様の傾向であった。蛋白含量についてはF₄世代からの選抜が効率的であること、一粒分析計による調査、SDSセディメンテーションの調査によって初期世代からの硬質系統の選抜、沈降量の多い系統の選抜が可能であることが示された。

中期世代のビューラー製粉60%粉のかん水加水ペーストの色、24時間後のペースト色の低下を測定した結果、系統間差が認められた。

本課題において初期世代での硬質系統の選抜を重ねた結果、農業特性の改良された硬質系統7系統が選抜され、新規系適供試系統とした。今後これら材料の中華めん適性について更に検討する。

(b) めん用小麦の品質向上

① 試験目的：国内産小麦市場における道産小麦の優位性を確保するため、さらなる品質向上を図り、「タイセツコムギ」並以上の製めん適性を有する小麦品種の開発を促進する。

② 試験方法：

1) 高製めん適性小麦の系統選抜

初期世代(F₃~F₄世代)と親・比較品種を含めて計1935系統について、製粉性(ブラベンダーテストミルで原麦50gを製粉)、蛋白含量・粒度(インフレーション 1241)、アミロース含量(オートグラフィ)、粉色(色彩差計)を調査。また、中期世代(小規模生予1年目系統)と親・比較品種含めて計142系統については、製粉性(ブラベンダーテストミルで原麦100gを製粉)、蛋白含量・粒度、アミロース含量、粉色に加え、RVAによる最高粘度を調査する。

2) DNAマーカーによるWx遺伝子の検定

小規模生産力検定試験に供試しているF₆世代の基本系統について、Wx-B1遺伝子の有無をDNAマーカーにより検定する。

③ 成績の概要：初期世代の品質検定の結果、良粉色品種「きたもえ」並以上にL*が高く、a*が低い系統が多数認められた。なお、品質検定結果について農業特性と共に系統選抜の参考とした。

中期世代も初期世代同様に品質検定を実施し、製粉性や粉色を農業特性と共に選抜の参考とした。その結果、「北系1830(16010)」などの良質

系統を、新たに系統適応性検定試験に供試した。

F₆世代の各系統群について、製めん性の良否に関与する *Wx-B1* 遺伝子の有無を検定した。

(c) パン用小麦の品質向上

① **試験目的**：初期世代および中期世代の品質検定を行い、パン用高品質小麦を育成する。

② **試験方法**：初期世代は圃場で選抜された系統についてブラベンダーテストミルで製粉し、製粉歩留、製粉効率、蛋白、粒度、グルテンインデックス、ミキソグラフ、高分子グルテニンサブユニット構成を調査し、さらに選抜する。中期世代は小規模生産力試験に供試した13系統の評価を行う。ビューラーテストミルで製粉し、製粉歩留、ミリングスコア、水分、灰分、蛋白含量、粒度、グルテンインデックス、高分子グルテニンサブユニット構成、RVA最高粘度、生地特性（ファリノグラフ）、製パン試験などを検定した。

③ **成績の概要**：系統選抜された初期世代555点について品質検定を行い、254系統を選抜した。中期世代については、本年の産物は、雨害は認められず、低蛋白の傾向であり、全体的に製パン性が低かった。ファリノグラムのDt（生地形成時間）が「1CW」並の系統は無かったが、「18S2」は「1CW」に近いSt（生地安定度）であり、良好な生地の物性を示した。平成16、17年度で、小規模生産力検定試験供試材料中、パン試験の成績が比較的優れた系統として、「16S7（北系春781）」、「16S40（北系春783）」、「16S42（北系春784）」、「17S30（北系春787）」、「17S37（北系春788）」などを見いだした。

(6) 春まき小麦の品種選定試験

(平成18年～22年) (222115)

a 試験目的：ホクレンで育成された系統について北海道春まき小麦栽培地帯での適応性を評価するとともに優良品種決定の資とする。

b 試験方法：地域適応性検定試験として生産力検定予備試験に準じた試験、適応性試験として奨励試験に準じた試験、特性検定試験として当場ではうどんこ病、赤さび病等の病害、接種による赤かび病抵抗性検定、赤かび病が発生した条件で

のDON含量調査、栽培特性試験、そして品質検定試験を実施する。

c 成績の概要：地域適応性検定試験では「HN106」、「HN116」、「HN122」、「HN131」を検討した。「春よ恋」と比較して、「HN106」は成熟期が2日早く、収量性は同程度であった。前年同様、穂発芽性は優った。赤かび病抵抗性は同程度であったが、子実中のDON濃度が低く、有望とした。「HN116」は成熟期が2日早く、前年同様、収量性はやや劣った。赤かび病抵抗性は同程度、子実中のDON濃度は同程度であり、再検討とした。「HN122」は成熟期が1日早く、収量性は劣った。穂発芽性は優れ、高い種子休眠性を示した。赤かび病抵抗性は同程度で、DON含量は低かったが、低収のため、打ち切りとした。「HN131」は成熟期が1日早く、収量性は劣った。穂発芽性は優れるが、赤かび病抵抗性は同程度～やや劣ると判断され、打ち切りと判断した。

(7) 雪腐病高度抵抗性良質小麦系統の作出

(平成15年～19年) (400210)

a 試験目的：各種雪腐病に対して高度な抵抗性を示し、かつ、品質や穂発芽耐性が「ホクシン」より優れる雪腐病高度抵抗性DH(半数体倍加)系統を作出する。

b 試験方法：高度雪腐病抵抗性DH系統の作出を目的に交配と材料養成を行なう。半数体倍加系統の選抜・検定については、DH₂系統2組合せ944系統、DH₃以降系統6組合せ41系統について雪腐病菌接種による検定と、熟期、稈長による選抜を行う。選抜系統について、特性検定試験および生産力検定試験を行う。DH₃世代以降の材料については、前年産の産物について、ブラベンダーテストミルを用いて原麦50gを製粉し、製粉性や各種品質検定を行い、農業特性と合わせて、系統選抜の参考とする。

c 成績の概要：交配は、雪腐病高度抵抗性系統への穂発芽耐性、良粉色などの導入を目的に3組合せを行った。

雪腐黒色小粒菌核病菌接種による雪腐病抵抗性検定と選抜を行った。また、前年産の品質検定(D

H₃世代以降)を行った結果、「ホクシン」並以上に粉色などが向上した系統が存在した。これらの結果をもとにして、圃場選抜を行い、穂発芽検定を実施した。その結果、交配親に用いた雪腐病抵抗性DH系統に比べて、穂発芽程度の低い系統が認められた。穂発芽検定の結果も踏まえ、最終的な系統の選抜を行った。そして、訓交3330から2系統、訓交3366から2系統、訓交3455から2系統を新たに次年度の小規模生産力予備試験に供試する。

生産力試験では、雪腐病無防除区での発生菌種は、全体的に紅色雪腐病が多く、黒色小粒菌核病もほぼ同程度認められた。特に供試初年目の試験区では、紅色雪腐病の発生割合が高かった。また、一部に大粒菌核病も発生する条件であった。雪腐病無防除区での越冬茎数率が、雪腐病抵抗性²やや強³の「ホクシン」や「きたもえ」よりも多く、雪腐病の抵抗性に優れる系統が多くあった。供試材料のうち、雪腐病抵抗性に極めて優れ、高度抵抗性系統の中では、穂発芽耐性や熟期、草型、耐倒伏性、収量性に優れる「17G507」を次年度継続検討する。継続検討する材料については品質検定を実施する。

(8) 穂発芽極難低アミロ耐性小麦系統の作出

(平成16年～18年)(400220)

a 試験目的：穂発芽性極難の抵抗性を示すとともに、成熟期以降の連続降雨条件でも低アミロ耐性を有する良質小麦系統を作出する。

b 試験方法：穂発芽性極難系統に雪腐病および各種耐病性、収量性に優れた良質系統を交配する。DH₂～DH₄世代について3カ年で13組合せ延べ5,052系統を対象に、人工降雨処理による穂発芽検定(15℃7～10日間)を行う。系統選抜2年目以降のDH₃～DH₄世代は発芽試験(10℃5日または7日間)を併せて行う。選抜系統はα-アミラーゼ活性の測定、品質検定を実施。DH₄～DH₅世代の小規模生予供試系統について、生産力試験による生育調査・収量調査、各種特性検定、穂発芽性評価(成熟期・晩刈サンプルによる穂発芽検定(15℃7日、14日処理)、発芽試験(10℃7日処理)、人工降雨処理前後のα-アミラーゼ活性)および品質検定を

行う。

c 成績の概要：

3カ年において、穂発芽性極難系統の収量性、耐病性、耐倒伏性及びめん用品質の改良を目的にした9組合せの交配を行い、計1,786粒を採種した。北見農試および十勝農試において、直近3カ年で系統選抜初年目のDH₂世代11組合せ4,731系統を栽植し、穂発芽性“難”の「北系1354」の穂発芽耐性より優り、“極難”の「北系1802」に匹敵する11組合せ378系統を選抜した(選抜率8.0%)。系統選抜2年目以降について、系統選抜初年目系統と同様に農業形質で圃場選抜後、3カ年で「北系1802」並の穂発芽耐性を持つと考えられる28系統を選抜し、新系統名を付し小規模生産力試験および各種特性検

定試験へ供試した。平成17年(播種)に小規模生産力試験へ供試した「17G602」を穂発芽性評価した結果、「北系1802」並に優れた穂発芽耐性を持つことが示された。人工降雨処理後のα-アミラーゼ活性値を調査した結果、各処理とも「17G602」は「北系1802」並以下の数値を示した。また、耐倒伏性、粉色等の改良が図られたため、平成18年(播種)に新系統名「北系1838」を付し、系統適応性(地域適応性)検定試験に供試した。「17G602」は概ね「ホクシン」並の収量性および雪腐病抵抗性を示した。品質検定の結果、「17G602」の粉色は「ホクシン」よりやや優り、アミロース含量は「ホクシン」並であった。

(9) 小麦の世代短縮

(平成10年～)(121220)

a 試験目的：独立行政法人および育種指定試験地で育成中の系統の世代を進め、系統の遺伝的な固定を早める。

b 試験方法：作物研究所育成材料9組合せ、近畿中国四国農業研究センター育成材料9組合せ、九州沖縄農業研究センター育成材料9組合せ、長野県農事試験場育成材料5組合せ、愛知県農業総合試験場育成材料9組合せを供試した。播種：5月24日、播種量：10kg/10a、畦巾：60cm、畦長：15m、1区面積：9.0m²、施肥量：麦類化成肥料082

を50kg/10a(N:P₂O₅:K₂O=5:9:6kg/10a)。収穫はバインダーで全株を収穫し風乾。脱穀後、種子1kgを育成場に送付。

c 成績の概要：計41組合せの材料を、北見農試圃場において春まき栽培し、世代促進を行った。供試種子の到着の関係で播種が遅れたため、生育量は少なかった。また、晩播のため、種子の充実が悪く外観品質も全般に劣った。一部の材料で、座止と思われる個体が多発し、出穂期が判然としなかった。穂発芽、赤かび病の被害粒が多発し、種子の外観も極めて劣る組合せもあった。各組合せとも、1kg以上の採種量があったので、1kgを育成場に送付した。

(10) 小麦の新ランク区分対応のための灰分変動要因解析試験

(平成17年～18年)(222140)

a 試験目的：灰分含有率の変動について気象、土壌、品種など様々な要因との関係について解析を行い、主な変動要因について明らかにする。

b 試験方法：土壌要因および気象要因と灰分含有率との関係調査のため、現地慣行栽培による全道各地で生産された小麦を収集し、原粒灰分含量(以下、灰分と略記。700℃4時間灰化法)および蛋白含量、容積重、千粒重、土壌及び気象データを調査した。品種間差の影響を調査するため、秋まき、春まき小麦奨励基本・現地調査における生産物を用いて、灰分および蛋白含量、容積重、千粒重、土壌および収量成績を調査した。栽培法と灰分含有率との関係を調査するため、秋まき小麦(中央・上川・十勝・北見農試産)、春まき小麦(中央・上川・北見農試産)栽培法試験生産物などを用いて、播種期・播種量・施肥量の違いによる灰分および蛋白含量、容積重、千粒重、収量調査データなどから、灰分の変動要因を解析した。

c 成績の概要：全道で現地慣行栽培された「ホクシン」の灰分は、平成17年産が平均1.50%(n=187)に対し、平成18年産は平均1.62%(n=189)と0.12%高くなった。日本めん用の基準値(1.60%)以下が平成17年産は全体の83%に対し、平成18年産は全体の33%にとどまった。過去2カ年で現地慣行

栽培された「ホクシン」を用いて、灰分と関連調査項目間の相関係数を求めた結果、2カ年とも灰分と有意な相関が認められた項目はなかった。倒伏の有無による灰分を比較した結果、“倒伏有り”が“倒伏無し”と比べ、灰分は0.10%高くなった。また、蛋白は有意に高く、容積重・千粒重は低下した。網走管内A町にて、土壌群別に各種障害・病害が発生していない小麦子実の灰分を比較した結果、火山性土<低地土≤台地土の順で灰分は高くなったが、その差は0.05%であった。道内2地区において、灰分とトルオーグリン酸含量との間に有意な正の相関関係が認められた。また、子実中のリン含有率と灰分との間に有意な正の相関関係が認められた。奨励試験供試の秋まき小麦、春まき小麦ともに品種間差、年次間差が有意であった。秋まき小麦栽培法試験産物の灰分と播種期、播種量、窒素施肥量の関係を調査した結果、各処理間差より、年次間差が大きく、生育期間中の気象条件の影響が大きいものと推察された。春まき小麦を用いて、基肥リン酸施肥量と灰分の関係を調査した結果、北見農試では施肥量の増加につれ、灰分も増加したが、上川農試では施肥量の増減に関わらず、灰分に差は認められなかった。

(11) 新ランク区分に対応した小麦有望系統の高品質安定栽培法の確立

(平成18年～19年)(222110)

a 試験目的：小麦の有望系統について、様々な栽培条件下における生育特性を明らかにするとともに、新品種の本格的な普及の前に栽培環境に応じた最適な栽培法を確立する。

b 試験方法：斜里町および北見農試において、秋まき小麦「北見81号」(対照「ホクシン」)を用いて、①播種期・播種量試験、②幼穂形成期以降の窒素追肥時期を変えた窒素施肥法試験を行う。

c 成績の概要：

(a) 播種期・播種量試験

越冬前の「北見81号」の茎数は播種期・播種量が同処理の「ホクシン」と比べ、概ね同程度かやや少なく、主茎葉数は同処理の「ホクシン」と比

べ、0.2～0.6葉少なかったが、標播区では5葉以上確保された。各処理条件において、「ホクシン」に対する「北見81号」の収量比は117～128%を示し、晩播でも多収を示した。「北見81号」を各播種期で薄播した場合、標準播種量と比べ、両試験地ともに減収は認められなかった。晩播により、成熟期は北見農試では1日、斜里では3日遅れた。

(b) 窒素施肥法試験

各試験地とも止葉期追肥による増収効果が比較的大きく、原粒タンパクは窒素追肥により、0.4～1.5%増加した。開花期追肥による原粒タンパク増加の効果は斜里現地では認められたが(+1.0～1.7%)、北見農試では判然としなかった(+0.2%)。追肥による成熟期の遅れは、幼形期追肥では0～1日、止葉期追肥では1～2日、開花期追肥では1～3日であった。

(c) 生育診断手法の検討等

北見農試における成熟期の窒素吸収量と倒伏の関係を調査した結果、「ホクシン」が17kgN/10a以上で倒伏事例が認められたが、「北見81号」では20kgN/10a以上で倒伏事例が認められた。しかし、平成18年産は収量水準が高く、かつ倒伏事例が少なかつたため、次年度も両者の関係について検討が必要と考えられた。「北見81号」を用いて、穂揃期の止葉直下葉の葉色値と原粒タンパクとの関係を調査した結果、各試験地毎には $r=0.85\sim 0.86$ と高い相関係数が得られた。しかし、2試験地込みにした場合では両者間の相関係数は $r=0.41$ と低く、回帰式の切片が試験地により異なった。穂揃期の草丈、穂数、止葉直下葉の葉色値と原粒タンパクの関係を調査した結果、草丈および葉色値の積と原粒タンパクの間の相関係数が最も高く($r=0.71$)、1%水準で有意な正の相関関係が認められた。

(12) 赤かび抵抗性小麦品種の育成・利用を核にしたかび毒汚染低減

(平成18年～21年)(611210)

a 試験目的：有望系統の赤かび病抵抗性および、かび毒蓄積性を検定する。かび毒低蓄積性品種の早期育成を目的として、DNA マーカーを利

用した反復戻し交配育種を行う。

b 試験方法：スプリンクラーミスト灌水圃場において、*F.graminearum* 分生子の噴霧接種検定を行い、赤かび病抵抗性に優れる有望育成系統「北見82号」等と比較品種の発病程度・赤かび粒率・かび毒蓄積性を検定する。DNA マーカーを利用した反復戻し交配育種によって、北海道の条件下でかび毒低蓄積性効果の認められた「蘇麦3号」由来のQTLを北海道優良系統「北見81号」等に導入する。交配については緑体春化施設等を利用して年2回実施し、次年度以降の育種素材の早期作出を図る。

c 成績の概要：「北見82号」は「ホクシン」、「北見81号」、これまで赤かび病抵抗性系統とされてきた「北見77号」と比べてDON含量が低く、かび毒低蓄積性系統として有望であった。

反復戻し交配育種においては「蘇麦3号」由来の5つの抵抗性QTL全てを保持し、「蘇麦3号」並のかび毒低蓄積性をもつ「GS02-71」を抵抗性供与親、有望系統「北見春67号」を反復親として戻し交配を実施し、3BS、5AS、6BSの抵抗性QTL近傍マーカーを保持するBC₃F₁を作出した。また、「蘇麦3号」を抵抗性供与親、「北見81号」を反復親として戻し交配を実施し、2DL、3BS、4BS、5AS、6BSの抵抗性QTL近傍マーカーを保持するBC₂F₁を作出した。

(13) 二条大麦新品種育成試験

(昭和44年～平成18年)(112110)

a 試験目的：北海道に適應する強稈・良質・多収・耐病性品種を育成する。

b 試験方法：一般育種法に準じ、暖地(鹿児島県)を利用した世代促進法を併用した。供試面積160a、現地70a。

c 成績の概要：

(a) 集団養成：世代促進圃(鹿児島県平成17年播種年度)はF₃世代20組合せを、場内圃場ではF₂～F₆世代、計56組合せを供試し、20組合せを圃場廃棄し、36組合せを収穫した。

(b) 個体選抜：F₅世代12組合せ各5,800個体を供試、5組合せ501個体を一次選抜した。

(c) 系統選抜：F₇世代10組合せ504系統を供試し、8組合せ94系統を圃場選抜した。穂発芽検定、外観品質等の調査結果から、6組合せ18系統を選抜した。

(d) 系統養成：F₈以降32組合せ108系統群を供試した。

(e) 生産力検定予備試験：供試1年目系統13組合せ65系統について1区制、供試2年目系統11組合せ31系統について3反復、供試3年目以上系統11組合せ15系統について3反復で試験を実施した。

(f) 生産力検定試験：「北育41号」は出穂期や成熟期、収量など総じて「りょうふう」並の生育であったため、農業特性について「再検討・標準並」と評価した。麦芽品質・発酵性ともにやや優れたため、継続検討とする。

(g) 特性検定試験

①赤かび病：発病度は「北育41号」が「りょうふう」と同程度であった。

②耐穂発芽性：「りょうふう」が他の指標品種と比べて例年よりやや優れる傾向であった。「北育41号」は「りょうふう」よりやや劣った。「北系03105c」、「北系0435」「北系0436」は、穂発芽程度が極めて低く、休眠指数がかなり高かった。

③施肥量特性：「北育41号」、「りょうふう」、「りょうふうん」は施肥量が多くなるに従い増収し、施肥反応が明確であったが、多肥区では倒伏が発生した。「北育41号」は、多肥区では「りょうふう」より多収となった。

④播種量特性：「北育41号」、「りょうふう」ともに多量播種区では低収となった。

⑤播種期特性：「北育41号」、「りょうふう」ともに5月上旬播きが最も収量が多く、5月中旬播きが最も低収となった。「北育41号」は4月下旬播きでは「りょうふう」並の収量であったが、5月播きでは「りょうふう」より低収となった。

(14) ビール大麦有望系統の特性検定と新規醸造形質の導入

(平成18年～19年)(400230)

a 試験目的：有望系統の特性検定試験および発酵性検定を実施し、「りょうふう」に替わるビ

ール大麦新品種の早期普及をめざす。

b 試験方法：

(a) 有望系統の特性検定および発酵性検定：「りょうふうん（北育39号）」「北育41号」について、農業特性検定試験、麦芽品質分析および発酵性検定試験を行う。

(b) 後続系統の生産力検定予備試験および品質特性評価：26組合せ46系統について生産力検定試験を行うと共に、「二条大麦新品種育成試験(道費)」により育成した系統も含めた各生産力検定試験産物について、麦芽品質分析と、F₉世代以降の系統については発酵性検定試験を行う。

(c) 系統選抜までの育成試験：F₂～F₆世代の集団養成、F₆世代での個体選抜、およびF₇世代での系統選抜を行う。

c 成績の概要：

(a) 有望系統の特性検定および発酵性検定

①「りょうふうん（北育39号）」：2005年産の産物を用いて現場規模での製麦・醸造試験を行い、「りょうふう」と比較して、エキスが高いこと、製麦歩合がやや低いこと、醸造工程においては大差がないことが明らかとなった。2006年産の産物については、現在試験中である。

②「北育41号」の生産力検定試験：これまでの傾向と同じく、「りょうふう」並の生育、収量となった。品質分析の結果では、本年の北見農試産物の粗蛋白含量が全体的に高かったことから、無水エキスは低い傾向にあったが、コールパツハ数はほぼ適当な範囲に収まっており、麦芽品質は、総じて「りょうふう」並の値となった。また、最終発酵度がやや高く優れていた。発酵性については、「りょうふう」並の結果であった。

(b) 後続系統の生産力検定予備試験および品質特性評価

①生産力検定予備試験：平年よりもやや多い生育量となったが、倒伏はほとんど発生せず、収量は多めとなった。穂発芽性検定試験の結果も加味した上で、早生、多収、「りょうふう」並の穂発芽耐性で、外観品質に優れる「北系0260」を「再検討」と評価した。

②地適試験供試材料の麦芽品質分析試験：「北

系0362」の最終発酵度がやや低かったこと、「北系03105c」のコールパツハ数がやや低かった他は、総じて「りょうふう」並からやや優れる結果となった。発酵性検定試験については、「北系03105c」がやや優れる結果となった。

③生産力検定試験、穂発芽性検定試験、品質分析試験の累年の試験結果を考慮して、「北系0260」を「有望」、「北系0401」を「再検討」と総合評価した。

(c) 系統選抜までの育成試験

①集団養成：33組合せを供試し、4組合せを圃場廃棄し、29組合せを収穫した。

②個体選抜：3組合せを供試し、2組合せ323系統を一次選抜した。

③系統選抜：8組合せを供試し、6組合せ68系統を圃場選抜した。穂発芽検定、外観品質等の調査結果から、5組合せ15系統を選抜した。

2 奨励品種決定調査

(1) 麦類奨励品種決定基本調査

(昭和29年～継続) (522120)

a 試験目的：育成系統について当地方における適応性を検定し、奨励品種決定の資とする。

b 試験方法：当场標準耕種法による。春まき小麦供試材料；「北見春67号」、「北見春68号」、「北見春69号」、「ハルユタカ」、「春よ恋」。秋まき小麦供試材料；「北見81号」、「北見82号」、「北海261号」、標準・比較品種7品種。二条大麦供試材料；「北育41号」、「りょうふう」、「りょううん」。

c 成績の概要：

(a) 春まき小麦：「北見春67号」は中生で、千粒重が重く、多収である。赤かび病抵抗性は「中」で生産物のDON汚染が少ない。耐穂発芽性は優れる。蛋白含有率は低いが製パン性は優れる。平成19年2月に北海道の優良品種に認定された。「北見春68号」は耐穂発芽性に優れ、高蛋白だが、耐倒伏性が弱く、廃棄。「北見春69号」は耐穂発芽性に優れ、生産物のDON汚染が少ない。強稈性は優れ、高蛋白であり、継続検討。

(b) 秋まき小麦：「北見81号」は平成18年2月

に北海道の優良品種として認定されたため、有望度の判定は行わなかった。「北見82号」は「ホクシン」と比べ、コムギ縞萎縮病抵抗性、赤かび病抵抗性、穂発芽耐性等の病害・障害抵抗性および製めん適性が優れる。成熟期は3日程度遅く、やや小粒である。有望度は「有望」とし、継続検討とする。「北海261号」は「ホクシン」と比べ、コムギ縞萎縮病抵抗性、赤かび病抵抗性および耐倒伏性に優れ、成熟期は「キタノカオリ」より2～3日早い。一方、穂発芽耐性が「ホクシン」よりやや劣ることから、有望度は「再検討」とし、継続検討とする。

(c) 二条大麦：「北育41号」は「りょうふう」と比較して同程度の熟期で、稈長がやや短く、収量性は並であるが、千粒重がやや大きい。麦芽醸造品質は優れる。継続検討とする。

(2) 麦類奨励品種決定現地調査

(昭和29年～継続) (522220)

a 試験目的：育成系統について現地における適応性を検定し、奨励品種決定の資とする。

b 試験方法：条播栽培による。春まき小麦は大空町(女満別)、北見市(常呂)、秋まき小麦は大空町、斜里町、網走市、北見市1、北見市2(旧端野町)、津別町で実施。なお秋まき小麦の網走市、北見市1は畑作物地域適応性検定試験(112500)、北見市(旧端野町)、津別町は現地要望試験による。二条大麦は網走市で実施し、二条大麦新品種育成試験(112110)による。

c 成績の概要：

(a) 春まき小麦：大空町では「北見春67号」は、リットル重は「春よ恋」よりやや劣ったが、千粒重・収量ともに優った。「春よ恋」より外観品質が劣っており置き換えることは難しいと思われるが、収量性、穂発芽のしにくさなどの優れている点はある、「再検討(△)」。

北見市では「北見春67号」の成熟期は5日遅れた。稈長は並であった。子実重、千粒重で上回った。蛋白は1.6%低かった。収量性及び耐倒伏性では優るものの、熟期が遅く蛋白がやや低いことなどから本年度の評価は「再検討(△)」。

(b) 秋まき小麦：「北見81号」は、大空町では「ホクシン」に比べて多茎・多収だが、本年はその傾向がもっとも著しかった。倒伏は本年については「ホクシン」より若干多くなったが、3カ年を通じて耐倒伏性は「ホクシン」並と判断される。平成18年産の外観品質は、僅かに青みを帯びた粒がやや目立った他は問題なく良好であった。外観品質は年により、色沢にややバラツキを生じたが、千粒重は「ホクシン」並、収量は「ホクシン」比129%と極めて多収であり、支所管内での普及性は高いと判断する。

斜里町では平成18年産の成熟期は「ホクシン」と同等となった。収量性は「ホクシン」対比108%と多い。穂数は「ホクシン」対比107%と多い。普及センター管轄地域における「北見81号」の普及の見込みについては「ホクシン」の置き換えで全面的に作付けされる見込みである。

網走市では収量性・熟期等、試験成績からみた普及性には問題がないと考える。但し、「ホクシン」と比べ茎数が多くなる傾向が見られるため、は種量など栽培法についての検討が必要である。地域における品種の切り替えということとなると、網走市では大型乾燥施設による一元集荷体制であり、加えて二条大麦も栽培しているため、切り替える場合は一度に秋まき小麦栽培全面積で行わなければならない。そのため、実需の評価やホクレン・周辺市町村の動向など、管内である程度足並みを揃えた動きがあれば可能と思われる。

北見市1では「ホクシン」と比べて、出穂期で3日、成熟期で2日遅れた。稈長穂長は同程度、穂数は多かった(126%)。収量は多かった(119%)。等級は1等下～2等上(充実不足)で劣った。病害虫の発生は無かった。

北見市2(旧端野町)では「ホクシン」と比較して、「北見81号」では出穂期で6月19日となり同日か1日程度早く、コムギ縞萎縮病の発生により、ともに遅れ、より症状が顕著であった「ホクシン」で遅れが大きくなった。成熟期は7月28日となり同日であった。コムギ縞萎縮病による黄化・萎縮症状の発生は、「ホクシン」が“中～少”程度の発生であったのに対し、「北見81号」では“少～

微”程度の発生であった。成熟期の稈長及び穂長では、生育が進むにつれて回復傾向となり、ともに同程度となったが、穂数では「北見81号」が12%上回った。千粒重はともに軽く同程度であったが、収量では「北見81号」が14%上回る結果となった。以上のことから、「ホクシン」に比べ「北見81号」ではコムギ縞萎縮病発病程度も軽く、収量性でも上回っていることから、当地域においても普及性があると考えられる。但し、コムギ縞萎縮病の発生により千粒重が極端に軽くなっており、コムギ縞萎縮病発生ほ場における品質低下が懸念される。

津別町では、「ホクシン」に比べて出穂で1日、成熟で3日遅かった。「ホクシン」に比べ茎数は128%と多く、1,000本/m²を越える茎数となり倒伏程度も“甚”だった。病害はほとんど見られなかった。外観品質は、倒伏が目立った試験区で千粒重が34.1gと低かったことから等級はやや劣った。収量は「ホクシン」比で132%と極めて多収であり、普及性は高いと判断する。

(c) 二条大麦：網走市では、本年は降水量が平年を大幅に下回る干ばつ傾向であり、「北育41号」は短稈で耐倒伏性には優れるが、「りょうふう」並の収量となったことから、単年度評価は標準品種並み(○△)であった。累年評価としては多収傾向であることから、やや有望(○)である。

3 新農業資材実用化試験

(1) 除草剤及び生育調節剤の実用化試験

(昭和45年～継続)(229020)

a 試験目的：新除草剤および新植物生育調節剤が小麦の生育や収量に与える影響を検討する。

b 試験方法：除草剤「トリフルラリン乳剤」の土壤兼茎葉処理、「トリフルラリン粒剤」の土壤処理、「NC-613乳剤」の土壤処理の検討。供試品種は「ホクシン」。

c 成績の概要：「トリフルラリン乳剤」は各処理とも1年生イネ科雑草に対して極大の除草効果を示した。薬害は認められなかった。除草効果、薬害について継続検討。「トリフルラリン粒剤」は各処理とも1年生イネ科雑草に対して極大の除

草効果を示した。薬害は認められなかった。除草効果、薬害について継続検討。「NC-613乳剤」は各処理とも1年生雑草全般に対して極大の除草効果を示した。薬害は葉に白斑が認められたが程度は“微”で、速やかに回復した。除草効果、薬害について継続検討。

4) 牧草科(農林水産省牧草育種指定試験地)

1 牧草品種育成試験

(1) 寒地・寒冷地向け安定多収チモシー品種の育成(指定試験)

(昭和39年～継続)(121710)

a 試験目的: 極早生～晩生の4熟期において、収量性、TDN含量、耐病性、耐倒伏性、混播適性等を向上した採草用品種の育成および道東地方向けの放牧用品種の育成に取り組み、飼料自給率向上に寄与する。

b 試験方法: 各試験とも、系統適応性検定試験実施要領、種苗特性分類調査法、牧草科慣行法等で実施した。供試面積150a

c 成績の概要:

(a) 極早生系統の育成: 有望95栄養系と「クンプウ」とのトップ交配を実施し、採種量が十分であった55後代系統について後代検定試験を開始した。

(b) 早生系統の育成: 集団選抜系統「北系05311」の生産力検定試験を開始した。課題(2)による共同育成系統「北見25号」、「北見26号」の系統適応性および特性検定試験を開始した。

(c) 中生系統の育成: 基礎集団による個体選抜を実施し、WSC含量の高い7母系18個体を仮選抜した。飼料成分分析及びその他の系統選抜は課題(3)で実施した。基礎集団選抜個体および保存優良個体計234点と「キリタップ」のトップ交配を開始した。

(d) 晩生系統の育成: 有望138栄養系と「なつさかり」とのトップ交配を実施し、83栄養系について採種を行った。

(e) 放牧用系統の育成: 「北見27号」「北見28号」

「北見29号」について系統適応性および特性検定試験を実施し、2年目の調査を行った。

(f) 育種方法に関する試験: 斑点病幼苗検定(育成3系統、標準2品種)、越冬性検定(育成5系統、標準比較3品種)、栄養価に関する試験(165栄養系、本年度開始)、耐踏圧性に関する試験(60栄養系、本年度開始)を実施した。

(g) 育種材料の導入と保存: 選抜栄養系および種子遺伝資源の保存を継続した。

(2) 特定組合せ能力を利用した良質多収チモシー品種の開発(ホクレン農業協同組合連合会との共同研究)

(平成17年～19年)(400480)

a 試験目的: チモシー育種試験(指定試験)における飼料成分の選抜の強化及び特定組合せ能力を利用した新育種法の導入により、良質かつ多収な品種を育成する。

b 試験方法: (1) 試験に準ずる。供試面積25a

c 成績の概要:

(a) semi-hybrid系統の育成: 「北系06301」を育成し、生産力検定試験を開始した。同系統の合成1代及び2代種子の採種を実施した。

(b) 2栄養系×1花粉親系統合成法による系統育成: 育成25系統と標準3品種系統について生産力検定試験を5群に分けて実施した(混播試験、ホクレン担当試験各1群を含む)。ホクレン担当試験において飼料成分分析を実施した。

本課題及び課題(3)の結果から6系統を予備選抜し、合成2代および3代種子の増殖を実施した。

(c) 育成系統の地域適応性検定試験: 「北見25号」、「北見26号」について、系統適応性検定試験に準じて実施した。

(3) TDN生産効率向上に貢献する高TDN・多収チモシー品種の育成(農林水産省委託プロジェクト)

(平成18年～22年)(214140)

a 試験目的: チモシーの早生および中生品種育成プロセスにおいて、高TDN化を主目標とした選抜サイクルを組み込み、高TDN化への取り組み

を大幅に強化する。また、現在開発と実用化を目指している特定組合せ能力を活用した育種法も活用し、高TDN・多収品種の育成を目指す。

b 試験方法：早生品種の育成では、(2)-(b)試験の一部サンプルについて飼料成分分析を実施する。中生系統の育成では、(1)-(c)試験の有望個体について飼料成分分析実施する。

c 成績の概要：早生品種の育成では6系統を選抜した。中生系統の育成では有望55個体を選抜した。

2 飼料作物品種比較試験

(昭和55年～継続)(224110)

(1) 牧草品種比較試験

a 試験目的：民間育成あるいは海外から導入した品種・系統の適応性を検討する。

b 試験方法：アカクローバ1、ケンタッキーブルーグラス1品種系統。供試面積3a。

c 成績の概要：アカクローバ「アレス」、ケンタッキーブルーグラス「ラトー」が優良品種に認定された。

(2) とうもろこし品種比較試験

a 試験目的：民間育成及び外国導入の品種系統について、当地域における適応性を検討する。

b 試験方法：北見農試23品種系統、遠軽町現地試験10品種系統。系統適応性検定試験実施要領により実施。供試面積；北見農試25a、遠軽町10a。

c 成績の概要：本年度優良品種に認定された品種はなかった。

3 とうもろこし系統適応性検定試験

(昭和33年～継続)(124090)

a 試験目的：北農研センターで育成した系統の当地方における適応性を検討する。

b 試験方法：1系統。系統適応性検定試験実施要領による。供試面積10a。

c 成績の概要：「北交66号」は「エマ」と比較し熟期は並で、乾物収量はやや少なかった。

4 とうもろこし奨励品種決定現地調査

(昭和29年～継続)(522240)

a 試験目的：北農研センターで育成した有望系統について、現地における生産力を検定し、奨励品種決定の資とする。

b 試験方法：遠軽町で現地慣行法により試験を行う。供試面積は10a。

c 成績の概要：本年度は供試系統がなく、標準品種のみを供試した。

5 飼料作物における有機栽培技術の開発

(平成16～18年)(572210)

a 試験目的：チモシー主体草地及び飼料用とうもろこしにおける有機栽培法を明らかにする。

b 試験方法：チモシー主体草地造成法試験、飼料用とうもろこし雑草対策試験、現地実証試験を実施した。供試面積 場内50a。津別町現地32a

c 成績の概要：チモシー主体草地造成時における基肥施用法、播種時期、初回掃除刈時期を明らかにした。飼料用とうもろこしの雑草対策は複数回のカルチ除草が有効であることを示した。本年度成果をとりまとめ、指導参考事項となった。

3 生産研究部の成績概要

1) 栽培環境科

1 土壤機能増進対策事業

(1) 土壤機能モニタリング調査

(平成10年～継続)(131110)

a 試験目的：各地域の営農活動が環境に及ぼす影響評価を目的とし、営農現場における土壤管理等の実態や土壤特性の変化を経年的に明らかにする。

b 試験方法：管内主要土壤系統に20地区80点の調査定点を設け、土壤を5年1巡で採取・分析する。同時に圃場管理実態の聞き取りを行う。

c 成績の概要：本年は3巡目、2年目の土壤調査年である。上湧別町8圃場、佐呂間町4圃場と遠軽町8圃場の計20圃場で調査した。

2 農地の生産環境保全型栽培技術

(1) たまねぎの有機栽培における生産安定化

(平成16～18年)(571130)

a 試験目的：有機栽培の安定化を目的に栽培技術の検討と体系化を行う。

b 試験方法：品種および有機物の施用法、除草法、有機栽培たまねぎの貯蔵特性を検討した。

c 成績の概要：

(a) 有機栽培には早期播種作型、中生より早い品種が適していた。

(b) 堆肥併用、浅混和、春補肥(4月中～5月上、豚糞ペレット等を50～120kg)で、土壤無機態窒素が高まり増収した。

(c) 土壤化学性目標値(熱抽窒素7～8mg/100g)を設定した。

(d) タイン型除草機の早期多回数処理で、除草時間を慣行の1/2以下にできた。

(e) 有機栽培品種は慣行栽培品種より貯蔵性に優れていた。

(f) 生産安定化に有効な技術を組み入れた栽培モデルを策定した。

(2) 安全・安心な水環境の次世代への継承～硝酸性窒素等による地下水汚染の防止・改善

2) 軽減対策技術の確立

(1) 窒素環境容量の範囲内で生産性を維持する栽培法の開発

①たまねぎ畑の有効土層拡大による窒素減肥技術の開発

(平成16～19年)(820020)

a 試験目的：硝酸性窒素による地下水汚染を軽減するために、窒素利用率を高め、収量を維持しつつ環境への窒素流出を削減する技術として、耕盤層破碎による有効土層の拡大や施肥法の改善等を開発する。

b 試験方法：場内圃場で有効土層拡大試験および肥料の浅混和・緩効性肥料による施肥法改善試験を実施し、また、現地圃場2箇所でも有効土層拡大を検証した。

c 成績の概要：

(a) 振動式全層破碎機を用いた耕盤層破碎処理は、根張りの改善を通じて施肥窒素の利用率向上および収量増をもたらし、環境への窒素流出削減に有効であることが示された。

②網走管内におけるクリーニングクロップの導入による残存硝酸性窒素の低減技術の開発

(平成16～20年)(820020)

a 試験目的：土壤深層の硝酸性窒素を吸収でき、かつ営農に組み入れられる作物、および主にたまねぎ畑へ導入する後作緑肥作物を対象に、土壤残存硝酸性窒素の低減効果を明らかにし、その効果を安定して得るための栽培指針を策定する。

b 試験方法：

(a) 調査作物 休閒：そば・飼料用とうもろこし・産業用大麻、後作緑肥：えん麦・えん麦野生種・シロカラシ・ライ麦

(b) 調査項目：窒素吸収量、土壤無機態窒素含量

c 成績の概要：

(a) 投入窒素量から吸収窒素量を差し引いた窒素収支は産業用大麻でマイナスであったが、そば、飼料用とうもろこしはほぼゼロであった。

(b) 後作緑肥は、播種日が早いほど多収の傾向にあった。播種日が同じ場合はえん麦、えん麦野生種およびシロカラシでは施肥量が多いほど多収の傾向であったが、ライ麦は施肥量によらず収量は同等であった。

(c) 窒素施肥5kg/10aにおける窒素収支は、緑肥の種類によらず、生育期間の積算温度が500~600°C以上で概ねマイナスとなった。

(d) 産業用大麻の窒素収支は窒素施肥5kg/10aに比べ同10kg/10aで大きくマイナスとなった。また収穫後の土壌無機態窒素含量は、窒素10kg/10a以下の場合に移植前を下回った。

(3) 環境保全型農業推進のための窒素固定微生物等の有効利用技術の確立

1) アズスピリラム菌の有効利用技術の確立

(平成17~19年)(116060)

a 試験目的:アズスピリラム菌の有効利用技術を確立する。

b 試験方法:てんさい、たまねぎへの接種効果を、菌株、接種法(接種菌密度)窒素施肥量、土壌硬度を変えて検討した。

c 成績の概要:

(a) てんさいでは菌接種(10^7 cfu/株)で側根数、窒素吸収量、根重、糖量が増加し、接種効果は標準施肥量区、微量接種区(10^5 cfu/株)でも効果があった。殺菌剤の培土への混用は効果に影響しなかった。

(b) たまねぎでは菌接種で根量、窒素吸収量が増加し、増収した。接種効果は標準施肥量区、堅密圃場区、微量接種区(10^5 cfu/株)でも効果があった。

(c) 菌接種効果は菌株で異なった。

(4) 基盤整備事業による畑地からの排水浄化対策の実用化

(平成17~19年)(547250)

a 試験目的:農業排水の硝酸性窒素等を低減する施設等を開発し、農業農村整備事業に活用する。

b 試験方法:①汚濁状況と原因の検討:周辺

環境、水質、底土を調査した。②汚濁物質浄化法の検討:硝酸塩水溶液に資材を添加培養し、濃度変化を調査した。

c 成績の概要:

(a) 堆肥仮置き場、人家、酪農業施設が多い地点の排水はT-N・アンモニア態N濃度が高かった。

(b) 排水中の無機態Nは流下中に硝酸化成を受けつつ浄化されていた。

(c) 底土のC/N比が高い程排水のT-N濃度は低く、排水の鉄濃度が高い程排水の硝酸性N濃度が低かった。

(d) 硝酸塩水溶液への麦稈、二価鉄添加で硝酸性Nが低下し、滅菌した底土の添加では低下しなかった。

3 高品質・確収技術の開発に関する試験

(1) 道産小麦の安全性・安定性向上試験

1) 地帯別収量・品質変動要因の解明とその対策

①網走地方における子実タンパク適正化のための後期追肥診断技術の開発

(平成16~18年)(222120)

a 試験目的:小麦圃場の衛星データをもとに、子実タンパク含有率を適正化するための後期追肥の要否を広域かつ圃場単位に示せる診断マップを作成する。

b 試験方法:

タンパク区分図から後期追肥診断マップへの読み替え手法および診断マップ広域版の作成手法を検討するとともに、診断マップを検証するため、タンパク区分図をもとに4圃場を選定し、止葉期追肥(硫安4kgN/10a)試験を行った。

c 成績の概要:

(a) 衛星データから作成した小麦タンパク区分図を平均化処理により3次メッシュ化した結果、地域的な特徴を概ね表現できた。

(b) 止葉期硫安4kgN/10a追肥により、タンパク含有率は農家慣行区に比べ平均1.1%上昇した。

(c) 荷受け時の生産者別タンパク値は圃場図GISを用いた区分図の作成に利用でき、衛星デ

一タ検量用の他、区分図の直接利用も有効である。

(2) 小型反射式光度計 (RQ-フレックス) を用いた小麦土壌窒素診断技術の確立

(平成17～18年) (222150)

a 試験目的: 秋まき小麦のタンパク安定化を目的とした起生期無機態窒素診断の普及を図るため小型反射式光度計を活用した測定技術を確認する。

b 試験方法: 土壌調整法、抽出法(土液比、攪拌法、浄化液採取法)と、現地圃場で簡易測定法の適合性を検討した。

c 成績の概要:

(a) 簡易測定法(風乾砕土(40℃24時間、2mm以下)を1(水):2.5(土)で1分間棒攪拌し、濾液採取装置で濾過)と従来法との読み替え表を提示した。

(b) 簡易法で測定した土壌硝酸態窒素量に基づいた窒素供給量と小麦の窒素吸収量の回帰式は、「秋まき小麦の起生期無機態窒素診断による窒素追肥量:2005年」の回帰式と同等であり、簡易法は無機態窒素診断に適用できた。

(3) 菜豆類(金時、虎豆)における土壌・栄養診断技術の開発と窒素施肥技術の実証

1) 虎豆の安定生産のための窒素施肥技術の改善と実証

(平成17～19年) (115120)

a 試験目的: 土壌肥沃度に対応した窒素施肥技術、早期播種やべたがけ等の早期収穫技術を確認し、収量向上と高品質安定生産に資する。

b 試験方法:

(a) 低収要因解析調査: 訓子府町内9圃場で土壌の化学性・硬度と収量の関係を調査

(b) 窒素施肥試験: 訓子府町内9圃場で窒素施肥と子実重の関係を調査

(c) 早期収穫試験: 北見農試圃場で播種時期、べたかけ有無と子実重の関係を調査

c 成績の概要:

(a) 窒素基肥のみで栽培した場合、有効土層が深く、熱水抽出性窒素含量が多いほど多収となる傾向にあった。

(b) 子実重は多窒素施肥で増加し、追肥時期は

手竹期より開花盛期で多く、特に、開花盛期倍量追肥(計12kg/10a)で最大となった。施肥窒素の一部に緩効性肥料LPS40を用いると子実重は、開花盛期追肥と同等かやや少なくなった。

(c) 成熟期は早期播種で6～2日、べたかけで4～3日早まった。子実重は標準に比べ5/16播種でやや劣ったが、5/25播種では同等であり、各播種日ともべたかけ処理で増加した。

4 作物診断および土地改良に関する調査・試験

(1) 農作物突発性生理障害診断調査

(昭和57年～継続) (115210)

a 試験目的: 栽培法の変化や品種の変遷のほか、農業立地環境の変動によって生ずる農作物の突発性生理障害を早期に診断して適正な対策を講じ、被害を最小限にとどめる。

b 試験方法: 農業改良普及センター、農協および農家等からの診断依頼に対し、生育状況の調査、化学分析を実施し、原因を究明する。結果は依頼者に通知するとともに、必要な対策は関連機関と協議する。

c 成績の概要: 本年度は3作物(てんさい、セルリ、ばれいしょ)で延べ3件の診断依頼があった。他に、土壌(常呂川底土)3点について重金属濃度の分析を実施した。

(2) 道営土地改良事業計画地区土壌調査

(昭和40年～継続) (547110)

a 試験目的: 土地改良効果の実効を図るため、道営土地改良計画地区の土壌調査を行う。

b 試験方法: 事業計画地区について、代表地点および客土取場の断面調査および試料分析を行い、土壌の改良対策や客土資材の良否を明らかにするとともに、地区の土壌図を作成する。

c 成績の概要: 以下の7地区について、調査を行った。美幌豊高地区(美幌町)、留辺蘂温根湯地区(北見市)、生田原地区(遠軽町)、清里地区(清里町)、斜里太陽地区(斜里町)、東藻琴西部地区(大空町)、網走西地区(網走市)であった。詳細は農政部農村計画課刊行の「平成18年度道営土地改良事業調査地区土壌調査報告書」参照。

(3) 経済効果検討現地調査に係る土壌環境調査

(平成14～20年)(547220)

a 試験目的：農村整備事業の経済効果の評価および効果算定に関わる緒元等の見直しに資することを目的として、これら事業で設定された調査圃場の土壌理化学性に関する調査を行う。

b 試験方法：土地改良事業実施中の地区について、整備済みおよび未整備圃場の作物調査、断面調査、試料分析を行う。

c 成績の概要：第2留辺蘂地区(北見市)、訓子府東地区(訓子府町)および清里地区(清里町)の計3地区、延べ26圃場にて調査した。詳細は別途報告した。

5 新農業資材実用化試験

(1) 肥料並びに土壌改良資材の実用化試験

(昭和45年～継続)(229030)

a 試験目的：新肥料及び土壌改良資材について、作物の生育や収量に対する施用効果を検討する。

b 試験方法：秋まき小麦に対する貝化石「ミラクルシェル」、たまねぎに対する有機入り液肥「e・トミー」の施用効果の2資材について施用効果を検討した。

c 成績の概要：両資材とも効果が判然とせず、「ミラクルシェル」は完了、「e・トミー」は処理濃度を高めて継続とする。

2) 病虫科

1 病害虫発生予察事業

(1) 普通作物病害虫発生予察調査

(昭和16年～継続)(530010)

a 試験目的：病害虫の繁殖状況、農作物の生育状況、これに関する気象などを調査し、病害虫の発生時期、量、被害を予測し、その情報を報告または提供して被害を未然に防止軽減する。本調査では主要作物病害虫の定点圃における発生状況、発生原因の解析を実施するとともに、予察法確立のための検討も行う。

b 試験方法：病害虫発生予察要綱および要領による。作物8、品種11、対象病害虫32。供試面積25a。

c 成績の概要：

(a) 農試定点圃において多発生した病害虫特になし

2 病害虫に関する試験

(1) 高品質小麦早期開発のための検定・選抜強化

2) 特性検定と選抜の強化

2. 赤かび病抵抗性検定

(平成13年～18年)(112130)

a 試験目的：小麦品種・系統に対する赤かび病抵抗性を検定し、個体・系統選抜を行い、抵抗性品種育成に資する。

b 試験方法：ビニールハウスでの*Microdochium nivale*による検定(38品種・系統)

c 成績の概要：ビニールハウスでの*Microdochium nivale*による検定：各品種・系統の発病指数は0.03～2.06であった。いずれの接種日においても、指標品種の発病指数が非常に低かったため、明確に発病した北系1820のみを抵抗性“弱”とした。

(2) 道産小麦の安全性・安定性向上試験

(平成16年～18年)(222120)

1) 赤かび病抵抗性強化とDON低減のための技術開発促進

1. 赤かび病抵抗性及びマイコトキシン産生抑制型品種の開発促進

小麦科と共同。小麦科成績概要を参照のこと。

(3) 疫病抵抗性ばれいしょ品種の開発促進

(平成16年～20年)(222340)

馬鈴しょ科と共同。馬鈴しょ科成績概要を参照のこと。

(4) ばれいしょ輸入品種等選定試験

(平成8年～継続)(222310)

1) そうか病特性検定試験

a 試験目的：ばれいしょ輸入品種等のそうか

病抵抗性を検定し、優良品種選定上の資料とする。

b 試験方法：輸入品種3：「HP01」、「CP04」、「HP02」、標準品種1、比較品種4、1区5株、3反復。発病いも率、発病度を調査した。

c 成績の概要：試験は甚発生条件下で行われた。「HP01」と「HP02」は弱、「CP04」は中と判断された。

2) ジャガイモシストセンチュウ抵抗性検定

a 試験目的：ばれいしょ輸入品種等をジャガイモシストセンチュウ汚染圃場に栽培し、それに対する抵抗性を検定し、新優良品種選定のための資とする。

b 試験方法：輸入品種3、比較・標準品種2、1区1 m²、2反復。卵密度増殖率、シスト寄生程度を調査した。試験場所は、斜里町現地農家ほ場。

c 成績の概要：植え付け時密度は0.2卵/1g乾土で試験を行った。いずれの系統もシストの寄生が認められず、作付け後のセンチュウ密度も低下したことから、抵抗性と判定した。

(5) 特性検定試験

1) そうか病抵抗性検定試験

(平成15年～)(123052)

a 試験目的：北海道農業研究センター、北見農試および長崎県総合農林試験場で育成した有望系統について、そうか病に対する抵抗性を検定し、新品種育成のための資とする。

b 試験方法：育成系統：15、標準品種：1、比較品種：10。試験規模：*S. turgidiscabies* 検定：1区6株、*S. scabies* 検定：1区5株 各3反復。調査項目：病いも率、発病度。

c 成績の概要：各育成系統の抵抗性は次の通り判定された。やや強～中：「北系29号」、中：「北育6号」「西海35号」、中～弱：「北海98号」「長系125号」、弱：「北育11号」「北育13号」「北海97号」「北海94号」「北系30号」「勝系13号」「西海34号」「長系127号」「長系128号」「長系129号」。

2) ジャガイモシストセンチュウ抵抗性検定試験

a 試験目的：北海道農業研究センター、北見農試および長崎県総合農林試験場で育成した有望系統について、ジャガイモシストセンチュウに対

する抵抗性を検定し、新品種育成のための資とする。

b 試験方法：標準・比較：9品種、育成系統15。試験場所は、斜里町現地農家、シストセンチュウ汚染ほ場。シスト寄生程度、増殖率を調査した。

c 成績の概要：植え付け時密度は0.2/1g乾土で、標準・比較品種の判定は既往の報告と一致した。供試した育成系統のうち、北農研センター「北海98号」および長崎県総合農林試験場育成「長系129号」は既往の報告通り感受性で、他は全て抵抗性であった。

(6) 「ジャガイモ病害虫の簡易検出・高精度診断技術の開発 簡易検出法の生産現場における実証試験」

(平成17～19年)(611910)

a 試験目的：現地一般圃場から土壌を採取し、カップ線虫検定法を用いて、簡易性・検出精度等を評価し、生産現場に適した改良を行う。

b 試験方法：シスト接種および現地から採取した土壌に感受性種いもを供試し、シスト形成数を調査。

c 成績の概要：接種量に応じてシスト形成が認められ、おおまかな関係を認めることができた。現地土壌を供試した結果では、従来法によりシストが認められなくてもシスト形成をみたものもあったが、シストが認められてもシスト形成がないものもあった。これらから利用場面についてさらに検討が必要と思われた。

(7) 良食味・高貯蔵性たまねぎ新品種育成

(平成11年～15年)(400310)

4) 病害抵抗性検定

試験概要は畑作園芸科参照のこと。

(8) 土壌環境改善を主体としたタマネギ乾腐病防除対策の確立

(平成15年～18年)(115220)

a 試験目的：本病の多発要因を全道的な規模で再検討するとともに、施肥法、有機物施用および耕起・砕土法などの土壌環境改善による発病の

軽減策を検討し、本病に対する抜本的対策としての耕種的防除対策を確立する。

b 試験方法：

(a) 現地圃場の発生実態調査

石狩、上川、空知、網走の14市町村、計85筆、93地点

(b) 土壌・肥培管理による発病軽減試験

耕起、緑肥等の土壌管理、塩類濃度低減施肥等の組合せ効果の検討

c 成績の概要：

(a) 空知・上川支庁で発生が多く、気象以外の要因の関与が考えられた。

(b) 多発要因として、物理性、肥料成分のバランス不良との関連が認められた。

(c) これらを改善するために、耕起法、堆肥施用等を組み合わせることにより発病低減が認められ、収量性も良好であった。

(9) たまねぎ減農薬栽培技術モデルの策定に向けた技術開発と実証 (平成18～19年) (552020)

1) 発生対応型防除技術の開発

a 試験目的：たまねぎの生育期の重要病害虫、白斑葉枯病とネギアザミウマに対し、発生対応型防除技術の開発を行う。

b 試験方法：

以下の項目について、長沼（中央農試）と訓子府（北見農試）で試験を行った。

(a) 白斑葉枯病：

初回散布時期の検討および被害解析
薬剤特性の解明

(b) ネギアザミウマ：

薬剤散布時期・回数の検討

c 成績の概要：

(a) 白斑葉枯病：

初回散布は初発直後で、その後の散布間隔は最小15日、散布回数は3回以上と考えられた。また散布切り上げは、倒伏期の3～4週間前と考えられた。供試した薬剤の残効は15日以上と考えられた。

(b) ネギアザミウマ：

これまでの結果と合わせると、薬剤散布開始はほぼ全株に食害が認められる（食害程度25～50）

時期とし、その10日後に2回目散布を行い、3回目の散布をその10～20日以内に行うことがよいと考えられた。また、少発生地帯においても7月20日頃1回は散布する必要があると考えられた。

(10) たまねぎの有機栽培における生産安定化

(平成16年～18年) (571130)

試験概要は栽培環境科参照のこと。

(11) バレイショ等における生物機能を活用した病害虫防除技術の開発 生物機能を活用したバレイショの環境負荷低減技術の体系化と実証

(平成18年～20年) (215230)

a 試験目的：アブラムシ類に対する殺虫剤無散布の可能性についてはほ場での検討を行う。また、トマト水耕液由来ジャガイモシストセンチュウふ化促進物質を利用した防除技術の現地実証を行う。

b 試験方法：

(a) 殺虫剤散布区と無散布区におけるアブラムシ類および天敵類の調査と収量調査

(b) 現地汚染ほ場に対するトマト水耕廃液精製物の施用処理。処理前後の線虫密度調査。

c 成績の概要：

(a) 殺虫剤無散布区において天敵類が多く認められ、アブラムシ類の多発生はなく収量も散布区と同程度であった。

(b) 現地汚染ほ場に混和施用処理を行ったが、明確な密度低下は認められなかった。

3 農作物病害虫の診断に関する試験

(1) 突発および新病害虫の診断試験

(昭和51年～継続) (115210)

a 試験目的：栽培法の変化や品種の変遷など農業立地環境の変動に伴う突発病害虫や新病害虫を早急に診断して被害を最小限にとどめる。

b 試験方法：農業改良普及センター、農協、農家などからの依頼に対し、常法により病原菌または害虫の種類を明らかにすると共に、必要に応じて現地を調査して発生実態および被害を明らか

にする。

c 成績の概要：

(a) 病害の診断点数は32点 虫害の診断依頼点数は10点であった。

(b) 新発生害虫として、たまねぎの立枯病（新病害）*Fusarium avenaceum* (Fries)Saccardoが認められた。

4 新農業資材に関する試験

(1) 農薬実用化試験

(昭和45年～継続) (229010)

a 試験目的：新農薬の防除効果および実用性を検討し、防除対策に資する。

b 試験方法：小麦、馬鈴しょ、大豆、小豆、たまねぎ、わさびだいこんについて、18殺菌剤、1展着剤および5殺虫剤の計24薬剤（処理）について効果を対照薬剤と比較して判定し、さらに薬害の有無を観察する。

c 成績の概要：

主要成果の具体的な数字は、平成18年度日植防及び北植防委託試験成績書を参照のこと。

4 技術普及部の成績概要

1) 技術体系化チームの研究

(1) 地域水田農業改革実践支援事業

—北見地域における土地利用型野菜の導入・定着—

(平成16年～18年) (590115)

a 試験目的：水田農業における経営の複合化・多角化に向けた技術的・経営的課題を整理して、有効な技術の体系化現地実証や経営モデルの策定などにより、「地域水田農業ビジョン」の実現を支援する。

b 試験方法：

- (a) 水田クリーン農業の定着（訓子府町）
 - ・モチ米の減肥・減農薬の実証
- (b) 転作作物の選定・導入・定着と栽培技術の実証（訓子府町）
 - ・えだまめの無農薬栽培
 - ・アスパラガスの立茎栽培
 - ・たまねぎの減農薬栽培

c 成績の概要：

(a) もち米の減化学肥料・減農薬栽培：これまで窒素化学肥料を9kg/10a使用であったが、化学肥料窒素7kg/10a、有機窒素1kg/10aの施用で、慣行と同等の生育・収量であったことから、十分実用可能である。

減農薬による5～6成分のYES!clean体系が可能であることが確認できた。

(b) えだまめの無農薬栽培：無農薬でも生育や収量への影響はみられず、北見地区での栽培は可能であることが実証できた。導入にあたっては、収穫期間中の計画的な労働確保を図ることが重要である。

(c) アスパラガスの立茎栽培：収穫2年目の収量の伸びは少なかったが、適正な栽培管理によって更なる収量向上は可能であり、有望な品目と考えられた。

(d) たまねぎの減農薬栽培：総収量では7t/10a以上、規格内収量では6t/10a以上の収量が確保され、減農薬栽培の実用化が実証できた。

(e) 経済性評価：北見地区内で実用化が実証された、もち米の減化学肥料・減農薬栽培、えだまめの無農薬栽培、アスパラガスの立茎栽培、たまねぎの減農薬栽培に対する技術導入の経済性評価を行い、改善効果を示した。

d 地元関係機関との連携：

該当JA・市町村、網走農業改良普及センター（本所）、生産者、網走支庁、技術体系化チーム

(2) ばれいしょの大規模省力高品質生産システムの実証

－斜網地域における大規模省力高品質生産システムの実証－

（独法受託、平成17年～18年）(212350)

a 試験目的：斜網地域の現地農家は圃場においてソイルコンディショニングや早期培などの技術による省力化およびばれいしょの品質に対する効果を検証する。

b 試験方法：

(a) 既存技術、機械を用いた高生産技術の実証：津別町、斜里町

c 成績の概要：

(a) 津別町：津別町のソイルコン区は、茎数、上いも数は慣行と同等であったが、規格内いも重はやや少なかった。慣行区に比べ生育はやや遅れていたが枯凋は早く、小粒が多かったためと考えられる。早期培土区は1個重が増加し規格内率が向上したため、規格内いも重は慣行より多かった。

(b) 斜里町：斜里町ではソイルコン区、早期培土区とも茎数、いも数が少なかったため、慣行区に比べ上いも重、規格内いも重とも少なかった。要因は判然としないが、ソイルコン区、早期培土区では6月の風雨により培土が浸食されたため、再培土を図ったことによる根系への影響が考えられた。

(c) 作業労働時間調査：各試験地ともソイルコン区の無選別時タンク内土塊石れき混入量は、慣行区に比べ減少し、土塊選別作業の負荷軽減により作業速度は早くなり、津別では作業人員を減らすことができた。早期培土区では石れきの多い津別町では石れきがタンク内に混入していたが、そ

の他では少なかった。投下労働時間は能率向上により慣行区に比べソイルコン区で12%～56%、早期培土区で9%～39%削減され、打撲損傷も慣行より減少すると判断された。

d 地元関係機関との連携：

該当JA・市町村、生産者、網走農業改良普及センター（美幌支所・清里支所）、網走支庁、技術体系化チーム

(3) 革新的農業技術導入促進事業

－後作緑肥導入によるたまねぎ畑の窒素負荷低減対策の実証－

（平成18年～19年）(580114)

a 試験目的：たまねぎ連作畑への後作緑肥の導入および有機物施用量、土壌肥沃度を勘案した適切な施肥設計などによる総合的な窒素負荷低減対策を実証する。併せて技術導入を阻んでいる要因を解明する。

b 試験方法：

(a) 有機物施用および緑肥等の導入実態調査
・有機物施用量、化学肥料施用量、輪作および緑肥栽培の実態及び各種意識調査

(b) 後作緑肥導入のための作付体系の確立（北見市、上湧別町）

- ・窒素施肥量：慣行区、減肥区
- ・緑肥栽培の有無
- ・緑肥栽培時の窒素施肥量(kg/10a)：0、4

c 成績の概要：

(a) 有機物施用および緑肥等の導入実態調査：網走管内のたまねぎ生産者を対象に有機物施用量、施用時期、肥料施用量、輪作および緑肥栽培の実態、病虫害の発生状況等の調査を行い、411件の回答を得た。

(b) 後作緑肥導入のための作付体系の確立：窒素施肥量を慣行より減らした場合、慣行に比べ、7月中旬におけるたまねぎの窒素吸収量は各ほ場とも少なかったが、総収量および規格内収量は同等であった。しかし、規格内球重はやや小さい傾向であった。

えん麦を8月中旬に播種したほ場において、窒素4kg/10a施肥では乾物収量が400kg/10a（北海道

緑肥作物等栽培利用指針における標準量の下限)を上回り、窒素吸収量も施肥量を上回った。しかし、9月上旬に播種したほ場2カ所のえん麦およびライ麦では、乾物収量が少なく、窒素吸収量も施肥量を下回った。

たまねぎ栽培土壌の無機態窒素量は、期間を通して減肥区では慣行に比べ概ね同等もしくは低く推移した。各ほ場とも収穫期では移植前に比べ多く残存したが、8月上旬に収穫したほ場Aでは、浅い層(深さ0~40cm)に占める割合が約70%と高かった。

後作緑肥栽培土壌の無機態窒素量は、すき込み前では播種前より減少していた。すき込み時期の残存量は無播種で最も多く、えん麦やライ麦では次いで窒素4kg/10a施肥、無窒素の順に少ない傾向であった。なお、緑肥の収量が少なかったほ場では、播種前における浅い土層の無機態窒素量が少ないことがその要因のひとつと考えられる。

えん麦とヘアリーベッチの混播では、窒素吸収量がえん麦単播を大きく上回ったが、土壌の無機態窒素量は、播種前とすき込み前で同等であった。

d 地元関係機関との連携：

該当JA・市町村、生産者、網走農業改良普及センター(本所)、網走支庁、技術体系化チーム

IV 研究発表及び普及事項

1 研究発表

(1) 研究論文

- 1) 吉良賢二. テンサイ黒根病の圃場検定法. 植物防疫 60(12):572-575(2006.12).
- 2) 柳田大介・西田忠志・野田智昭・中野雅章・田中静幸・入谷正樹・小谷野茂和・駒井史訓. 極早生多収たまねぎ新品種「北見交39号」. 平成17年度新しい研究成果—北海道地域— 61-63(2006).
- 3) 柳田大介. たまねぎ新品種「北見交39号」. 北農 第73巻第2号:41(2006.4).
- 4) Miladinovic, J., Kurosaki, H., Burton, J. W., Hrustic, M., Miladinovic, D. The adaptability of short season soybean genotypes to varying longitudinal regions. European Journal of Agronomy 25:243-249(2006).
- 5) 山田誠司. てんさい新品種「H134」. 北農 73:158(2006.2).
- 6) 池谷 聡・藤田涼平・入谷正樹・千田圭一・伊藤 武・関口建二・大波正寿. 疫病圃場抵抗性が“強”で無農薬栽培等に向く生食用ばれいしょ新品種「北育8号」. 平成17年度新しい研究成果—北海道地域— 49-52(2006).
- 7) 柳沢 朗・吉村康弘・中道浩司・小林 聡・西村 努・池永充伸・佐藤奈奈・荒木和哉・天野洋一・田引 正・谷藤 健・三上浩輝. 小麦新品種「北見81号」の育成(北海道農業試験場集報、投稿中)
- 8) 吉村康弘・中道浩司・小林 聡・西村 努・池永充伸・佐藤奈奈・荒木和哉・天野洋一・柳沢 朗・田引 正・谷藤 健・三上浩輝. 製粉性およびめん色に優れる秋まき小麦新品種「北見81号」. 平成17年度新しい研究成果—北海道地域— 45-48(2006).
- 9) Tamaki, H. et al. Modified synthetic varieties; a breeding method for forage crops to exploit specific combining ability. Plant Breeding 126:95-100.
- 10) 松中照夫・佐々木寛幸・神山和則・三枝俊哉・松本武彦・古館明洋・三浦 周. 酪農のための糞尿利用計画支援ソフト「AMaFe」. 平成17年度新しい研究成果—北海道地域— 116-120(2006.12).
- 11) 中村隆一・國本 稔・高橋直己・前川敬治. メロンに対するケイ酸資材の施用効果. 北農 74:16-21(2007.1).
- 12) 唐 星児・志賀弘行・松本武彦・日笠裕治. たまねぎ畑における浸透水中硝酸性窒素の低減に及ぼす緑肥および秋まき小麦導入の効果. 北農 73(2):23-29(2006.4).
- 13) FUEKI, N., SAWAMOTO, T., HIGASHIDA, S., NAKATSU, S. Factors affecting nitrification in arables soils in Hokkaido, Japan: Influence of applied nitrogen concentration, form of nitrogen source, soil pH and soil organic matter. PEDOLOGIST. 50. 81-90 (2006).
- 14) 中津智史・東田修司. 簡易耕が畑土壌及び畑作物の生育収量に及ぼす影響. 北農 73:134-141(2006).
- 15) 江部成彦・品田裕二・小池 寿・高田法幸・村田吉平・奥山昌隆. 十勝地方における金時類の多収要因解析. 北農 73(3):240-245(2006.7).

(2) 口頭発表

- 1) 柳田大介・野田智昭・西田忠志. たまねぎ極早生有望系統「北見交38号」の特性. 北海道園芸研究談話会報 第40号:36(2006).
- 2) 柳田大介. 乾腐病に強く、8月上旬から出荷できるたまねぎ「北見交38号」の特性について. 第11回

- オホーツク圏新技術セミナー (2007. 2. 22).
- 3) 柳田大介. 8月出荷ができる大球・多収たまねぎ品種「北見交39号」の開発. 第5回北海道食品産業総合展 (2006. 10).
 - 4) 池谷 聡. 疫病無防除栽培が可能な生食用ばれいしょ新品種「北育8号」. 第5回北海道食品産業総合展技術成果発表会 (2006. 10. 14).
 - 5) 池谷 聡・藤田涼平・入谷正樹・千田圭一. 無農薬栽培に向くばれいしょ新品種「さやあかね」の育成. 日本育種学会第111回講演会 (2007. 3. 31).
 - 6) 中道浩司. 春まき小麦における穂発芽性極難の導入. 穂発芽研究会第11回ワークショップ (2006. 7).
 - 7) 西村 努・吉村康弘・柳沢 朗. 北海道の秋まき小麦品種の穂発芽性と収穫期の降雨処理が品質に及ぼす影響. 穂発芽研究会第11回ワークショップ (2006. 7).
 - 8) 西村 努・石川岳史・林 将也・中村隆一・庵 英俊・吉村康弘. 栽培条件および土壌条件がコムギ子実の灰分含有率に及ぼす影響について. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報 47:93-94(2006).
 - 9) 佐藤奈奈・中道浩司・吉村康弘. 北海道立北見農業試験場における春まき小麦の赤かび病抵抗性検定試験. 第7回赤かび病研究会 (2006. 9. 8).
 - 10) 佐藤奈奈・小林 聡・吉村康弘. 赤かび病菌接種による春まき小麦のDON (デオキシニバレノール) 蓄積性検定. 平成18年度日本育種学会・日本作物学会北海道談話会 (2006. 12).
 - 11) 鈴木孝子・佐藤導謙・神野裕信・中道浩司・佐藤奈奈・西村 努・小林 聡・池永充伸・吉村康弘・竹内 徹. 北海道小麦品種におけるDNAマーカーを利用したピュロインドリン、グルテニン、Wx遺伝子タイプの解析. 平成18年度日本育種学会・日本作物学会北海道談話会 (2006. 12. 2).
 - 12) 柳沢 朗・西村 努・吉村康弘・小林 聡・池永充伸. めん用小麦の品質改善のための育種戦略. 日本育種学会・日本作物学会北海道談話会報 47:95-96(2006).
 - 13) 柳沢 朗. 秋まき小麦「北見81号」の穂発芽性選抜. 穂発芽研究会第11回ワークショップ (2006. 7).
 - 14) 柳沢 朗・西村 努・吉村康弘・小林 聡・池永充伸. 高品質めん用小麦品種「きたほなみ」の製粉特性について. 日本育種学会第111回講演会 (ポスター発表) (2007. 3).
 - 15) 吉村康弘・柳沢 朗・中道浩司・小林 聡・西村 努・池永充伸・佐藤奈奈・谷藤 健. 製粉性およびめん色に優れる秋まきコムギ新品種「きたほなみ」の育成. 育種学研究 9(別1)P54(2007).
 - 16) 玉置宏之・佐藤公一・田中常喜・足利和紀・嶋田 徹・大塚博志・岩淵 慶・澤田嘉昭・安達美江子. 特定組合せ能力利用によるチモシー多収系統の育成:2栄養系×1花粉親系統合成法による育成系統の能力. 2006年度日本草地学会大会 (2006. 10).
 - 17) 足利和紀・玉置宏之・出口健三郎・佐藤公一. チモシー1番草における栄養価の環境に対する安定性. 2006年度日本草地学会大会 (2006. 10).
 - 18) 田中常喜・足利和紀・玉置宏之・出口健三郎・佐藤公一. チモシー (*Phleum pratense* L.) の2番草刈取時期が2番草の収量および栄養価に及ぼす影響. 平成18年度北海道草地研究会研究発表会 (2006. 12).
 - 19) 三浦 周・岡元英樹・森井泰子・牧野 司・佐藤尚親・安積大治. 衛星リモートセンシングを用いた草地の湿潤性評価. 2006年度日本土壌肥料学会北海道支部秋季大会講演要旨集 B08(2006. 12).
 - 20) 松中照夫・三枝俊哉・佐々木寛幸・松本武彦・神山和則・古館明洋・三浦 周. 環境に配慮した酪農のためのふん尿利用計画支援ソフト「AMAFE」その1. 「AMAFE2006」の概要と演算論理. 日本土壌肥料学会講演要旨集 52:136(2006).
 - 21) 三枝俊哉・松中照夫・佐々木寛幸・松本武彦・神山和則・古館明洋・三浦 周. 環境に配慮した酪

- 農のためのふん尿利用計画支援ソフト「AMAFE」その2、「AMAFE2006」の現地導入効果. 日本土壌肥料学会講演要旨集 52:136(2006).
- 22) 中村隆一・唐 星児・林 哲央. オホーツク地域の麻栽培における土壌浄化効果. 「伝統みらい素材を見直す～麻とヘンプ」(バイオマス産業社会ネットワーク(BIN)・京都工芸繊維大学伝統みらい研究センター主催シンポジウム) (2006. 11. 25).
- 23) 中村隆一. 安心してたまねぎの有機農業にとりくむために. 平成19年(第25回)農業新技術発表会 (2006. 2. 15).
- 24) 中村隆一. 良質小麦生産のために. 平成18年度良質小麦安定生産技術講習会(冬季) (2007. 2. 28).
- 25) 池谷美奈子・児玉不二雄. *Fusarium avenaceum* (Fries) Saddardoによるタマネギ立枯病. 北日本病害虫研究会 (2007. 2. 8).
- 26) 山名利一. Introduce about Onion with leaf dead symptom in Abashiri District. タマネギ病害・育種シンポジウム (2006. 10. 19).

(3) 専門雑誌記事

- 1) 柳田大介. 球の肥大性に優れた北海道向け極早生多収たまねぎF₁品種「北見交39号」. 農家の友 7月号:74-75(2006).
- 2) 柳田大介. 8月に出荷できる球の大きいたまねぎ新品種候補「北見交39号」. ニューカントリー 625号:56-57(2006. 4).
- 3) 柳田大介. 北海道向け極早生多収たまねぎ新品種「収多郎(北見交39号)」. 今月の農業 4月号:58-61(2007).
- 4) 黒崎英樹. 留辺蘂町における白花豆に対する生育後期の窒素供給効果の実証. 豆類時報 45:76-77(2006).
- 5) 山田誠司. てんさい新品種「アニマート」. ニューカントリー 5月号(2006. 5).
- 6) 山田誠司. 平成18年産てん菜の生産実績について. 砂糖類情報 No. 126:3月号(2007. 3).
- 7) 池谷 聡. 疫病無防除栽培が可能な生食用ばれいしょ新品種「北育8号」. ニューカントリー 630(2006. 9).
- 8) 吉村康弘. 海外事情カナダの農業食糧省穀物研究所北海道小麦の赤かび病抵抗性向上に期待かかる研修. ニューカントリー 6月号627号52-53(2006. 5).
- 9) 吉村康弘. 小麦の品種開発の現状と方向性. あぐりぽーと No. 63(2006. 10).
- 10) 小林 聡. 多収で加工適性に優れためん用秋まき小麦新品種「北見81号」. ニューカントリー 4月号625号:18-19(2006. 4).
- 11) 小林 聡. 小麦新品種「北見81号」. 北農 第73巻第2号:152(2006. 4).
- 12) 小林 聡. 多収で加工適性に優れた秋まき小麦めん用新品種「北見81号」. 農家の友 72-73(2006. 6).
- 13) 松中照夫・三枝俊哉・佐々木寛幸・松本武彦・神山和則・古館明洋・三浦 周. 環境に配慮したふん尿利用計画をパソコンで-意志決定支援ソフト「AMAFE2006」の概要. 牧草と園芸 54(4):1-6(2006. 7).
- 14) 松中照夫・三枝俊哉・佐々木寛幸・松本武彦・神山和則・古館明洋・三浦 周. 循環型酪農をめざしたふん尿利用計画支援ソフト. 農家の友 59(2):74-76(2007. 2).
- 15) 松中照夫・三枝俊哉・佐々木寛幸・松本武彦・神山和則・古館明洋・三浦 周. パソコンで楽々ふん尿利用計画-環境に配慮した酪農のためのふん尿利用計画支援ソフト「AMAFE2006」-. 酪農ジャーナル 59(6):23-25(2006. 6).

- 16) 松中照夫・三枝俊哉・佐々木寛幸・松本武彦・神山和則・古館明洋・三浦 周. パソコンによる糞尿利用計画. デーリイマン 56(9):48-49(2006. 9).
- 17) 中村隆一. たまねぎの有機栽培技術. ニューカントリー 4月号(2007. 4).
- 18) 唐 星児. 地下水の硝酸性窒素汚染リスク評価ソフト” NiPRAS” を用いた肥培管理. あぐりぼーと 64:4-5(2006. 12).
- 19) 柳沢 朗. 北見・遠紋地区てん菜の低収・低糖分の要因と改善対策. ニューカントリー 53(631):60-61(2006. 10).
- 20) 江部成彦. 平成18年技術総括 畑作(麦類・豆類). 農家の友 12月号p50~52(2006).

(4) 著編書、資料

- 1) 柳田大介. ニューカントリー2006年秋季臨時増刊号野菜品種データ北海道向けラインアップ葉茎菜類たまねぎ(分担執筆). 北海道協同組合通信社 (2006. 10).
- 2) 西田忠志. ニューカントリー2006年秋季臨時増刊号野菜品種データ北海道向けラインアップ根菜類ごぼう(分担執筆). 北海道協同組合通信社 (2006. 10).
- 3) 千田圭一・池谷 聡・藤田涼平・入谷正樹. ばれいしょ新品種「北育8号」. 北農 73(2):154(2006).
- 4) 池谷 聡・千田圭一・入谷正樹・伊藤 武・関口建二・大波正寿・藤田涼平. 疫病圃場抵抗性が“強”で無農薬栽培等に向く生食用ばれいしょ新品種候補「北育8号」. 平成17年度研究成果情報北海道農業 76-77(2006. 6).
- 5) 池谷 聡・千田圭一・入谷正樹・伊藤 武・関口建二・大波正寿・藤田涼平. 疫病に圃場抵抗性を有する生食用ばれいしょ新品種「さやあかね」. 平成17年度作物研究研究成果情報 74-75(2006. 11).
- 6) 吉村康弘. 第5章加工と品質. 穂発芽一国产小麦の品質向上をめざしてー(分担執筆). 穂発芽研究会 74-80(2006).
- 7) 西村 努. 穂発芽性極難小麦「北系1802」の開発. 穂発芽一国产小麦の品質向上をめざしてー(分担執筆). 穂発芽研究会 143(2006).
- 8) Kobayashi, K., Okada, M., Kim, H. Y., Lieffering, M., Miura, S. Hasegawa, T. Paddy Rice Responses to Free-Air [CO₂] Enrichment. Managed Ecosystems and CO₂ Case Studies, Processes, and Perspectives. J. Nosberger, S. P. Long, R. J. Norby, M. Stitt, G. R. Hendrey, H. Blum (Eds.) Ecological Studies, Vol. 187. Springer-Verlag Berlin Heidelberg. pp87-104(2006).
- 9) 中村隆一・古川勝弘・西田忠志. 有機農業技術研究成果集(パートI)有機たまねぎの安定生産技術(分担執筆). 北海道農政部・中央農業試験場 (2007. 3).
- 10) 五十嵐強志. 特集II平成18年技術総括「根菜類」. 農家の友 58(12):40~41(2006).
- 11) 五十嵐強志. 野菜品種データ~北海道向けラインアップ. ニューカントリー (2006. 10).
- 12) 五十嵐強志. 畑で読む北海道の農業気象~温暖化・異常気象に負けない営農対策. ニューカントリー (2007. 6).
- 13) 五十嵐強志. 北海道野菜地図(その30)野菜(分担執筆). 北海道農業組合中央会 (2007. 1).
- 14) 江部成彦. 明日の豆作り第4章高品質生産に向けた栽培技術(分担執筆) p 43~48(2007. 1).
- 15) 江部成彦. 平成18年の気象変動と農作物の生育に関する要因解析報告「畑作編」(分担執筆). 北海道農政部 (2007. 3).

(5) 新聞記事

- 1) 柳田大介. 品種改良味な裏話5. タマネギ. 収穫量多い極早生品種. 北海道新聞 (2006. 9. 2).

- 2) 柳田大介. 乾腐病に強く外観品質に優れた北海道向け極早生たまねぎ品種を開発中. 日本種苗新聞 (2006. 7. 11).
- 3) 池谷 聡. 「経営と技術」新品種の横顔 ばれいしょ「北育8号」. 日本農業新聞 (2006. 4).
- 4) 池谷 聡. 疫病無防除栽培が可能な生食用ばれいしょ新品種「北育8号」. 農業共済新聞 (2006. 4. 26).
- 5) 千田圭一. 品種改良味な裏話<7>「ジャガイモ」. 北海道新聞 (2006. 11. 4).
- 6) 吉村康弘. 多収で穂発芽に強いパン用、期待の新品種春播き小麦「北見春67号」. 農業共済新聞 (2007. 3. 21).
- 7) 中道浩司. アグリセミナー07北見農業試験場の最新研究成果④パン用春まき小麦「北見春67号」. 経済の伝書鳩 (2007. 3. 21).
- 8) 大麻で土壌改善. 北海道新聞 (2007. 9. 18).
- 9) 五十嵐強志. 2006年道農業の検証:野菜・根菜類. 日本農業新聞 (2006. 1. 5).
- 10) 江部成彦. 2006年道農業の検証:麦作・北見. 日本農業新聞 (2007. 1).
- 11) 江部成彦. 2006年道農業の検証:畑作・てん菜. 日本農業新聞 (2007. 1).

2 普及事項

1) 普及奨励事項

- 1) たまねぎ新品種 「北見交38号」
- 2) てんさい新品種 「KWS 4S65」
- 3) 小麦 「北見春67号」

2) 普及推進事項

- 1) たまねぎ極早生品種の品質評価と栽培技術指針
- 2) たまねぎの有機栽培技術
- 3) 小型反射式光度計を用いた土壌硝酸態窒素の簡易測定法 (共同)

3) 指導参考事項

- 1) チモシー主体草地および飼料用とうもろこしの有機栽培法
- 2) 殺虫・殺菌剤
 - ① ばれいしょのジャガイモヒゲナガアブラムシに対するピメトロジン水和剤DFの効果

V. 研究企画・調整・出版・広報

1 諸会議

会議名	開催時期	場所	参加者
部課（科）長会議	H18. 4. 12	農試講堂	場員
部課（科）長会議	H18. 5. 10	農試講堂	場員
場内研究課題検討会	H18. 5. 18～19	農試講堂	場員
部課（科）長会議	H18. 6. 13	農試講堂	場員
部課（科）長会議	H18. 7. 4	農試講堂	場員
部課（科）長会議	H18. 8. 1	農試講堂	場員
部課（科）長会議	H18. 8. 30	農試講堂	場員
部課（科）長会議	H18. 10. 2	農試講堂	場員
部課（科）長会議	H18. 10. 31	農試講堂	場員
部課（科）長会議	H18. 12. 5	農試講堂	場員
現地委託試験成績検討会議	H18. 12. 7	訓子府町公民館	場員、普及センター、関係農試
場内成績検討会	H18. 12. 12～13	農試講堂	場員
部課（科）長会議	H18. 12. 27	農試講堂	場員
部課（科）長会議	H19. 1. 31	農試講堂	場員
場内設計会議	H19. 2. 9 2. 13	農試講堂	場員
部課（科）長会議	H19. 3. 2	農試講堂	場員
現地委託試験設計会議	H19. 3. 16	農試講堂	場員、普及センター、関係農業団体
部課（科）長会議	H19. 3. 30	農試講堂	場員

2 各種委員会

1) 企画委員会

(1) 構成

委員長：吉良賢二

委員：原 令幸、東田修司、柳沢 朗、宮本裕之、入谷正樹、三浦 周、井上千秋

(2) 活動内容

ア 農試公開デー実行委員会

○体制 企画委員会の小委員会として、H18年5月31日より次のスタッフにより発足した。

吉良賢二（委員長）、宮本裕之、三浦 周、高内良一、沢田敏樹、野田智昭、藤田涼平、佐藤奈奈、玉置宏之、唐 星児、山名利一、江部成彦

○経過 合計3回の委員会を開催し、次の行事を立案・準備した。

①オリジナルポスターの作成

②農試内イベント（農試探検ウォークラリー、研究成果パネル展、家庭菜園相談室、徒歩ツアー、バスツアー、馬鈴しょ収穫体験、試食）

○公開デーの開催

日時：平成18年8月26日（土）

協力：網走支庁、網走農業改良普及センター

後援：訓子府町、北見市、置戸町、JAきたみらい、北見市消費者協会、北海道中小企業同友会ホ-

ツ支部

参加者数：部外者約220名

イ オホーツク農業新技術セミナー実行委員会

○構成

吉良賢二（委員長）、宮本裕之、柳沢 朗、山田誠司、藤田涼平、佐藤奈奈、足利和紀、唐 星児、山名利一

○活動内容

①実行委員会の開催：平成19年1月31日

新技術セミナー分担案について

○開催（第11回オホーツク農業新技術セミナー）

開催日：平成19年2月22日（木）、開催場所：訓子府町公民館、参加者数：約150名

ウ 病害虫汚染防止委員会

エ 百年記念誌編集委員会

○構成

吉良賢二（委員長）、宮本裕之、入谷正樹、三浦 周、井上千秋、三浦和利、野田智昭、千田圭一、中道浩司、玉置宏之、中村隆一、古川勝弘、東田修司

○活動内容

①3回の編集委員会を開催

1) 編集作業工程の協議

2) 編集方針の協議

3) 執筆分担案の協議

4) 進捗状況の協議

2) 圃場管理委員会

(1) 構成

委員長：吉良賢二

委員：原 令幸、東田修司、井上千秋、竹内 豊、宮本裕之、山田誠司、千田圭一、中道浩司、佐藤公一、三浦利和、中村隆一、古川勝弘

(2) 活動内容

① 委員会の開催

第1回：平成18年6月27日

1) 大型圃場のローテーションの変更

2) 堆肥散布計画

3) 圃場整備計画

4) 圃場管理記録表に関する土壌分析結果

② 圃場管理記録表の作成・配布

1) 平成18年度圃場管理記録表配布：平成18年4月

2) 圃場管理記録表提出依頼：平成18年12月

3) 平成19年度圃場管理記録表配布：平成19年3月

3) 業務委員会

(1) 構成

委員長：宮本裕之

委員：三浦和利、高山榮一、柳田大介、藤田涼平、小林 聡、玉置宏之、唐 星児、山名利一

(2) 活動内容

① 第1回委員会：平成18年4月20日

1)業務委員会体制

2)開催要領

3)管理科業務体制

4)臨時農業技能員体制

5)その他

② 定例委員会：4月27日から11月2日まで原則として毎週木曜日に開催した。

1)機械作業など週間作業計画および貨物車両使用計画

2)臨時農業技能員週間作業計画

4) 図書委員会

(1) 構成

委員長：原 令幸

5) 研修委員会

(1) 構成

委員長：原 令幸

6) 福利厚生委員会

(1) 構成

委員長：井上千秋

7) システム委員会

(1) 構成

委員長：吉良賢二

(2) 活動内容

ホームページの更新

8) バイテク共同実験室利用委員会

(1) 構成

委員長：原 令幸

3 刊行印刷物

印刷物名	発行年月	頁	部数
平成17年度北海道立農業試験場年報	18.6	86	100(デジタル版)
平成18年度事業実施計画書	18.6	32	デジタル版
小麦新品種決定に関する参考成績書 「北見81号」	18.8	61	110
新品種決定に関する参考成績書 小麦「北見春67号」	19.1	64	180
新品種決定に関する参考成績書 たまねぎ「北見交38号」	19.3	50	60
平成18年度(2006年度)たまねぎ極早生品種の栽培に関する試験成績書	19.3	65	60
平成16年度(平成16年9月播種)秋まき小麦育種試験成績書	19.3	193	90
小麦品質に関する試験成績書 平成13年産秋まき小麦	19.3	106	90
平成18年度(2006年度)技術体系化チームプロジェクト研究に関する試験成績書	19.3	78	80

4 広報活動

1) シンポジウム・セミナー等

名称	開催時期	場所	内容	参加者
農業センター等連絡会議平成18年度研究交流会	H18.8.22	興部町オホーツク農業科学センター	1) 興部町オホーツク農業科学研究センターの業務概要 齋藤暢浩(網走支庁) 2) 管内農用プラスチック排出処理状況について 北見農協連 3) 農用廃棄プラスチックの処理法と問題点 原(根釧農試)	20名
北見農試公開デー	H18.8.26	北見農試	1) 農試探検ウォークラリー 2) 研究成果パネル展 3) 家庭菜園相談室 4) 徒歩ツアー 5) バスツアー 6) 収穫体験 7) 試食、おみやげコーナー	220名
NATEC研究情報交換会	H18.9.7 ~8	北見市民会館他	1) 地域農業技術センターの活動報告 宿野部猛(興部町)、丸茂一仁(北見市) 牛来博(美幌町)、檜田千代司(網走普及センター) 2) 話題提供 庄司隆之(JAきたみらい) 粕谷茂典(クリーンズ北見) 吉良賢二(北見農試) 3) 講演 ポジティブリスト制度への対応について、	

(つづき)

名 称	開催時期	場 所	内 容	参加者
			堀潤一（北海道農政部） 4) 現地視察 ・ グリーنز北見工場 ・ オホーツク圏地域食品加工技術センター ・ 訓子府町たまねぎ選果施設 ・ 農家ほ場「訓子府における減農薬たまねぎの取り組み」	
赤かび病抵抗性育種セミナー オホーツク地域農業技術セミナー	H19. 2. 22	北見農試	1) Fusarium Head Blight of Barley and its Associated Mycotoxins. Dr. Thin Meiw Choo (Eastern Cereal and Oilseed Research Centre Ottawa, Ontario) 2) Progress in Improving Fusarium Head Blight Resistant Wheat in Hokkaido, Japan. Yasuhiro Yoshimura (Kitami AES)	約30名
第11回オホーツク新技術セミナー	H19. 2. 22	訓子府町 公民館	1) 水稻新品種「上育糯451号」 木下雅文（上川農試） 2) 春まき小麦新品種「北見春67号」 佐藤奈奈（北見農試） 3) たまねぎ新品種「北見交38号」 柳田大介（北見農試） 4) 良食味でクリーンなたまねぎ極早生品種の栽培マニュアル 西田忠志（北見農試） 5) RQフレックスによる土壌窒素の簡易診断法 東田修司（北見農試） 6) 有機物投入で決まるてんさいの施肥設計 三浦周（北見農試） 7) 小麦の赤かび病防除～かび毒から守る～ 山名利一（北見農試）	150名
北海道たまねぎセミナー2007	H19. 3. 15	訓子府町 公民館	1) 基調講演 「加工・業務用途向けのたまねぎについて、 産地・研究機関への提言」 木村幸雄（株MCプロデュース） 2) 最新研究成果の紹介 ① 土壌病害軽減に向けて 網走農業改良普及センター ② 栽培管理アンケート集約結果 北見農試技術普及部 ③ たまねぎの機能性について 妹尾秀雄（旭川医大）	220名

(つづき)

名 称	開催時期	場 所	内 容	参加者
			④品種育成について 柳田 大介（北見農試） ⑤病害虫について 山名 利一（北見農試） ⑥栽培技術について 西田忠志（北見農試） 2) 総合討論 座長 塩澤耕二（花・野菜技術センター 研究部長）	

2) マスコミ報道

タ イ ト ル	機 関	掲載日
無農薬が可能なジャガイモ新品種 －「さやあかね」、味は男爵以上－	時事通信	H19. 3. 27
アグリセミナー07 ③小麦の赤かび病防除 無農薬栽培が可能	株式会社 伝書鳩 科学新聞	H19. 3. 27 H19. 4. 6
－道立北見農試が成果発表－ジャガイモ新品種誕生		

5 見学・参観受入れ

年月日	団 体 名	人数
H18. 4. 14	訓子府町てん菜委託苗生産グループ	11
H18. 4. 19	訓子府町てん菜耕作組合	30
H18. 5. 24	別海高校専攻科学生	25
H18. 6. 12	常呂町土佐営農集団 J Aオホーツク種馬鈴しょ耕作組合	15 10
H18. 6. 27	浦幌町三経クラブ	4
H18. 6. 30	訓子府町玉葱研究会	10
H18. 7. 4	シンジェンタジャパン(株)	50
H18. 7. 7	音更町農協南中土幌地域農業振興協議会 端野町玉葱振興会	33 20
H18. 7. 10	湧別町麦生産組合	10
H18. 7. 11	訓子府町玉葱振興会青年部 浦幌町畑作増産技術研究会	40 12
H18. 7. 12	J A土幌佐倉地区畑作振興会 J A北ひびき和寒青年部	20 30
H18. 7. 13	壮瞥町てん菜耕作振興協議会麦類振興会	8
H18. 7. 14	ビール酒造組合	20

(つづき)

年月日	団 体 名	人数
	端野町麦改良協議会	30
H18. 7. 24	網走農民同盟	25
	訓子府町麦作振興会	37
H18. 7. 27	青森県農林総合研究センター	4
H18. 7. 28	三菱商事アグリサービス(株)	10
H18. 8. 4	北海道農民連盟	30
	三菱商事アグリサービス(株)	8
H18. 8. 23	(株)日の丸産業社	40
H18. 9. 6	昭和産業(株)	5
H18. 9. 11	アグリション21	16
H18. 9. 21	愛知県製粉工業協同組合	4
H18. 9. 28	そ業研究会	20
H18. 10. 10	北見通運(株)網走支店	5
H18. 10. 25	日東富士製粉(株)	4
H18. 11. 16	常呂町農協・常呂町農協女性部	19
H19. 2. 8	J A士幌町そ菜生産振興協議会	8
H19. 3. 14	J A富良野、上川普及センター富良野支所	8

VI 技術指導及び研修

1 研修生の受入れ

研修項目	団体・氏名等	研修期間	対応部・科
地域課題解決研修 (畑作・園芸) たまねぎ紅色根腐病の 発生原因と軽減対策	網走農業改良普及センター 11名	H18. 5. 23	技術普及部 畑作園芸科 病虫科 栽培環境科
部門別総合研修(野菜)	網走農業改良普及センター 28名	H18. 5. 31	技術普及部 畑作園芸科
平成18年度高度専門技 術研修(畑作)	空知農業改良普及センター 1名 上川農業改良普及センター大雪支所 1名	H18. 7. 11～14	技術普及部 麦類科 栽培環境科

2 講師派遣

研修会および講習会名	主催者	開催日	演題	派遣者名
豆類栽培技術講習会	J A オホーツク網走	H18. 4. 5	豆類の栽植密度による増収効 果と品質への影響について	黒崎英樹
ダイコン講習会	J A 富良野	H18. 4. 13	ダイコンの安定生産技術	西田忠志
訓子府町豆類振興会栽培講習会	J A きたみらい訓子 府支所	H18. 7. 7	虎豆栽培技術について 畑作物栽培における土壌診断 技術と対策	黒崎英樹 唐 星児
専門技術研修	道技術普及課	H18. 7. 10 ～12	野菜の栽培技術	五十嵐強志
豆作部会大豆学習会	浜幌農業生産組合	H18. 7. 24	輪作体系へ的大豆導入のため	黒崎英樹
専門技術研修	道技術普及課	H18. 8. 8 ～10	クリーン農業技術	大久保利道
野菜部会研修会	網走地区農業改良普 及センター	H18. 8. 18	土壌中での窒素の動き	東田修司
高度専門技術研修	道技術普及課	H18. 8. 24 ～28	クリーン農業技術	東田修司 大久保利道
J A きたみらい農業祭「じゃが たまフォーラム」	J A きたみらい	H18. 8. 26	馬鈴しょ育種の現状について	千田圭一
ジャガイモシストセンチュウに 係る土壌の自主検診体制整備に むけた土壌検診研修	ホクレン農業協同組 合連合会	H18. 11. 1	ジャガイモシストセンチュウ の土壌検診法	古川勝弘
平成18年種苗研修会	雪印種苗株式会社	H18. 11. 28	『玉葱』の病害虫について	古川勝弘 山名利一
玉葱栽培講習会	音更町農業協同組合	H18. 12. 20	玉葱育種研究及び栽培試験結 果について	西田忠志 柳田大介
J A ネットワーク十勝農産技術	J A ネットワーク十	H19. 1. 12	小麦の品質向上対策と今後の	西村 努

(つづき)

研修会および講習会名	主催者	開催日	演題	派遣者名
対策協議会新春研修会	勝農産技術対策協議会		育種について	
豆作り講習会	日本豆類基金協会	H19. 2. 1	良質豆類の生産	江部成彦
良質麦栽培技術研修会	JAオホーツク網走	H19. 2. 13	良質麦の栽培管理について	江部成彦
玉葱振興会主催生産流通懇談会	北見地区玉葱振興会	H19. 2. 19	農試の最新研究成果について	西田忠志
第5回きたみらい麦作振興会通常総会および講習会	きたみらい農業協同組合	H19. 2. 20	新品種「北見81号」	小林 聡
女満別町麦作振興協議会冬期研修会	女満別町農業協同組合	H19. 2. 22	秋まき小麦新品種「北見81号」の特性について	小林 聡
ジャガイモシストセンチュウ防除対策研修会	J A北海道中央会	H19. 2. 23	ジャガイモシストセンチュウによる被害とまん延防止対策について ジャガイモシストセンチュウの土壌検診について	古川勝弘
新時代工学的農業クリエイター人材創出プラン（農業）	北見工業大学地域共同研究センター	H19. 2. 27	作物の品種特性とその利用	吉良賢二
良質小麦安定生産技術講習会	北海道米麦改良協会	H19. 2. 28	新品種・新技術の紹介と平成18年産の概況 小麦安定生産の栽培管理法	江部成彦 中村隆一
豆・麦類種子栽培技術研修会	十勝農業協同組合連合会	H19. 3. 2	秋まき小麦新品種の特性について	小林 聡
乾燥施設利用研修 畑作物栽培技術講習会	美幌町農業協同組合	H19. 3. 5	小麦の新品種「北見81号（きたほなみ）」「北見春67号」の特性、小麦の灰分について	吉村康弘
美瑛町農業講座	美瑛町	H19. 3. 9	堆肥の効果と活用法	東田修司
北海道たまねぎセミナー2007	網走支庁、北見農試	H19. 3. 15	加工・業務用途向け大玉有望系統について 北見農試の加工・業務用たまねぎ研究戦略	柳田大介 西田忠志
加工馬鈴薯栽培技術講習会	J Aきたみらい馬鈴薯振興会	H19. 3. 27	トヨシロ・さやかを増収・高品質に向けた栽培技術について	千田圭一
農業ゼミナール	網走地区農業改良普及センター	H19. 3. 27	pHなど土壌診断の基礎	東田修司

3 職員研修

氏名	研修項目	場所	期間
吉良 賢二	新任課長級研修	北方圏センター	H18. 6. 7～8
江部 成彦	新任主査級研修	網走総合庁舎	H18. 7. 6～7
加藤 和憲	職務換え職員研修（前期）	N T T北海道セミナーセンター	H18. 7. 19～21
田中 常喜	採用2年目職員研修	網走総合庁舎	H18. 8. 24～25
高倉 仁司	専門研修（会計事務職員）	北海道立青年の家	H18. 9. 11～15
加藤 和憲	職務換え職員研修（後期）	N T T北海道セミナーセンター	H18. 10. 25～27
中東 淳	農業機械高度利用研修	北海道立農業大学校	H18. 12. 11～15
柳沢 朗	農業中核研究員養成研修	農林水産技術会議事務局筑波事務所	H19. 1. 17～19

4 職場研修

研修会及び講習会名	講師名	開催日
交通安全講習会	北見警察署訓子府駐在所長 潮見 修臣	6月26日
公務員倫理に関する職場研修	北見農業試験場作物研究部長 吉良 賢二	11月28日

5 国際交流

交流事業名	招聘及び派遣内容	来場及び派遣職員名	期間
韓国自治体交流事業 （道産技術発信事業）	韓国慶尚南道の農業調査 韓国慶尚南道農業技術院 ほか生産流通加工現場	北見農試技術普及部 主査 五十嵐 強志	H19. 3. 20～3. 24
JICA集団研修			H18. 10. 13

Ⅶ そ の 他

1 技術体系化チーム

(1) 地域水田農業改革実践支援事業－北見地域における土地利用型野菜の導入・定着－

技術体系化チーム	連 携 機 関
総括責任者：東田修司 チーム長：◎柳沢 朗 普及指導員：大久保利道 主 査：○五十嵐強志、江部成彦 研 究 員： 作物担当：西田忠志、野田智昭 土壌肥料担当：中村隆一 病虫害担当：古川勝弘	地域水田農業改革実践支援事業関係者会議 委託農家、JAきたみらい、訓子府町 網走農業改良普及センター(本所) 網走支庁農務課

(2) ばれいしょの大規模省力高品質生産システムの実証－斜網地域における大規模省力高品質生産システムの実証－

技術体系化チーム	連 携 機 関
総括責任者：東田修司 チーム長：◎柳沢 朗 主 査：五十嵐強志、○江部成彦 研 究 員： 作物担当：入谷正樹、藤田涼平 土壌肥料担当：三浦 周	津別地区協議会、斜里地区協議会 委託農家、JAつべつ、JA斜里町 津別町、斜里町 網走農業改良普及センター美幌支所、清里支所 網走支庁農務課 十勝農試技術体系化チーム

(3) 革新的農業技術導入促進事業－後作緑肥導入によるたまねぎ畑の窒素負荷低減対策の実証－

技術体系化チーム	連 携 機 関
総括責任者：東田修司 チーム長：◎柳沢 朗 普及指導員：大久保利道 主 査：五十嵐強志、江部成彦 研 究 員： 作物担当：西田忠志、野田智昭 土壌肥料担当：鈴木慶次郎、○唐 星児 病虫害担当：山名利一	持続性の高いたまねぎ生産推進協議会 委託農家、北見地区玉葱振興会、 JAきたみらい、JAえんゆう、関係市町村 網走農業改良普及センター本所、遠軽支所、 美幌支所、網走支庁農務課

注) ◎は主査、○は副主査。

2 表彰・受賞

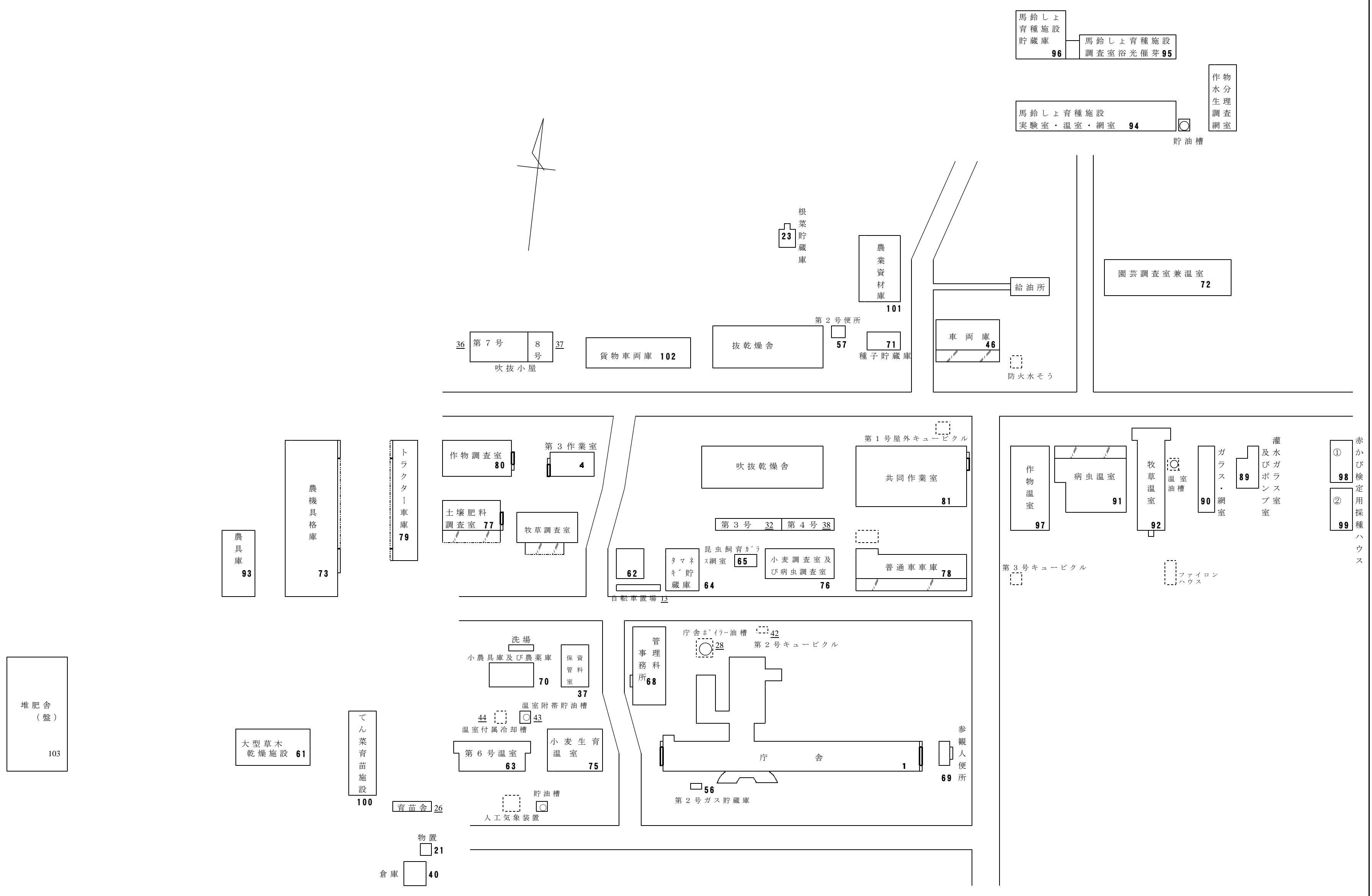
なし

3 行事

月日	行 事 名	月日	行 事 名
4月 3日	発令内容通知	10月16日	オホーツク地域農業支援会議
17日	農政推進会議 体系化チーム口頭辞令交付	18日	オホーツク地域農業支援会議
19日	植物防疫事業推進会議 指定試験主任者会議	23日	オホーツク地域農業支援会議
20日	北見施肥防除合理化推進連絡協議会総会	24日	オホーツク地域農業支援会議
24日	農政部と場長との意見交換会	11月10日	北海道農業試験会議殺菌剤殺虫剤分科会
26日	網走支庁管内農政推進会議	24日	道産小麦品質向上プロジェクト試験成績 検討会
28日	網走地方農業気象連絡協議会 発令内容通知	28日	農業新資材（新肥料・土壌改良材）事前 検討会議
5月 9日	オホーツク地域「環境にやさしい農業」推 進協議会総会	12月 1日	農業試験場長会議
16日	北見農林統計協会定期総会	2日	日本育種学会・日本作物学会北海道談話 会
22日	農業試験場長会議	19日	病虫害発生予察事業検討会施防成績検討 会
26日	道立試験研究機関連絡会議総会	20日	網走支庁農業改良普及活動懇話会
6月 1日	全国農業関係試験研究場所長総会	1月22日	北海道農業試験会議（成績会議） ～26日
6日	北海道農業試験会議（研究課題検討会） ～9日	2月 1日	北海道農業試験研究推進会議本会議
21日	北網圏農業談話会総会	5日	北海道農業試験研究推進会議（畑作部会）
28日	網走地方農業気象連絡協議会	6日	北海道農業試験研究推進会議（水田園芸 畑作部会）
7月 3日	北海道ブロック指定試験主任者会議 ～4日	8日	作物研究推進会議いも類・資源作物技術 研究部会
7日	北海道小麦立毛検討会	14日	NATEC研究交流会
20日	農業試験場長会議	15日	新技術発表会
8月10日	たまねぎセミナー	3月 5日	北海道農業試験会議（設計会議） ～9日
26日	北見農試公開デー	13日	北網研農業談話会シンポジウム
9月 1日	北海道農業試験会議（秋播小麦設計会議）	15日	たまねぎセミナー
6日	作物試験研究推進会議冬作物部会	26日	農業試験場長会議
7日	NATEC研究情報交換会		
10月16日	臨時農業試験場長会議		

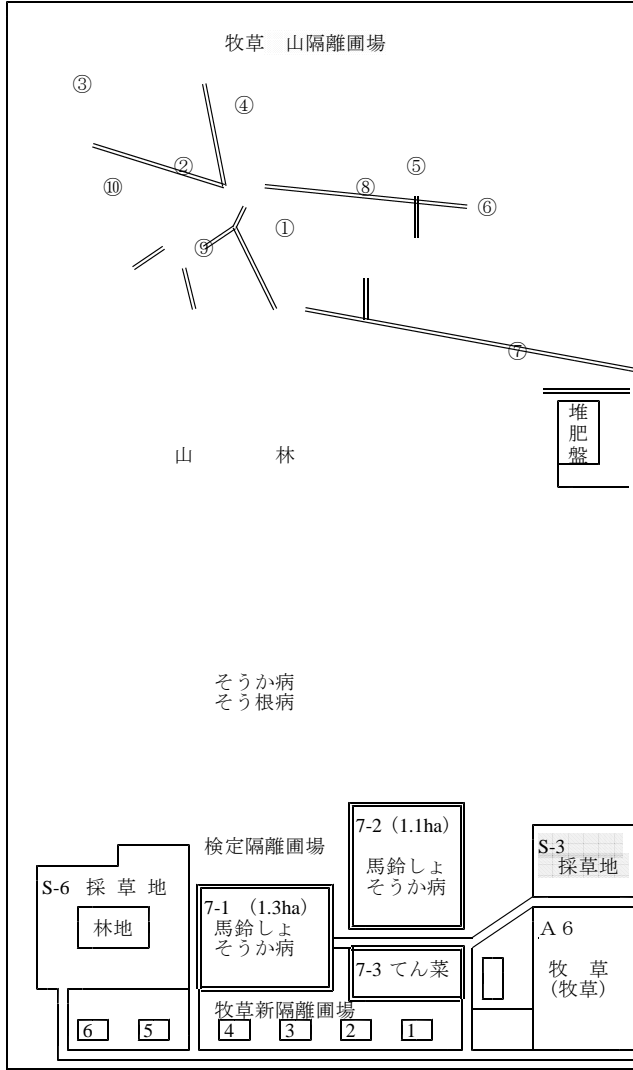
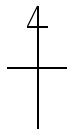
4 建物配置図

馬鈴薯育苗施設付属設計付属
合併浄化槽



赤かび検定用採種ハウス
① 98
② 99

5 圃場配置図



S-1 採草地					
1-1 混播牧草 機対応圃場	1-2 有	1-3 緑肥 シロカシ	1-5 緑肥 大豆	1-7 緑肥 大豆	1-9 馬鈴 しょ
S-2 採草地		1-4 秋播 小麦	1-6 春播 小麦	1-8 普通 エンバク	1-10 緑肥 トウモロコシ
		2-1 エンバク	2-3 シロカシ	2-5 手亡	2-7 豆類
		2-2 大麦	2-4 ハゼリソ ウ	2-6 秋小	2-8 ハゼリソ ウ
		4-3 緑肥 シロカシ	4-4 緑肥 大豆	4-7 緑肥 ハゼリソ ウ	4-8 普通 エンバク
4-10 牧草		4-1 春播 小麦	4-2 春播 小麦	4-5 たまねぎ	4-6
4-12 牧草		4-11 ハウス・ コンクリ ート枠	3-4 シロカシ	3-8 大豆	3-12 秋小
建物敷地		3-3 シロカシ	3-7 大豆	3-11 秋小	3-16 トウモロコシ
		3-2 シロカシ	3-6 そば	3-10 春小	3-15 エンバク
		3-1 シロカシ	3-5 そば	3-9 春小	3-14 大豆
					3-13 大豆
				3-20 トウモロコシ	3-19 トウモロコシ
				3-18 馬鈴薯	3-17 馬鈴薯

建物敷地		温室等敷地		温室等敷地		6-1 (病)	5-1 (栽)	5-2 (牧)
倉舎		コクリート枠 コクリート枠		タマネギ ハウス		予察圃		5-2 (牧)
		6-2 (麦) 秋播小麦		6-3 (麦) 春播小麦		6-4 (管) 草地		5-3 (病) ハゼリソ ↓ 秋播小麦
前庭		6-5-1S コーン		6-6-1S コーン		6-7 (病)		5-5 (栽)
		6-5-2 大豆		6-6-2 大豆		6-10 (栽) 馬鈴しょ		5-7 (病) 春小 豆
牧草隔離圃場		6-8 (栽) ハリーベッチ 有機タネ		6-9 (栽) テンサイ 緑肥 大豆		6-10 (栽) 緑肥大豆		5-8 (管) 混播牧草 (H17 造成)
		6-11 (栽) 大麻等		6-12 (栽) 秋播小麦 緑肥大豆		6-13 (病) 採種 えん麦		5-9 (病) しい タマネ ギ
A 1		大 麦 (麦類)						
A 2		牧 草 (牧草)						
A 3		公 宅 敷 地 (弥生 S2)						

至置戸 南 8 線 (道 道) 正門 至北見

B 6-1 トウモロコシ (牧草)	B 5 てん菜 (畑園)	B 4 馬鈴しょ (馬鈴しょ)	B 3 馬鈴しょ (馬鈴しょ)	B 2 トウモロコシ (地)	B 1 トウモロコシ (地)
B6-2 草 地					
B6-3 牧 草 (牧草)					

A 5 秋播小麦 (麦類)	A 4 秋播小麦 (麦類)	D 3 野生エンバク (管理)	D 2 春播小麦 (麦類)	D 1 緑肥シロカシ (管理)	林地 (沢)
					S-4 採草地

C 6 緑肥大豆 (管理)	C 5 緑肥大豆 (管理)	C 4 豆 類 (畑園)	C 3 トウモロコシ (地)	C 2 緑肥大豆 (管理)	C 1 緑肥大豆 (管理)
---------------------	---------------------	--------------------	----------------------	---------------------	---------------------

第 8 圃場 (旧水稻園)		公宅用地 (若葉 101)		用水路
8-1 タマネギ	8-3 タマネギ	S-5 採草地		
		公宅用地 (若葉 99)		

北海道立北見農業試験場年報 平成18年度

平成19年6月発行

北海道立北見農業試験場

場長 玉木 哲夫

〒099-1496 北海道常呂郡訓子府町字弥生52番地

ダイヤルイン 畑作園芸科 (0157) 47-2483

馬鈴しょ科 (0157) 47-2149

麦類科 (0157) 47-3806

牧草科 (0157) 47-2633

管理科 (0157) 47-2158

栽培環境科 (0157) 47-2565

病虫科 (0157) 47-2148

技術普及部 (0157) 47-2252

総務課 (0157) 47-2146

ファックス (0157) 47-2774

HPアドレス

<http://www.agri.pref.hokkaido.jp/kitami/>
